
君が壊れた世界で

新藤光太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が壊れた世界で

【Nコード】

N1559T

【作者名】

新藤光太

【あらすじ】

僕の不用意な言葉で、彼女は狂ってしまった。

僕にとってはなんの意味もなく言ったそれは、彼女がおかしくなるのには充分過ぎたようだ。

優しかった彼女は、もういない。

暖かい笑みを浮かべていた彼女は、もういない。

そして、なにより。

僕の好きだった彼女は、もういないんだ。

クルクル
狂狂と回り始めた歯車。

「もう……もう止めてくれええええ!!」

「あはははは。分かってる、分かってる。私を試してるんだよね？
本当になんでもやるかどうかって」

——それは、もう止められない。

エブリスタでも公開しているのを、こっちでも公開してみました。

ブローグ（前書き）

若干、グロテスクな描写が入る予定です

ブローグ

――昨夜未明、町外れの工場跡地で男女の死体が見つかりました。見つかったのは、真田恭史（18）。相崎楓（18）。

この二人の他にも、指名手配中の犯人一名。先週、強盗殺人を犯した犯人が一人、見つかっています。

相崎楓が持っていた凶器から、彼女が犯人を殺害したと思われます。

――どうですか、御陵^{ミサキ}さん。彼女が、最近多発していた容疑者連続殺人事件の犯人なんでしょうか？

――え？分からない。なんですか。状況証拠は揃っているではありませんか。

――不可解な点がある？それはどういった場所ですか？

――ええ、ええ。なるほど。確かにそれはありえない事ですね。

ある初夏のニュースより抜擢。

第1話 君と登校

「なんで人を殺したらいけないのかな？」

いつもの登校ルート。いつも横にいる彼女。いつもの朝。そしていつもの唐突な質問。

この問いに、僕が答えられるなんて彼女は思っていないだろう。それまで彼女とは逆方向にある涼しげに流れる川を見ていたが、視線を外して顔だけ横に向ける。

淡い栗色の髪を腰の近くまで伸ばしているが、いつもコロコロと変わる髪型はポニーテールになっていた。猫のように大きな瞳に、桜の花弁のように薄いピンク色の唇。あまり活発的に動く方ではないので、肌の色は白い。

それが僕の幼なじみである、アイザキカエデ相崎楓。今年で18歳の高校生である。

「うーん、そうだなあ。やっぱり人が人を殺すのは、同族同士であり気分の良いものじゃないからね」

こんな質問に答えなど持ち合わせていない。だから、なるべく当たり障りのない程度で返す。

しかし彼女は、頬をハムスターのように膨らませると、

「ちゃんと考えてよお。私はこれで悩んでいるんだよ？ だって、虫とかなら、みんな平気で踏んじやうよね？ だったら、なんで人間は駄目なの？」

桜吹雪の中、なんで僕達はこんな物騒な話をしてるんだろうか。周りから白い目で見られている気がするが、それは勘違いではないだろう。

「ねえ、聞いているの、タカフミ恭史！」

「ああ、聞いているよ。……どうせ、昨日の刑事ドラマに感化されたんでしょ？ あれ、熱血刑事が、最後には命の大切さを語るからね」
「あつ、バレた？ あはははは。凄いね」

ポニーテールの髪型を揺らしながら、彼女は人の目など気にせず
に笑った。

——春の暖かい風が頬を撫でる。その気持ちよさに目を細めつつ、
横を歩いている楓を横目で盗み見る。

彼女も風に遊ばれている髪を片手で押さえつけながら、僕と同じ
ようにしていた。

それから互いに無言で細い砂利道を歩き続け、時折車道を走る
車の音とすぐ横を流れている川の声を聴き続けていた。

この穏やかな時間。それがずっと続けばいいと心の底から願う。
これを守るためなら、僕はなんでもするだろう。

砂利道が舗装され始め、道も広がり、さっきまでまばらだった人
が段々増えてくる。もう少しで学校だ。僕は軽く伸びをしながら歩
き、朝の陽光を全身に浴びる。とつても今更な行為だが、したいの
だから仕方がない。

そんな事をしていると今まで黙っていた楓が、いきなり僕の目前
に立ちはだかるように動いた。

「朝って、なんか凄くのんびり出来るよね。風も気持ちいいし、陽
の光も暖かいし」

「……要は、楓は今、眠いって事かな？」

「ありやりや。またバレちゃった」

と言いつつ、彼女は右手で口元を隠しながら小さく欠伸をする。
暖かいから眠くなる。まるで猫みたいだが、ここは黙っておく。

校門を潜り抜け、僕達は学校へと足を踏み入れた。

朝練をしているサッカー部員の横を通り抜け、前方に見える生徒
玄関を目指す。

「みんなは、朝から元気だね。眠いのは私だけかな？」

目を擦りながら楓は汗を流している生徒を見つめていた。

「いや、楓だけじゃないよ。僕だって眠いさ。でも、ああやって体
を動かしていると、脳のスイッチでも切り替わるんじゃないかな。

……でも、授業中に寝てる人もいるけどね」

そんな他愛のない話をしていると、玄関にたどり着いた。

左端の方に三年生の下駄箱があるので、そこまで歩き、外靴を脱いで中靴と履き替えるために鉄製の靴箱を開ける。

と、その時。ドサドサツと音がした。もちろん、僕の箱からではない。

女子用の靴箱。僕から見て右にあるのだが、そこからののだ。

「うーん。まただあ……」

楓のうんざりした声が聞こえてくる。これは最早、朝の風景にさえなりつつある光景だ。

毎朝毎朝、彼女の靴箱には部活の勧誘チラシやら今ではちよつと古いラブレターなどが敷き詰められている。その全部を楓は断っているのだが、よくもまあ、諦めずに続けるよね。僕だったら、一回目で止めるのに。

というか、もう三年生で、後三ヶ月もしたら引退なのに勧誘している部活は楓をどうしたいのだ。

モテモテ少女は、ぶつぶつ文句を言いながらも落ちた手紙を一枚一枚拾い上げ、あて先を確認。断るための言葉を探し始めた。

「楓はモテるねー。僕なんかは足元にも及ばないよ」

これもいつもの言葉。朝が来るたびに、僕はこれを言っている気がする。

楓は僕の言葉に、水をパンパンに入れた水風船のように頬を膨らませると、

「むう……そんな事は言わないで欲しいかな。私だって、言いたくはないけど少しは迷惑してるんだよ？」

少しは、ね。完全に迷惑だと思っていない辺りが、実に彼女らしい。

楓はいくら自分に対してデメリットになるような事でも、それが相手からしたら精一杯努力した結果だったなら、ないがしろにするような性格じゃない。

だから部活勧誘やラブレターにも一々返事をしているし、断りの

言葉もなるべく相手を傷つけないように選んでいるらしい。

そんな彼女の性格が異性どころか同姓にも人気があり、僕としてはあまり面白くないのが本音だ。

だからこそ、さっきのセリフを毎日のように言ってしまったては、今みたいに少しすねたような声の楓にたしなめられるのだ。

「あー、ごめん」

いつものように軽く謝る。楓はこれでも別に気にしないだろう。だって、毎日の出来事なのだから許してくれるだろう。

それを証明するかのように、楓は花が開くようにゆっくりと微笑み、

「いいよ、別に。さあ、早く教室に行こう？ 遅れちゃうよ」

「そうだな。もうすぐ時間だ」

僕はポケットから携帯を取り出し、サブディスプレイに時間を表示させながら言った。

それから僕達は急ぎ足で自分達の教室に向かう人々に混じり、同じような速度で歩き出す。

教室に着くと、もう既にほとんどの人が集まっていて、それぞれのグループで話し合っていた。

しかし僕の後ろにいる楓が一步教室の内側に踏み込むと、みんな一斉にこちらを振り向く。

別に僕が注目されているわけではない。そんな事は分かっている。みんなは楓を見ているのだ。

彼女は学校内で人気者だ。それこそ、ラブコメとかの小説でよくある、『彼女にしたい女の子ランキング』とかあったら、『冗談抜きでぶつちぎりのトップに輝く事だろう』。

「みんなおはよう」

楓がにこやかに挨拶すると、クラスメイトは満面の笑みで挨拶を返す。

そして僕が入ると、幼なじみの時ほどではないが、それなりに挨拶をしてくれた。

この差に少しばかりの虚しさを感じながらも、とりあえず自分の席……窓際最後尾の絶好の位置に移動する。

それから鞆の中に詰め込んでいた教科書を取り出し、一時間目に使う分だけを残して他のを机の中に仕舞っていると、廊下側の一番前の席から楓が歩いてくるのが見えた。

僕と楓の机は驚く程、正反対の位置にある。僕が窓際なら彼女は廊下側。僕が最後尾なら楓は最前列。

なにがどうなっただろうなっているのか。まあ、これは運なのだから仕方が無い。

文句を言うのなら、始業式早々席替えをした先生か。それともくじを作った学級委員長に言うべきだろう。

「うーん。やっぱり席が離れていると、寂しいね。私、恭史の近くがよかったのに……」

……きゅん。

いや、冗談だけど。少しドキツとしたのは本当だ。

予鈴が鳴り、楓は自分の席に戻っていく。僕は揺れる彼女のポニテールを見ながら、静かに嘆息した。

僕もどっちかっていうとあいつの近くが良かった。だって、そうでもしないと、楓の近くに男が寄るわ寄るわ。あー畜生。

それを見ていると、少しだが不機嫌になる。これが嫉妬という醜い感情だと分かっていながらも、それを止める事は出来ないのだから仕方がない。

うん。分かっている。僕は彼女が好きなんだ。

楓がどう思っているかも、その感情は断ち切れない。

思えば、小さい頃から一緒にしてなにをするのも一緒だったのだ。こんな気持ちを伝えられるものじゃない。

僕だって最初はこの気持ちを否定していた。楓に対する愛情は、家族に対するものと同じものなんだと。そう自分に言い聞かせて、

高校生まで生きてきたのだ。

そう。中学生まではそうやって自分を騙し続けていた。

だけど、楓は成長するに連れて、どんどん綺麗になっていく。

本当にこれがあの楓なのかと。何度も何度も目を擦っていた。

いつも近くにいるのに、いつも遠くにいる存在。

手を伸ばせば届く距離にいるのに。いくら手を伸ばしても届かない存在。

それが彼女だった。

一時は、彼女に追いつくために僕も頑張っていた。

サッカー部に入って、活躍すれば近づけるのではないかと思い、毎日汗だくになって練習をしていた。

そして、練習のおかげが、僕はレギュラーになって中体連に出た事もある。

だけど、それでも彼女に近づく事は出来なくて。僕なんかがどんなに努力しても離れるばかりの距離。

僕には近づけない。そう思い知らされた。だけど、それでもまだ諦められない。

諦めようとしても、頭が否定する。どうすればいいんだよ、本当に。

退屈な授業が終わり、昼休みがやってきた。僕は母さんが作ってくれた弁当を鞆から取り出し、机の上に広げた。

しかしすぐには食べずに、しばしの間待っておく。

楓は両親がいないため、自分でいつも作ってきているのだが、今日はそれを忘れてしまったようで今は購買にパンを買いに行っている。

自分の机に頬杖をつき、窓の外を眺めながら彼女が来るのを待っている、他のクラスメイトの会話が耳に入ってくる。

「ねえ、知ってる？ 昨日この辺に殺人事件の犯人が逃げて来たんだって」

「うん。知ってる知ってる。そのせいで、いつもの登校ルートに警察一杯いたよね」

「そうそう。怖いよねー。私凄く不安なんだけど……」

ふーん。殺人犯ね。僕には余り関係ないかな。

いくらこの街に逃げて来たからって、僕が遭遇する確率なんて砂漠の中で小さな宝石を見つけたら事くらい低い数値だよね。

そんな事を考えながら空に浮かぶ、白い絵の具を垂らしたようにポツポツと浮かぶ雲を見上げる。

ゆっくりと動いていくそれは、とても和やかで平和だった。

この空のどこかに、そんな凶行を起こした人がいるとは、にわかには信じられない。

そんな事を考えていると、教室の後ろ扉から見覚えのある姿が片手に焼きそばパン、もう片方にはパックのジュースを握ってやってきた。

「ごめんごめん。恭史。待った？」

「いや。全く」

楓はニコニコ笑いながら僕の前の席をくつつけて、そこに腰を下ろした。

「それじゃ、いただきまーす」

楓がパンの袋を破いて、焼きそばパンを少しずつ千切って食べ始めた。

僕も弁当の蓋を開け、彼女のニコやかな笑みを見ながら中身を食べる。

窓から侵入してくる優しい風。とても暖かくて眠くなる。

睡魔が僕の頭の上を走り回り、寝てしまえと何度も囁いてくる。

それに従い、段々と思惑能力が停止してきた。瞼が勝手に閉じようとする。

どれだけ目を見開くために力を入れても、睡魔は瞼の辺りだけ重力を何倍にもしたらしい。

重たい。

目の前で美味しそうにパンを食べている楓の姿がドンドンぼやけてくる。

もう抗えないと思い、目に力を入れるのを止めた。

しかし、眠るまでは至れない。

なぜなら。

「おい、恭史。起きてる？ 寝たら駄目だよ？」

楓が僕の方に身を乗り出して何度も頬を叩いたり、目の前で手を振っているのが原因だ。

彼女にこんな事をされたら目を覚ますに決まっている。

むしろ起きない方がどうかしてるね。眠り姫も、王子様のキスなしで飛び起きた後、楓に仕えるだろう。

だって、この顔が目と鼻の先にあるんだよ。驚きとドキドキのあまり、心臓が口から飛び出してしまいそうだ。

僕は必死に目をこすり、微かに残っていた睡魔を銀河の彼方に放り投げる。

「大丈夫だよ。起きてる起きてる」

僕はそう言ったが、彼女はなんだか訝しんでるような視線を僕に向けると、

「本当に？ なんだか嘘っぽいな」

と、イタズラを思いついた子供のように笑った。僕はその笑顔を直視しないように顔をそらした。

別に嘘ではないのでなにも心配する事はないのだが、この表情をしている楓は簡単に嘘を見抜いてしまうのだ。

まあ、もうちょっとで眠りそうだったのは本当だけだね。

ご飯を食べ終わり、残りの昼休みを雑談しながら潰す。

話す内容がなくなってきた所で、僕はさっき小耳に挟んだ話題を提供してみた。

「なあ、楓。この街に殺人犯が逃げてきたって話、知ってる？」

それまで楽しそうに微笑んでいた彼女は、驚いたように目を見開くと、

「え？ そうなの？ そんなの、ニュースでやってないよね？ 警察の人も通学路では見かけなかったし……普通、そんな怖い人が逃げてきたら、お巡りさんとかが街中をパトロールしてるよね？」

と、疑問に思った事を次々に言葉にする。

楓は意外とこういう話が好きだ。

読んでいる小説や漫画はほとんど推理・ミステリー物だし、実際に起きた事件で謎があると、時々自分の考えを僕に話してくる事もある。

僕もこういった話はどっちかというと好きな方だし、彼女の推理を聞くのも楽しい。

……ほとんど物理的な現象を無視した考えを言うてくるからね、こいつは。

なんだっけな。何ヶ月か前に推理小説でよくあるような密室殺人がどっかの街で起こったんだ。

その時の彼女の考察はこうだ。

『犯人は壁をすり抜けたんだよ！』

こんな事を、胸を張って堂々と、しかもクラスの中で彼女は言い放った。もちろん、常識人である僕はそれに反論したが、楓の、

『じゃあ、恭史が私にも納得出来るような推理を披露してよ』

という言葉になにも言い返せなくなった。

いくら推理物が好きだと言っても、現実世界で起きた事件を解決するのはかなり難しいに決まってる。

大体、ああいうもので養われる知識と言ったら、専門用語か血の飛び方、身長を推測するなど。普通に警察でも簡単に出来そうなものばかりだ。

いや、だからと言って推理小説を読むなという意味ではない。むしろ僕はドンドン人に薦めて行きたい。

専門知識なんてなんの役に立つんだよとか言わずに、非日常を求

めている人は是非とも読んだほうがいいと思う。

推理小説って、殺人を題材にしているのが多いから、いつ自分の身近で起きてもなんら不思議ではない。事実、僕も昔、それに遭遇した事があるし、悲惨な状況を見た時もある。

幼かった自分には刺激が強すぎたせいで、脳が無意識の内に口ツクをかけているのかは分らないが、記憶が不明瞭なんだけど……あの時に感じた感情は絶対に忘れない。

と、少し話が脱線したけど、推理系の小説やマンガなどで起こっていることは、自分の知らない場所でも頻繁に起こっている。

違うのは、創作のように緻密なアライトリックや密室を暴く有能な探偵がいない事くらいだ。

まあ、犯行に使われたであろうトリックやらなんやらは、模倣犯が出たら困るだろうからニュースとかには報道規制がかかっているだろうけどね。

「恭史、大丈夫？ なにか考え事？ 悩んでるんなら、私に相談してくれてもいいからね」

「ん、ありがとう。なんでもないよ。それよりも、喉が渴いたな。ちよつと買ってくるから待ってて」

僕は立ち上がり、一階にある自動販売機のあるロビーへと向かう。

一階にある自動販売機の前に行くと、一台しかない機械の前に先客がいた。

「あつ、東条さん。こんにちは」

「ん？ おおー、真田くんじゃないか。こんにちは、こんちはー！ 元気かい？」

「うん、元気だよ。東条さんも相変わらずだね」

トウジョウユミ
東条由実。今年は僕と楓とはクラスが違うが、一年、二年と、二年連続で同じクラスだった人だ。ちなみに中学では三年間一緒だったりする。

ショートカットにしている黒い髪が彼女がどれだけ元気なのかを

表していて、大きな瞳をいつも笑顔で細めている、とても元気がある女の子。

陸上部に所属しているので、小さいながらもひきしまった体だ。

「あれあれー？ なにか少しだけ元気ないんじゃないのかな？ 大丈夫？ 大丈夫？」

「あはは、なに言ってるの。僕は今日も元気だ」

「うーん？ まあ、真田くんがそう言うのなら、そうなんだろうね！ じゃあ、私はこれで。じゃあね、バハハイ」

大きく手を振って教室がある二階に上っていく東条さん。ハイテンションすぎて着いていけない時があるが、今日はいつもの二割増しくらい元気だ。

なにか良いことでもあったのだろうか。

「あつ、楓待たせてるんだ」

考え事をしている場合じゃなかった。早くジュース買って帰ろうと。

パックのオレンジジュース片手に教室に戻ると、楓はさっきまでいた席にはいなく、変わりに女子グループの輪の中心にいた。

しかし、談笑している気配でない。なにか、全員が深刻な顔をしてお互いに話しかけている。

僕の悪口でも言っているのかと少々、勘操ったが、そこはやはり僕の勘だ。

あてにならないものを上げると言われたら、最近の天気予報をぶちぎってトップに君臨するほど僕の勘は当たらないのだ。

別に女子から嫌われているわけでもないのに、僕はそのグループに近づいた。

「なにか重大な話でもしてるの？」

僕がもてる限りの営業スマイルを顔中に貼り付けて話しかけると、一番近くにいた女子が返答してくれる。

「あつ、真田くん。ほら、この近くに殺人犯が逃げて来たじゃない？ ニュースとかに取り上げられた被害者の写真なんだけど、全員可愛い娘なんだ。それで、この地域では相崎さんが一番危ないよ、言ってた所だよ」

なるほど、年下で可愛い娘が好きなんだなその犯人さんは。

いや、僕らより年上だと決まったわけじゃないけど。

だけど、その犯人は狂ってる。

そんな奴に狙われて命を落とした未来ある女の子が可哀想じゃないか。

人を殺していいのは、殺される覚悟があるものだけだ。

なんかの本の受け売り。とくに意味はない。知識を晒したかっただけなんです。

「それでね、真田くん。いつも相崎さんと一緒に帰ってるじゃない？ もし変な人に会ったら、相崎さんを護れるの？」

……護れません。

僕は犯人に瞬殺されてグッバイ。あの世で楓を迎える準備でもしてるさ。そんなの嫌だけど。

こんな僕でも大切な人の身代わりになるくらいは出来る。

あつ、でも。どっちにしても僕は死ぬじゃん。

「うーん。善処します」

「善処するだけじゃ駄目だよ！男の子なんだから」

男というだけで、身代わりにならなきゃ駄目ですかね？

男女差別だ。これは裁判にいくべきだ。

男女差別についての法律を脳みそから絞り出し、これで裁判に勝てるだろうかいや勝てないという結論に達したところで、輪の中心にいる楓が声を上げた。

「駄目だよ。恭史が死んじやったら、私、嫌だからね！ だから危ない事はしなくていいよ」

うーむ、そうか。

楓は僕が死んだら悲しむか。だから危ないことはしないでいいん

だな。

よし、分かった。

「絶対に助けてあげる！」

『危ないことはしないでいいって言うてるのに！？』

なぜかクラス全員からのツツコミを受けた。こんな時だけ妙に息がピッタリな人達だ。

だって、ほら。入るなって看板があると入りたくなるじゃん。

逆に、入っていいよって言われたら全く興味失うじゃない。今の感覚もあれに近いね。

クラス全員からのツツコミという初体験をしてから時は経ち、今は放課後になっていた。

まだ春なので陽が落ちるのは早い。

赤い光と暗闇が支配する人気がない教室。

そんな場所に僕は一人で窓際に立っていた。

理由は簡単。楓に残っているよう言われたからだ。……ハイ、嘘です。

本当の理由は、ただ単に六時間目の授業から、ついさっきまで寝ていたからである。

誰か一人ぐらい僕を起こしてくれてもいいのだが、それは楓によって阻まれていたのだろう。

あいつは、就寝中の僕をあまり起こしたくないらしい。下手をすれば朝の時間がない時にまで寝顔を見ているような奴だ。

で、なんでさっさと帰らずに窓際でボーっとしているのかというと、後輩に呼び出された楓をここから眺めているわけだ。

この教室から下を窺えば、校舎裏がまんべんなく見下ろせる。

近くに植えられている桜の木から離れた薄いピンク色の花弁が、普段は砂利だけの道に豪華な絨毯のように敷き詰められている。

そんなピンクの絨毯の上に、二人が立っていた。

一人は僕のクラスの子がカッコイイなどと黄色い声を出していた二年生の男の子。

そしてもう一人が人気少女でモテモテ少女でほぼ万能少女である楓だ。

ここからではなにを喋っているのかサッパリ分からないが、それでも楓が首を横に振っているのが見える。心の中で安心の息を吐きつつ、後輩くんには追悼の念を送っておく。

そのままボーっと教室に残っていると、廊下の方から足音が聞こえてくる。

楓なのかと思い、そっちの方に視線だけを向ける。しかし、教室の扉の隙間から顔を出したのは僕が待っている彼女ではなく、黒いショートカットの女の子、東条さんだった。

「あれれ？ 真田くんかい？ こんな時間になにしてるの、なーにしてっんの」

「ちよつと寝過ぎちゃって。東条さんは？」

「私はね、この近くで探しモノをしていたら、学校に忘れ物をしたのを思い出したのだよつ。で、取りに来たら人の気配がしたから様子を見に来たのだ。ふふふどうだい真田くんっ、私には人の気配がわかるのだよつ。すごくないかい？」

「そうなんだ」

駄目だ。寝起きだからなのか、東条さんのハイテンションに着いていけない。

このまま会話をしても疲れるだけなので、彼女には帰ってもらうのが一番だ。

「東条さん」

「なにかね？」

「……今日はなんだかテンション高いね」

帰ってもらったための口実が思い浮かばなかった。だから、また自分から疲れるためにするような会話の種をまいてしまった。

東条さんは今まで以上に目を輝かせ、顔全体に誰でもつられて笑

いそうになる笑顔を浮かべた。

「おお、分かるかい。さすが真田くん。私が見込んだ男だけはあるね、うん。実はね、私が小さい時から探していたモノがようやく見つかったのだよ！ だからもう、嬉しくて嬉しくて。にやはは」

「それは良かった」
「帰りたいです。」

「でもでもー！ 私の探しモノはまだまだあるのだ！ だから、また探しに行かなくちゃ。じゃあね、真田くん！ お元気でー！」
「あつ、うん。さいなら」

嵐のようにやってきては嵐のように去っていく人だ。

あそこまでテンション高いと、人生楽しいんだろうな。

「うーん？」

楓がやって来ない。先に帰ってしまったのだろうか。

別に待っててと言われていたわけではないので、楓が帰路に就いていても僕にはなんも文句は言えないけどね。

さて、どうしようかな。帰っちゃおうかな。このまま夕方の教室にいても、ドキドキワクワクイベントが発生するなんて思えないし。
「帰って寝よう」

机の横についているフックのようなものに提げていたカバンを取り、肩にかける。

そこから歩いて生徒玄関に。

中靴を外靴に履き替え、外に出た。

朱色の光が玄関前のアスファルトを赤く染めている。春独特の強く生暖かい風が頬を撫でてくる。

制服の隙間から侵入してきては、好き勝手に暴れて出て行く。まるで東条さんみたいだ。

朝に楓と歩いた道を引き返していく。その時には無かったものが、今の時間には出沒していた。

片側二車線の道路。中央分離帯を挟んだ向こう側には、パトカー

が何台も通り過ぎていく。

なにがあつたのかは明白だった。

昼にしたクラスメイトとの会話を思い出す。

『連続殺人犯がこの街に逃げてきてるんだって』

その搜索を、あのパンダカーはしているのだろう。

森羅万象におけるなにもをも寄せ付けない神秘さに憧れ、神様を信じるかどうかしつこく尋ねてくる宣教師はまさに黒いチヨークのようだが、一石二鳥のように見えたそれは、実は捕らぬタヌキの皮算用的なことなんて誰も信じないような、それでも僕はなにがなんだが分からなくなる前に漁夫の利を狙って失敗してしまった近所のA君が殺し屋になっていた。

そんななんの意味もないし、使い方が間違えまくっているただの言葉の羅列を脳内でキャッチアンドリリースしていたら、あら不思議。

いつの間にかパトカーがたくさん集まっている場所に僕は来ていた。

人が集まっているので、少しずつ掻き分けながら最前列に行く。

「おい、君！　ここは立ち入り禁止だ！」

「あつ、すいません」

今、僕がいる場所は背の高いビルとビルの間にある薄暗く、細長い道の入り口。

警察の人がキープアウトと英語で書かれている黄色いテープを入り口に繋げていた。

「ここでなにがあつたんですか？」

首を伸ばして奥の警官が一杯集まっている場所を見ようとしたのだが、巡查さんにそれを阻まれる。

「一般人に教えることはない。ほら、早く帰って帰って」

「はあ……」

視界は全く効かないが、その代わりに鼻がよく通る。

向こうの方から風に乗って流されてきた匂いが、僕の嗅覚を刺激した。

それは鉄のような匂いだった。

それは、怪我をすると毎回、嗅ぐことになるあの匂いだった。

「……血？」

脳がその匂いの元凶を今までの経験から導き出したと同時に、体が一斉に僕の意味とは無関係に震え始める。

「……ハッ……ハッ」

呼吸が苦しい。

全速力で三百メートルを走った以上に心臓が早鐘を打ち、短い呼吸がさらに短くなる。

「お、おい。大丈夫か？」

血の匂い。

「おい、君！」

血の匂い血の匂い血の匂い血の匂い血の匂い。

「大丈夫か！？」

過去の思い出したくもない記憶が、この鉄の塊みたいな臭いに呼び起こされる。

「……ハッ……ハッ……ハッ」

「誰か来てくれ！ 男の子の様子がおかしい！」

足から力が抜け、人形のように体が崩れ落ちる。地面に四つん這いになりながら、目の前に広がる舗装された道路を見た。

しかし、瞳に映っているのは無感情なアスファルトではなく、赤い、紅い、朱い思い出。

辺り一面に広がる赤い海。床一面を覆い隠すほどのグロテスクな島。

今以上に鼻を刺激してくる、理性が崩壊してしまうほどの悪臭。誰かのすすり泣く声。今にも消え入りそうな、風が吹いただけで

飛ばされそうな、危うさを含んだそれは……。

「……嫌だ」

思い出したいくない。

今ここでやつと忘れかけていた記憶を思い出せば、僕は絶対にこの日常に戻れない。

「大丈夫か！？ 待ってる、今すぐ病院に連れて行くから！」

「……大丈夫です。……ちょっと持病の、『いきなり目眩病』の発作おこしただけですから」

「いや、そんな病名聞いたことがない。いいから、病院に行った方がいい」

「大丈夫です！」

僕はそう叫ぶと、思った通りに動かない体に鞭打ち、その場から走り去った。

蘇りかけた記憶を吹き飛ばそうと、全速力で街を駆ける。

通行人にぶつかっても謝らず、ただただ、あれが脳内で再生されないようにするだけで精一杯だった。

街から、舗装されていない細い道へと出た。通行人なんていやしない。

「……ハア……ハア」

息切れが起き、さっきの時以上に心臓が高鳴る。

「あんな場所に行くんじゃないかった」

好奇心に負けたせいだ。

パトカーがたくさん車道を走っていて、それらが人が集まっている近くのビルを目指している事に気付いてしまっただけは、行ってみたという気持ちが大きくなって、変な言葉を考えながら野次馬根性を発揮したのがまずかった。

それと同じくらいの好奇心もあったのだが……。

「僕はバカか……」

学校で聞いたじゃないか。連続殺人犯がこの街に来ているって。

集団下校にならなかったから、それはクラスメイトが流したデマだと思っていた事はあるんだけど。

しかし、あんなに警察の車があったんだ。

さっきのワードと警察という単語が合わさったのなら、大体は想像がつくじゃないか。

殺人が起きたんだ。

この街で。

無関係だと思っていた僕の近くで。無情に。非常に。異常に。

狂った一人の人間が、同族を殺すという最悪な罪を犯したんだ。

……そう言えば。

「殺された人は誰だったんだろうか」

呼吸を整えながらゆっくりと砂利を踏みしめる。

通行人なんていない、街から僕の家がある田舎へと続くこの道。

いつもなら横に楓がいて、もう少し楽な気分で歩けるのだが、今はいい。

だけど、今は一人の方が良かった。

さっき頭をよぎった言葉。殺された人は誰なんだろう、というものの。

クラスメイトの話が本当なのなら、おそらくは可愛い女の子がその人生を閉ざされてしまったとしたか思えない……。

だけど、可愛い娘なんて、こんな田舎にもいくらでもいる。

それに、なぜ犯人はこんな白昼堂々殺人を犯すなんて馬鹿げた行為に及んだんだ。

昼間に犯罪を起こせば、それだけ捕まるリスクも跳ね上がるというものだ。

明るいのだから目撃者だっているだろうし、フードやなにかで顔を隠していたとしても身体的特徴くらいは当てられるだろう。

もしかして、それらリスクを楽しんでいる……とか？ よく快樂殺人者なんてものもいるんだ。

そんな趣向を持っている殺人犯がいてもおかしくはない。

ギリギリの緊張感を味わいたいから、人目につく昼間を選んで行為に及んだ。考えられるかな。

「……なんで僕はこんな事を考えているんだろう」

探偵にでもなったつもりか？

一般人は一般人らしく普通に暮らしていればいい。こんな事件は警察に任せておけばいいんだ。

それから数分歩いて、僕は家に帰った。親に帰宅を報告してから二階にある自分の部屋へ直行する。

制服を脱いでハンガーにかける。鞆を机の上に放り投げて、薄手のパーカーとジーパンという私服へと着替えた。

それから一階に戻り、居間に入る。母さんがソファに寝転んでテレビを観ていたので、僕もその近くの椅子に腰を下ろした。

煎餅バリバリお茶ゴクゴク。と、専業主婦の楽しみを味わっている母がテレビジョンに顔を向けたまま、今しがた入ったニュースの話題を振ってくる。

「街の方で、殺人事件があったらしいわね。あんた大丈夫？ 結構、学校の近くじゃなかった？」

「うーん。僕は大丈夫だ。ちょっと殺人現場を見て別世界に行っちゃったけど」

無理に平静を装って軽い感じで言ってみた。しかし母にはそれが通じなかったようだ。

「……無理するんじゃないよ」

それでも、それ以上の事は言ってこない。

「僕が無理なんてするはずないよ。ゴミが道端に捨てられてるのをみただけで、すぐさま110番に連絡する男の子だぜ」

「そんな事で警察を呼ばないの」

そんな母さんのありがたい忠告を受けて、僕はさっきからリポーターがやたらと興奮しているニュースへと顔を向ける。

『えー、繰り返します。殺人事件が起きました。この静かな街には似つかわしくない事件が起こって、辺りは警察や関係者で溢れかえっています。犯人は、警察の公表によると、最近この街に逃げたと言われている連続殺人事件の容疑者、不同^{フドウ}集成^{シュウセイ}。被害者は遺体の損傷が激しく、また、身元を確認するものがないため、確認が難航しているとの事です！！』

物騒だな。早く捕まればいいのに。

それにしても、不同集成……か。なんだか聞き覚えがあるような……当たり前か。何週間か前にも、こいつが起こした事件が報道されていたもんね。いや、それ以前から、ずっとずっと前から、僕はこいつの事を覚えてるけど。

不同集成。

テレビから得た情報によると、この人は十年くらい前に僕が住んでいるこの街で初めての犯行に及んだ。

一家惨殺を二件。だが、奴はどちらの家で凶行に及んだ際に、小さな子を見逃している。

一人は友達の家に外泊していたので無事だった。もう一人は、クローゼットの中に隠れていて助かったらしい。

命だけは。

その衣装箱の中にいた子供は、一生消える事がないであろう傷跡を心に負った。

見ていたのだ。

クローゼットの中で。

家族が逃げ惑い、

家族が腕を失い、

家族が泣き叫び、

家族が血を流し、

家族が息絶える。

そんな光景を延々と。

気が狂いそうになるまで。

大声で叫ぶのを我慢して。

……今、その子供は大丈夫。

余りにも悲惨で、凄惨で、無惨な事件だったため、報道規制がかけられた。そのため、本名は全国に知られていない。

それが被害者にとつては唯一の救いだったのだろう。

テレビではここまで詳しくやってなかったけどね。

ほとんどが、子供の頃にした僕の推測だ。この不同集成とかいう名前を聞いたら、段々と思い出してきた。

「さて、と。恭史はなにか食べたいものがある？」

「んー、今は特にないや。出来ればどら焼きが食べたいけど」

「それはお菓子でしょ。母さんは夕飯を訊いてるの」

僕は首を横に振った。食べたいものがないから。

夕飯を食べ終わり、風呂にも入り終わった僕は自室にて漫画を読みふけていた。

普段はラノベとか小説を読んでいるけど、やっぱり漫画も面白い絵があるのだから頭の中で想像しなくてもいいし、作者が考えている背景と不一致する場合もない。

時刻は二十一時をちよつと過ぎた所。

ベッドに寝そべったまま、近くにある窓から外を眺めた。

そこには、街灯がほとんどない田舎には当たり前前の風景が広がっていた。

夜空一杯に広がる星空。そこに一際輝く大きな宝石、月が見えた。学校がある街から二、三キロほどしか離れていないのに、なんでここまで田舎なのだろうか。

もう少し栄えていてもいいのではないかと思えるが、ここにはここならではの良い場所もある。だからこのままでいいのかな、なんて事を考えていたら、ベッドとは反対側にある机の上に乗っけていた携帯が音を奏で始める。

「こんな時間に誰だろ……？」

ベッドから降りて、携帯を取るために少しだけ歩く。近代技術の塊であるそれを開き、ディスプレイに表示されている名前を見たのだが、番号が出ているだけだった。

アドレス帳に登録していない人から来るなんて、珍しい事もあるもんだ。もしかしたら、悪徳業者かもしれないし、出ないほうがいいかな？

……悪徳業者だったらどうしようとか考えていたけど、よく考えたらそんないかがわしいサイト行ってないや、というものに辿り着き、通話ボタンを押そうとした。

けどそこでまた新たな疑問が浮かび上がった。

友達が教えてたらどうしよう。僕を身代わりにするために、この電話番号を献上したのかもしれない。

……電話番号教えるほど仲の良い友達なんて楓と東条さん、明くアキラらしいじゃない事に気付いた。

あの人たちなら信頼出来る。それにしても仲の良い人少なえ、ふははははは。笑えないよ……。

と、こんな事を思考している間にも着信音は鳴り続けていて、とつくに諦めてくれてもいいんじゃないのか？と思えるほど電話の主はしつこかった。

このしつこさは、あいつしかない。そう、明だ。そう言えば、明の電話番号登録してなかった。

仕方が無いので、ピツと通話ボタンを押す。

「もしもし」

「真田か！？　なんだよ、もうちょっと早く電話に出てくれても……」

「ごめんなさい、僕は真田じゃないです。真田二号なんです」

「意味分からん！！　二号だか一号だか知らねえけどよ、緊急事態だ……！」

「パチンコ屋の看板で、パの電気が消えてるのでも見つけた？」

『それが緊急事態の訳ねえだろ!!』

「僕にしては緊急事態なんだ!!」

『小つちえ——!! 緊急事態小せえー!!』

ふう……。やっぱり明をいじるのは面白い。

僕は携帯電話が耳から離れないようにしながら、夜の街中を走り回っていた。

殺人犯がうろついているのだから、夜間の外出は避けるべきだが、今はそんな事を言っている場合じゃない。

「明。楓がいなくなっただって本当なの？」

僕の耳に押し当てている電話から、明が答えてくる。

『ああ、本当だ。東条が相崎の家に行っただけ、電気は消えてるのに鍵がかかってなかったんだってよ!それだけならまだいいさ。少し出歩いているのかもしれない。だけど、夕方に起こった事件のせいだ……どうしても心配になるじゃんかよ』

「そんな……」

なんで東条さんは明に電話をしておいて、僕にはしてこないのかは不思議だが、それは二の次だ。

楓がいなくなった。それだけで今は頭の中が一杯だ。

明の話によると、自分達が知る限りで、楓が行っていきそうな場所は全て捜したらしい。

しかし、そのいずれにも彼女はいなかった。

そうなると当然、さっき明が言っていた事件が存在感を高める。

損傷が激しく、身元も確認できるものがなかったので名前すら分からない遺体。

それが、まさか……。

東条さんは今の考えに行き当たり、今は泣きじゃくっているそうだが、僕は断じて認めない。絶対に認めるわけにはいかない。

明は、自分たちが知っている範囲で捜したと言っていた。

ならば、僕と楓しか知らない場所には行っていないことになる。
考える……どこだ……？

「あつ、そうか！」

僕は一度家に戻り、必要な物を詰め込んだショルダーバックを提げ、そして自転車に乗ってから街とは正反対の方向に向かっている。正反対の方向とはその通りで、僕が住んでいる田舎よりもさらに田舎へと行っているのだ。

理由は簡単。楓がいそうな場所に見当がついたからだ。

明や東条さんには分からない。二人とは中学時代からの友達だ。

明も東条さんのように僕たちとはクラスは違うが、それでも休みの日に遊びに行くことぐらいはしている。

つまりは、結構な時間、あの二人とは一緒にいるのだ。

中学時代からの付き合いである友達が知らなくて、僕と楓という昔からの間しか分からない場所。

中学生よりも前の、二人の思い出の場所を捜しに行けばいい。

そして、小学生くらいの時の思い出の場所といたら、一つしか思い浮かばなかった。

街灯がさつきよりもまばらになり、左右にあったでかい田んぼも姿を消し始め、代わりに雑木林が姿を現し始めた。

灯りは等間隔で離れた位置にある街灯と、僕の自転車から発せられるものだけ。

正直、足がくたくただ。街に行くのに約二キロ。家に帰るのにさらに二キロ。そしてここまでは三キロくらいだろうか。

学校の授業でもここまで走ったりしない。

息が上がリ、ペダルを踏みしめる足に力が入らなくなってきたが、それでも鞭を打ち強制労働させる。

もっ少しで、僕の目的地が見えてくる。

雑木林を抜けると、野球グラウンド以上もある開けた場所へと出

る。

そして、その広場にはでかい家が建っていた。

西洋のお城をイメージでもしているのだろうか。所々に小さな塔が突き出ており、小窓が見える。

街外れにある田舎。さらにそこから離れた位置にある廃墟。

元はどこかの金持ちがバブル時代の昭和に建てたものらしいが、バブル崩壊とともにその金持ちも予算を全て失い、この家を手放してしまっただけらしい。

その後、見た目の豪華さに惹かれて何人もの買い手が見つかったのだが、誰もが長続きしない。

幽霊が出るのだとか。

中には、自分そっくりの人間を見たと言っていた人もいるらしい。ドッペルゲンガーだったの。

話はそれってしまったが、楓と共有している小学生時代の秘密の場所といったら、ここしか思い浮かばなかった。色々あり、落ち込んでいた楓は一人になりたがっていた。無論、僕は彼女を心配して一人にはしなかったけど、その時にここを見つけたのだ。

ここなら殆ど人が来る事もないし、ゆっくりしてられる。

それからというもの、元気になった後の楓や僕は、なにか嫌な事があつたり、悲しい事があつたりした場合はここに来るようになった。

別に今の楓がなにかを抱え込んでいるとは思っていない。しかし、ゆっくりと考え事をしたかったのかもしれない。それだったら、ここが一番のベストだ。

……ここまで来といてなんだが、もしも僕の予想が外れていたらどうしよう。

僕の予想は、勘と同じくらい当てにならない。いや、でも、今回のはちゃんとした理由もあるのだから、当たっている可能性は極めて高い……と思う。

「ええい！！」

なにを迷っているんだ僕は。楓がここにいるかもしれないのだから、行くのは当り前だろう。

ここにいなかったら、記憶を掘り返せばいい。なんなら、幼稚園時代まで遡ってもやるさ。

自転車を漕ぎ、豪華な玄関の前まで行く。獅子の顔の形をしたノックにも使える取っ手を引っ張り、重たい扉を開ける。

——ギイイイ、という。錆びついた嫌な音と共に、闇へと続く口がぽっかりと開いた。

一步、中に踏みいる。

ホコリ臭さが鼻をツンと刺激し、吹き抜けになっている二階の窓から怪しげな月光が侵入してきていた。

僕は鼻水をすすりながら、さつき家へと寄った時に持ってきた懐中電灯を、ショルダーバックから取り出す。

この場で持てる唯一の光源のスイッチを入れて、目を光らせた。

「うわぁ……」

光に照らされて浮き彫りになった中は、昔となんら変わっていない。その事に感激を覚え、思わず声を出してしまった。

僕がいる場所は、でかい四角形のような場所。反対側の辺には、二階へと上がる階段がある。

甲冑やら絵画やら、なんか不気味な置物などがあるが、やっぱり懐かしいと思えた。

小学生の頃、楓とよく遊んでいた空間。二人だけの秘密基地みたいにしていたつけ。

前述の通りに落ち込んでいた楓を、普通の状態にまで持ち上げた後にだけどね。

このお屋敷。一階部分には広いリビングとキッチンがあるだけだ。他の部屋は全て二階にあり、娯楽室もあつたはず。

さてさてさて、一体、楓はどこにいるんだろうと、脳細胞に思い出すように命令しなくても、僕にはなんとなく分かっていた。

楓がブルーな気分でここに来たのなら、ちっちゃかった時と同じ行動をとるはずである。

つまりは過去の記憶からそこにいけばいいと、海馬を鞭で打つ事なく、楓が居そうな場所を過去の記憶から勝手に知らせてくれたのだ。うむ、大変素晴らしい働きである。誉めてつかわずぞ、海馬。

さて、脳の記憶を司る箇所が無償で教えてくれたために、僕はそれに従って扉の近くの床をライトで照らす。

光の輪っかに明るく照らされて不機嫌な埃は、僕が歩きたびに宙に舞い、鼻水垂らしの刑を執行してくる。僕は結構なアレルギー持ちなのである。

「……あつたあつた」

床に積もった埃と埃の間が、やけに大きく開いている箇所を発見。その辺りをさらに注意深く観察すれば、細い切れ目が見える。

これは、地下通路に繋がる入り口である。

四方が一メートルくらいある地下への扉の切れ目を正確に見極め、積もっている埃を足で払う。

袖で鼻元を覆い隠し、あらわになった四角を見つめた。

この扉には取っ手というものがない。しかし、扉を開ける方法は存在する。

四角形の四つ角を左上から右上、右下、左下と軽く叩く。

中央の部分を叩き、その場でコサックダンス……はしない。

中央を殴ったら、左側面と右側面を同時に叩く。

この動作を、一秒の間を空けずに行つていくと、なにやらカラカラと歯車が回る音がしてくる。

それから地下への扉が、微かに横へとスライドされる。

埃を砂のように舞い上げ、スライドさせた僕に対して怒りを露わにする扉様。

一秒の間にほんの少ししか開かないそれに対して、微量のイラつきを覚えながらもジツと待つ。

そして、地面より下への入り口がぽつかりと開く。

「さーてと、楓はここに居るのかな？」

地獄（少し過剰表現あり）への道は、ハシゴのようなものが壁に取り付けられているので、容易に侵入する事が出来る。

まずはその鉄の取っ手を掴む前に、しゃがみ込んで埃の積もり具合を確かめる。すると、埃がなくなっている場所を一本につき二ヶ所発見。どうやらそれは、楓が降りるために使用した形跡のようだ。「うむ。行きますか」

後ろ向きに穴へと入り、慎重に一本一本、足を滑らせないように降りて行く。

埃と湿気が同棲している地下に踏み入る。

ふと上を見ると、自動的に扉が閉まるところだった。

思い出すなあ……。ここに入っただいいものの、扉が閉まったせいで出られなくなった事があつたわけ。その時は二日間くらい出られなくて、地上では誘拐か殺人かとか騒がれてたな。

僕たちは僕たちで、暗闇の中、持って来ていた頼りないランタンの明かりで気が狂わないようにするだけで精一杯だった。

お腹が減ってきては、目の前にいる楓が美味しそうに見えてきたけど、あっちからも肉食獣の視線を無料でプレゼントされてきていたので、行動には出なかつたけどね。

うむ、大変懐かしい。外に出た後に、僕の両親から楓も一緒にお叱りを受けてたわけ。

あの時の楓は少し嬉しそうだった。なんでかは大体、想像がついたけど。

さて、回想はこの辺で終了して、先に進みますか。

この地下は人が一人通れるほどの狭い一本道だ。このまままっすぐ行けば、広間のような場所に出る。

そこにはなぜか生活必需品があるので、おそらくは楓があそこに

いるのだろう。

生活必需品といっても、空の冷蔵庫とか硬いソファだけだね。
一歩踏み出す。

カッーンと靴の音が地下内に反響する。

懐中電灯の明かりを頼りに進んでいく。時々、ネズミの死骸やらなんやらが散見されるが、気にしなくてもOK！
しかし、

「鼻水が止まらない……」

こんなアレルギー培養地下に入るんなら、マスクを持ってくればよかった。

くっそー、海馬め。少しばかり働くのが遅かったようだな。罰として今後、一時間はなにも記憶しないからな。

暇で暇で二ートの気分でも味わうがいいさ、ふはははは。

閑話休題。

楓捜しに尽力を注ぎますか。

と言っても、もうすぐでこの地下で唯一の部屋に到着するわけですが。

肌寒さを感じながら、自分の足音を響かせていく。

この虚しい空間に空虚な自分の足音だけを反響させるのもなんなので、どうせならリズムミカルにやって少しでもこの場を明るくしてみるかとは思っていない。

僕はそんなに性根が明るい方ではないのだ。

歩き、懐中電灯の光を頼りに奥へと進んでいく。

そして見えてきた。細い洞窟の通路のようだった道が、一気に洞穴へと変貌する。

四方をコンクリートの壁に囲まれた無感情な空間は、電灯のようなものがなく暗闇のはずだった。

しかし、今は微かな灯りを見る事が出来た。

それは口ウソクの火のように揺らめき、微風でもその存在をかき消されてしまうような危うさがあるもの。

僕はその光源に近寄る。発生場所はこの部屋にある、石製かと疑うほどに硬いソファの近くからだ。

そこには、リボンを蝶々結びにして、ポニーテールを作っている女の子が座っていた。

それは、僕が捜していた人物で、今まで心配していた少女だった。搜索人物が無事に見つかった事により緊張が解け、今まで内に溜めこんでいた疲れが全て表面に出てきた。

足取りが重くなり、ふらついてくる。思わず床に座り込みそうになったが、それをなんとかこらえた。

「なにしてんの？ 楓」

自分の声が少しだけ震えていた。

ソファに体育座りをしていた楓が、その綺麗な瞳に不安の色を宿らせながら、ゆっくりとこちらに振り返る。

「……^{タカフミ} 恭史。なんでここに？」

そこにはいつもの笑顔はなく、ただただなにかに怯えているような、そんな小動物みたいな顔をしていた。

「…… 恭史。私、恐い」

「恐い？ なにが？」

「だって、この街にあの殺人犯が来てるなんて……嫌だよ。なんでまたこの街に来たの？ なんで……」

「楓……」

ニュースでも話題になっている連続殺人犯・不同集成。こいつの存在が全ての人々を不安にさせているのは言うまでもない。彼女もその例に漏れず……いや、それ以上の不安を胸にかかえているはずだ。

だから、僕は。

「楓、今日のお昼に言った事さ、覚えてる？」

なるべくこれ以上の不安を楓に与えないように、僕は優しく語りかける。

「恭史が言った事？ ……あの、ふざけて『絶対に守ってあげる』って言ったやつ？」

「そう、それ。いやー、でも酷いな、楓は」
「なんで？」

「あんな言葉、ふざけて言わないよ」

「え？ それって」

「うん、楓になにかあっても、僕は絶対に君を助けてあげる。だから、安心して。ねっ」

人を安心させるのに笑顔を使うのは苦手だが、そんな事を言っている場合じゃない。本当に助けたい人なのだから。

僕の言葉で楓が少しでも救われるのならば、たとえ恥ずかしくても口にするしかない。笑顔を作るための苦労なんて、いくらでもしてあげる。

「ふふっ」

やっと楓が笑ってくれた。

もちろん、僕の言葉で全ての恐怖が消え去ったわけではない事は分かっている。

それでも、こんな僕でも楓は信用してくれて、今まで自分を覆っていた感情を少しだけ小さくしてくれた。

「本当に、恭史は優しいんだから」

「ははは」

楓の笑顔に赤面しそうになったので、横を向いて頬を掻く事で意識を背ける。

「……でもね、やっぱり、あまり危ない事はしなくていいからね？ 私のせいで恭史が怪我したら、嫌だよ？」

「あー、うん。肝に命じておくよ」

適当な感じに命じるだけで、強制はしないけど。うむ、やっぱり危険な目に遭っても僕は見捨てないぞ。

決意を固め、楓の前に回り込む。そして手を差し伸べた。

「さっ、帰ろう？ 明とか東条さんが心配してたよ」

「ありやりや。少し悪いことしちゃったね」

少しだけ眉を下げ、楓は少しどころか大変悪い事をしたという風に反省していた。

出来心で作った落とし穴に、大きな人がはまり出られなくなった光景を見ながら反省しているかのような……うん、意味分かん。

楓は僕の手を握って立ち上がった。立つ時に良い香りが鼻を刺激して、少しだけばわんとする。

「大丈夫？ ……近くで見ると、鼻水垂れてるよ」

「アレルギーだから仕方がない」

最後に格好つける事が出来ずに多少落ち込みながら、僕たちは歸路に就いた。

第2話 君と街へ

『恭史！ 街に行こうよ』

楓の搜索アンド発見を行った日から数日が経った日曜日の朝。

僕から惰眠を奪い去ったのは、朝から元気な楓の電話だった。

眠い目をこすり、頬を何度か叩いて脳を目覚めさせる。そして携帯を耳に押し当てて、

「街って……殺人犯がいるんだから、なるべく外出しないようにって学校から連絡来てるでしょう？」

楓を見つけた次の日。学校に行くと先生からこんな事を言われた。なるべく部活動は明るいうちに終わらせ、なにもしていない生徒は速やかに下校するように、というのが通達だ。

さらに、登下校はなるべく複数の友達と帰るように推奨された。

なにか怪しい人物を発見したら、すぐに通報して欲しいとの事だったので、マスクを着けてレインコートを羽織っていた人を通報したら、警察の人に怒られてしまったという記憶がある。

捜査員だったとか。だったらあんなに晴れている日にレインコートなんて目立つ服装はすると言いたかったが、それをグツと飲み込んだ……と見せかけて、某大型掲示板に書き込んでやった。すぐに消去されたけど。

閑話休題。

「殺人犯がうろついている場所に行けないよ。大人しく家にいた方がいいんじゃないか？」

『駄目駄目。ただでも暗い雰囲気にならされてるんだから、少しでも明るい気分を味わうために街に行くべきなんだよ！！』

「……って、東条さんに言われた？」

『あはは。バレちゃった』

バレるよ。楓はそんなに行動的じゃないんだし。

で、その日の午前十時。

楓の「遊びに行こう」という連呼に根負けしてしまった僕は、駅前にある『残念犬駄目公』象前に来ていた。

この残念犬はどこぞの忠犬とは違い、もうあらゆる点で駄目だったらしい。

飼い主を待っているのかどうかは知らないが、糞尿をその辺に垂れ流し、綺麗な女性を見つけてはその後を鼻息荒く追いかけまわし、小さな子供には吠えるわ吠えるわ。

最後には保健所に連行されていたね。残念だ。

なんでこんな犬を銅像にしたんだろう……？

こんな事を考えながら待つ事数分。楓はまだまだ来ないのは——
当たり前だ。

なにせ待ち合わせ時間は、十一時からなのだ。

別にハリキリ過ぎて早く来てしまったとか、そんな事はある得ないので誤解しないように。

時間つぶしに空を見上げる。抜けるような青空が広がっていて、この街に異常がないという事を強調したいかのようだ。実際は異常だらけなんだけど。

周りを見てみると、人は結構歩いていた。殺人事件なんて自分には関係のない、紙の上だけの物語だとも思っているんだろうか。

僕の前を横切って行ったカップルが、白昼堂々とキスを始める。しかも深い方だ。

恥ずかしくないのか若者よ。青春だからってなにをやっても許されるわけじゃないんだぞ。

もしここにバットがあつたら、男のゴールデンボールをホームランにしてやるのに。

適当な事を考えながら陽射しを浴びること数分。楓は意外と早く待ち合わせ場所に来た。

赤と黒のチェックバルーンスカートに、タートルネックセーター、ロングブーツという服装をしている彼女は、銅像前に僕を見つけると走って近寄ってきて……

「きゃっ」

転んだ。

なににつまづいたんだろうか。舗装されていて割と綺麗な歩道なのに。

仕方がないので僕は楓に近寄り、腕立て伏せをしている最中のような姿勢で鼻を押さえている楓に手を差し伸べる。

「大丈夫？」

「う、ううん……ありがとう」

恥ずかしさのせいからか、少し赤面しながら楓は僕の手を取って立ちあがる。

「あ、あはは。カッコ悪い所を見せちゃった。折角のお出かけなのに」

スカートの端を払いながら上目遣いで僕を見てくる楓。可愛いから許す。

というのは、まあ、一割がた嘘だとしてもね、鼻をぶつけて若干涙目になっている楓は、いつもより可憐だった。

「もしかして、待たせちゃった？ 私、二十分前行動を心がけて来たんだけど……」

「甘い。甘いよ楓。僕なんか一時間前行動を心がけているんだ」

「むう。じゃあ、次は二時間前行動を心がける」

「じゃあ僕は三時間前行動だ」

「じゃあ私は三時間一分前行動！」

「僕は絶対に楓より早く来る。ふははは」

なにか言い返してみなされ。ほれほれ。いざとなったら、一日前行動をみせてやる。

なんていうどうでもいい会話をしてから、僕たちは街を歩き始める。

ここまでは徒歩で来たので少し疲れたなー、とか思いながら店が並んでいる地域に向かった。

駅前には必ずといっていいほどに商店街が存在する。今、僕たちが向かっている場所もそういった感じで、様々な店がある。いうならば、店の集落である。

歩くこと数分。

楓を横に引き連れて、うはうは気分を堪能していると、ようやく集落の入り口に着いた。

ここは人で賑わっている。

いくら殺人犯がいるといっても、遊び心には勝てないのだろうか、それとも先ほど思った通り紙の上だけの事だとも思っているのだろうか。まあ、どちらでもいいけど。

「楓、どの店に行きたいとか考えてるの？」

「え？ うーん……そうだなあ……。特に無し！」

「そんな威張って言われたら、僕としてもどういう風に対応したらいいのか分からないや」

楓の計画性のなさになさになさだけ呆れながらも、僕は周りを見つめる。そして、一番最初に目に飛び込んできた店にしようと思った。

「じゃあさ、あそこの店にでも入ろうか」

「ん？ どこどこ？」

僕が指差した方向を、楓が見る。すると、嬉しそうに顔を綻ばせた。

「ファンシーショップだ。いいよ、早く行こうよ」

「焦らない焦らない」

僕の手を引っ張って先を急ぐ楓を見ながら、僕は笑みを浮かべていた。

「あつ、これ可愛い！！ どうどう、恭史ー！！」

「うん、可愛いんじゃない」

左目に眼帯をしていて、体は包帯だらけのパンダ人形を持ちながら、楓は無邪気な子供のように店内をはね回る。

楓は昔からこうだったものが大好きで、少し前に家に行った時も可愛いものが一杯飾ってあった。

……まあ、楓が今持っているもののどこが可愛いのか、僕には分からないけど。

暴走列車の如く店の中を走り回り、可愛い物を発見しては作り物じゃない笑顔を浮かべる。

しかし、この店内。狭い割には所狭しと棚が並べられていて、可愛い系の人形などが敷き詰められている。『川』の字のように並べられている棚の内、真ん中にある所を物色していると、服の裾を引っ張られた。

引っ張るな服が伸びるだろコンチクショーとは思っていないが、折角、自分が買う物が見つかりそうな場所で邪魔されたので、少し不機嫌になりながらも、それを感じさせないような笑顔で振り返った。

「恭史なんか怒ってる？」

一発でバレた。なぜだ、出来杉くんでも引くような爽やかな笑みを浮かべていると自負していたのに。

「いや、別に怒ってないよ。それよりも、なにか用？」

僕がそう聞くと、楓はなんだか少し恥ずかしそうにしながら、後ろ手に隠していたものを全面に差し出してきた。

両手を胸の前で×のように交差させ、その中心点で人形を抱くように握りしめている。

そしてリボンの蝶々結びで、ポニーテールにした髪を揺らしながら、可愛らしく首を傾げた。

さらには僕を低い位置から見上げてくる。身長差からなのでこれは仕方がないのだが……かなりドッキドキします。

楓が持っているのは大きな熊の縫いぐるみ。何年か前に流行した、『デデエ・ベア』というもの。

ふわふわした毛に手を埋めて、僕を見上げてくる。

今の楓は、人形を抱いた幼い子供のように見え、その容姿と相まって年下ではないかと疑ってしまった。

「どうしたの、楓」

熊を大事そうに抱えたまま一向に喋らない彼女に、僕もこのまま無言を貫き通し、珍しく赤面している楓の容姿を鮮明に描写しようかと思っていたが、止めておいた。

今のこいつを見ていると、大昔に置いてきたはずのあの気持ちが再燃してしまいそうだ。

「えーとね、恭史」

楓は人形を持った手を、僕に押しつけるようにして出してきた。

「これ、買って」

赤面したままの笑顔で、精一杯の勇気を振り絞った感じの声。

いやしかし、これは珍しい。楓が僕にものをねだってくるなんていや、たぶん初めてじゃないか？今までこんな事を言われた記憶がないのだが。それゆえに、今の楓は真っ赤なんだろうけど。

僕の返答は考えるまでもない。

「いよっし、買おう！！ もう、なんでも買ってあげる！！」

「本当！？ やったー！」

テンションが高くなってしまっているのは、初めて楓にねだられたからだ。

いや、だけどこれでさっき買い物した分も含めれば、今月は金欠になっちゃった。どうしよう。

楓はスキップしながらレジへと向かう。

僕は彼女が跳ねるたびに遅れて揺れる髪の毛を見ながら、ああ、やっぱり可愛いなあ……という前世の自分からのお告げを聞いている。

「恭史、早く早く！」

見てるだけで人を幸せにするあの笑顔。僕は昔からこれに救われてきたのである。

人形のように整った顔を破願させた楓は、レジの前で僕を待っている。

その近くにいる店員さんが楓に色目を使っているように見えなくもなかったので、僕も女の店員さんに色目を使ってみた。もちろん、嘘です。

ポケットからここに来る前に買ったものが落ちないように気をつけながら長財布を引き抜き、大して中身が入っていないのにガバツと勢いよく口を開けてやる。

ニコやかなハンサムスマイルを携えている男の店員に、僕は先ほどの出来杉くんも引くぐらい完璧なスマイルを向けた。

相手は顔をひきつらせたが、それでも対応してくる。

「二千円になりまーす」

「ほいほい」

「二円じゃなくて、二千円です」

ちよつとした悪ふざけなのに、目の前の男は額に青筋を浮かべている。

短気は損気だぜ、お兄さん。ふはははは。

悪ふざけはこの辺にしておかなければ、殺人技をかけられそうだったので僕は神がかった早さで紙幣を取り出して店員さんの顔面にかけて放り投げた。冗談だけだね。

僕達はファンシーショップから外に出た。

楓は買ってあげた熊の縫いぐるみを大事そうに抱えて、にこにこと穏やかな笑みを浮かべている。

その笑顔に僕も嬉しくなり、さっきから連発している例の笑顔を貼り付けた。

そんな僕を見て、楓は訝しむような視線を向けながら見上げてきた。

「恭史……その笑顔、なんだか変だよ？」

「どこが？」

「うーんとね……笑っているような、引きつっているような、怒っているような、泣いているような……なんだかよく分からない顔してる」

「……ていうか、そんな複雑な顔をしているのに、よく笑顔だって分かったね」

そうか。僕はそんな顔をしていたのか。だから楓には一発でばれて、店員さんは引きつっていたんだ。

今度からはこれは自重しようっと。

温かい春の日差しを背中に受けながら、楓と街を歩く。

街は穏やかな雰囲気にもまれていた。学生や老人、若い夫婦など。みんながみんな、笑顔で街を歩く。

しかしそれはどこか、無理をしているような感じのものだった。

「……なんか、気持ち悪いな」

「そうだね。みんな、なんかおかしい」

僕の独り言に、楓が反応してきた。

どうやら、同じ考えだったらしい。

ここに来ている人達も、僕達と同じ事を考えてきていたのだろうか。

ただでさえ陰鬱な事件があつたのに、家に引きこもっていたら、さらに嫌な気分になるとか。

「お腹減ったね……」

もふもふした縫いぐるみの毛に、顔をうずめながら楓が言った。

「ああ……そうかもね」

僕はそんなに減っていないのだが、楓が減ったと言っているんだからもうお昼時なのだろう。

携帯の時計で時刻を確認すると、十三時だった。

「じゃあ、どこかで食べようか」

「そうしよう」

にぱっと楓は、ご飯をねだるような子供の笑顔をする。この表現でいうと、僕は楓の親か。少しヘコんだ。

彼女がお腹をさすりはじめ、今度は悪さをした犬が、餌を抜かれた時に見せるような、なんとも悲しそうな目で僕を見てくるので、急いで飲食店を探す。

「あつ、あそこに入ろっか」

前方に見えたお洒落な店を指差す。確かあそこは、地元の雑誌に載っていた、この辺では有名なファミレスである。

ファミレスを載せる情報誌ってどうなの……？ とかいう疑問はさておき、色々とバリエーションがあつて美味しいらしい。

「おつ、いいね、いいね！　じゃあ、行こう？」

「うむ」

偉そうに頷きながら、楓に手を引かれて僕達はファミレスに向かって行つた。

ファミレスの外見を近くで見た時は、お洒落なレストランかなにかかと思つてしまった。

外装は赤いレンガのようなもので造られ、モグラ叩きのモグラのように、屋根には所々、突起物があつた。

中に入つてみると、落ちついた感じの家具で統一されていて、音楽は今流行りのものよりも、クラシックのようなものが流れていた。「ファミレスじゃないよな、ここ」

「なんか凄いいね。あはは、私なんか緊張しちゃうかも」

店内に流れる落ちついた音楽や内装のせいかな、僕は少し緊張しながらも窓際のボックス席に座つた。

赤いソファのような椅子は座り心地がよく、僕の体重分だけ沈んだ。

机を挟んだ向こう側には楓が座つた。

「なに食べる？」

店員さんが運んでくれた水を含み、口を潤す。今まではミントのような香りだった僕の口臭が、一気にラベンダーに変貌する。自分の口臭なんて知らないけど。

楓はなかなか決める事が出来ないのか、メニュー表を見てうんうん唸っている。

仕方がないので僕もメニューがまだ決まっていない振りをして、ポケットの中に入っているものを触感だけで確かめる。

「どうしよっかなあ……」

「恭史も決まってるの？」

「あ、いや……うん、まあね。あはは」

心の中で留めておくべき言葉が、つつい口に出ていたらしい。心め、お前まで反抗期か。

それから考えことが口に出ないようにするための特訓を人知れず行っていると、楓がメニュー表をパタンと閉じた。そしてひとこと「恭史にお任せします」

「あい、任せました」

なんとなくこの展開が予測できていたので、僕は今日のお勧めメニューとやらを店員さんに注文した。

「いやー、こういうお店はメニューが一杯あって悩めますなあ」

「そうだね」

「別に私は決まってるんだよ？ だけど恭史にエスコートしてもらいたいなって思ってる」

「ダウト」

「あはは、バレた。なんで分かつちゃうの？ おかしいな、おかしいな。私ってそんなに顔に出やすいのかな？」

楓と雑談をしながら、時間を潰す。店の中は混んでいるため、料理が出てくるのには時間がかかりそうだった。

僕は出されてきた水を飲む機械のように、それを燃料にして言葉を吐き出す。なんとエコだ。素晴らしい。

「でさ、由実ちゃんって、私とほとんど同じ背の高さなのに、千五百メートルを五分前後で走るんだよ？」

「へー、凄いね。僕なんか、六分前後だ」

「もっと頑張らなきゃ。男の子なんだからね。サッカーはもうやら

ないの？」

「うーん……飽きた」

元からあまり好きじゃなかったし。楓に近づきたいから、僕も頑張ってたけなんだしね。

笑いながら話をしていた僕達の耳に、不快なニュースの音声流れ込んできた。

それはカウンター席の近くにあるテレビからで、内容は不同集成のものだ。

最近はこの街も、悪い意味で有名になってしまった。

元々、不同の生まれ故郷やらなんだかで、被害者遺族からは理不尽な怒りを頂戴したりしていたが、今回ののは奴が潜伏しているせいである。

「ねえ、恭史」

楓の位置からは僕の後ろにあるテレビが見えるようで、彼女の深い黒の瞳はニュースの画面を映し出している。

さっきまでの笑顔は、姿を消していて、どこまでも無表情だった。「犯罪者って、死んだ方がいいと思う？」

「……そうだね。人の人生を奪っておいて、その罪を償おうとせずに逃げているような奴——この、不同みたいな人だったら、死んでもいいと思うかな」

最近の楓はこういう物騒な話題を振ってくる事が多くなった。

推理小説に影響されているのか、昔からこういった話題はあるにはあった。

だけど今は、不同集成のせいだ。それは高齢の方が多くなっているように、抗う事が出来ない事実なのかもしれない。

彼女は僕と一緒に、不同みたいな殺人者は大嫌いだった。

だけど、僕と楓では、嫌う理由が違う。

僕はさっき言ったとおり、罪を犯したくせにそれを償おうともしない、その腐った精神が大嫌いだ。

しかし楓は、一般的な嫌い方だ。人を殺すから嫌い。人の人生を

奪ったから嫌い。死んで欲しい。後、一つは――。

「ねえ、恭史。あの人が死んだら、嬉しい？」

「……楓、いい加減、この話は止めない？ 物騒な話題は、テレビの中だけで十分だよ」

「答えて」

楓の表情はまだ無だ。普段笑っている彼女がこういった顔になると、いつものギャップからかなり怖く思える。

だからというわけではないが、僕は僕なりの答えを口にする。

「そうだね、不同が死んでくれたら、僕は嬉しい。あんな奴が生きていても、これからもつと人を殺す。たくさんの人的人生が奪われる場所を見るのは、一度で十分だよ」

楓はまだ納得していないような表情をしている。仕方がないので、さらに言葉を続ける事にした。

「あいつは絶対に改心しない。ここまで来たら、絶対に逃げれる場所まで逃げるだろう。時効はなくなったけど、そのうち未解決事件になって、誰もあいつを追わなくなる。だから、そうなる前に、あいつには死よりも苦しいものを与えてから、殺してやりたい」

途中からは嘘だけだね。僕に人を殺せるような度胸はないし。

「そっかそっか」

僕の言葉を聞いた楓は、水泳のオリンピックで金メダルを取った選手のような笑顔を浮かべる。

「だよ。罪を償ってもらわないとダメだよ。うんうん」

さっきまでの無表情はどこにいったのだろうか、と思うほどの笑顔を浮かべる楓。だけどこれは、笑顔という仮面を顔面に貼り付けているだけだ。それを外してしまえば冷徹な表情をしている事だろう。

なんでそんな顔をしているのかという理由はなんとなく分かるが、僕は追及しなかった。

仮面を被るのを楓が選択したのだから、僕がそれについてとやかく言う資格はない。

だからこういう場合は、僕も適当に愛想笑いを浮かべるだけでいいのだ。

「恭史は人を殺したら駄目だよ？たとえそれが、あんな人でも」

「分かってるよ。それに、僕にそんな度胸がないって事は、楓が一番分かってるでしょ？」

「それもそうでしたな。料理来る前に、お手洗い行ってくるね」
「うむ」

適当に頷き、周りを確認してみる。さっきまで物騒な話をしていたのだから、周囲の人が聞き耳を立てていないかを確認するためだったが、それは必要な事だったらしい。

それぞれの席についている人は、自分達の話題で忙しいらしい。それはまるで、ピーチクパーチクとさえずる雛鳥を連想させた。自分で言つといてなんだが、いまいち分かりにくい。

さて、楓がおトイレから戻って来てからすぐに料理が出てきた。店員さんが楓の帰りを待ち望んでいたかのようなタイミングだったので、僕は思わずジト目を向けてしまうという嘘。

……今更だが、僕はいつからこんなに嘘つきになったのだろうか。昔は……駄目だ、思い出せない。

もう少し素直で、ぷりてぃーではどぼいるとでだんでぃーだった気がしないでもないような気がした。

……なんだこの表現。言葉の一つ一つをミキサーにかけて、粉々ミンチにしても交わりそうにない単語ばかりだ。

どうでもいいや、僕の性格の起源なんて。考えるだけ無駄。思考を中断して、目の前にある料理を意識の内に入れる。

デミグラスハンバーグにみじん切りのキャベツ。白米とコーンスープとコーヒーが献立だった。

これでお勧めなのだから、少しだけ呆れる振りをしながらも僕は瞳に星を入れる努力をしてみる。無意味だけど。

「いただきます」

「いただきます」

全く関係のない事を考え込んでいた僕を置いて、楓が先に挨拶をしてしまった。だから、急いで僕もその後が続く。

付属していたスポーク——学校の給食によく出てくる、フォークとスポークが一緒になった食器を掴み、ハンバーグに突き刺す。

思いのほか肉は柔らかく、抵抗なくそれを受け入れた。肉汁が飛び出し、中身を露にする。

なんでスポークがここで使われているのかどうかは追及しない。だってここ、ファミレスだしね、という理由で無理やりに納得してみる。

いや、だけどいいわこれ。中学校以来だけど、使い勝手が良すぎる。

と、またこんなどうでもいい思考をしていたから、切り分けた肉を食べるのを忘れていた。

僕は結構、食べるのが早い方だ。

小さい頃からなぜかそういった教育をさせられていたので、食事開始から十分以内で全てを平らげる。

例え大盛りでもそれは変わらず、この前行ったラーメン屋で大盛りラーメンを食べたら無料になる奴に挑戦し、三十分以内の所を十分一秒前に完食した。

あの時の店長さんの顔は忘れない。『こいつ、化け物か?』。嘘じゃなくて、本当にこんな顔をしながら、箸を休めない僕を凝視していた。

早食いと大食いは違うという事実には気付かない振りをするのが、社会の常識なのです。

さて、本題に入ろう。

僕は全てを食べ終えてしまったので、暇だ。楓はまだ一生懸命に食べている。

机に頬杖をついてそれを眺めている僕に気を使っているのか、い

つもの数倍早いスピードなのだが、それでも僕から見たら亀のように遅い。お主もまだまだよのう。

……あー、駄目だ。

冗談言つて、気持ちを誤魔化そうと思つたけど、無理っぽい。

「楓、楓」

「なに？」

僕の呼び声に、楓は一端、手を休める。

「そんなに焦らなくてもいいよ。ゆっくり食べて」

「で、でも……恭史を待たせるわけには」

「そつか。じゃあ、今から五秒以内に食べきれなかったら、一秒オーバーすることに罰ゲームね」

「ええ！？……ちょ、なに言ってるの恭史。なんでそんな事をしなくちゃ」

「はい、六秒。罰ゲーム一個追加。あ、二個追加になった」

「……むー」

楓は軽く頬を膨らませて、僕を睨んでくる。

「あーあーあーあー。リセットリセットリセット。電源オフ、再起動。よし、戻った」

僕は昔、年齢がまだ一桁だったころの事だけど、少しだけSっ気が強かった。

よく、口で楓を虐めては、喜んでいたものだ。だけど、駄目だろう、真田恭史。

お前はこの性格が一生、外に出ないようにすると誓ったじゃないか。それをなんだ。

少し楓の恥じらう顔を見て、今は一生懸命食べているのを見ただけなのに。こんな事で、大昔に置いてきた感情を再燃させては駄目じゃないか。

いや、しかしですね真田隊長。

昔々に封印したものが、お湯に入れたワカメのように膨張して、理性に襲いかかってきたわけですよ。あれでは、発砲スチロールで

出来た堤防なんぞ、すぐに破壊されますだ。

むっ、それは困るな。それでは二度と出てこないように、泥で補強しておけ。

あいあいさー。

などという脳内会議が終了し、僕は楓に頭を下げた。

「ごめんなさい」

「少し反省して欲しいかな」

「本当にごめんなさい」

万が一の確率だが、もし最悪な事態が起きたらどうするんだよ。だから僕は、この性格を封じ込めたっていうのに。

「ゆっくり食べてね、楓。僕はコーヒーでも啜ってるから」

「むう」

「ははっ、睨まないでくれ」

なかなか直らない楓の機嫌に対して僕が行った行動は！！

「……………」

特になにもせずに凝視するだけ。だって、なにも思い浮かばないだもん。

「そんなに見ないで」

僕の見つめ攻撃に屈したのか、頬を赤くした楓はぷいとそっぽを向く。

うーん……赤いのは怒っているからなのか。それとも……いや、これ以上は自意識過剰と言われかねないので自重しておこう。

そして、自重のついでに自嘲もしておく。

「楓、楓。機嫌直して？横にいる熊は、楓が笑っている方が好きだっつて」

本当は怒っている顔の方が好きかもしれないけど。そういえば心なしか、楓の横に置かれている熊のぬいぐるみが、少しだけ口元を綻ばせているような……いや、気のせいだ。

というか、事実無根だ。

さて、閑話休題。

楓の機嫌を直す方法は熟知している。だけど、結構恥ずかしいもので、人前では絶対にやりたくないものだ。

それはまるで、裸の王様のようなだ。馬鹿には見えないだとか何とか言われて、その辺を漂っている空気を服だと勘違いしているあの感じ……ではない。途中から自分でもなにを言っているのか分からなくなっていた。

またもや閑話休題。一分の間に二回もこの単語を使ったのは初めてだ。

さて、どうしようか。やろうかな。やらないかな。

うーむ、楓の事を好きな僕がこれをやると、かなりあばばばばな展開になるんだよねー。僕の脳細胞は死に至る可能性もある。

……人目につくとか気にしている場合なのかな。僕としては、楓の機嫌を早く直して街に出かけたいのだが。

しょうがない、か。

「よいしょ」

立ち上がり、テーブルを回り込んで楓の横に座る。

「こっち向いて」

耳に口を寄せて、囁いてみる。

「恭史？」

驚いたような表情をした楓が、ゆっくりと僕の方に振り返ってきた。

僕は少しだけ身を引いて、楓の瞳に映る自分がどんな表情をしているのかを、余裕ぶって確認してみた。

顔はポーカーフェイスでいつもの無表情を維持しているみたいだけど、本当は心臓バクバクだ。冷汗だってダラダラ流れてきている。僕のポーカーフェイスも中々のものだ。

「えいつ」

「ひゃっ」

横から思い切り楓に抱きつく。

抱きついた瞬間に鼻をくすぐる、シャンプーの良い匂いに、甘い

香りが僕の理性を……崩壊には至らなかった。泥で補強しておいたのが、こんな場所で役立つとは。

いやー、しかし柔らかい。いいねえ、この触り心地。肩を優しく掴んでみると、ふわふわとした感触が返ってくる。

男と違つて、女の子の体はやーらかい。

「た、たたた恭史。な、なんの真似なの？」

「んー？ 楓の機嫌が悪いから、小さい頃にやっていた楓機嫌強制移転方法をやろうと思って。どう？ 落ちついた？」

「ぜ、全然」

不健康な程に日光を嫌う白い肌に、朱が侵略してきた。

楓の瞳は挙動不審に動き回り、僕の方をまともに見ようとしな

い。
ここまで照れてくれると、僕としても抱きついた甲斐があったもんだと、少しだけ誇らしげな気持になるわけない。

「か・え・で。機嫌、直った？」

わざとらしく、一言ずつ区切つて話しかけてみる。しかも、最大限、耳に口を近づけて。

「ひゃうっ」

ついでにわざと吹きかけた息が耳に当たった楓は、くすぐったそうな、なんとも可愛らしい声を出し、肩をぴくつと震わせた。

これ、僕が女の子にやつてもらいたいシュチュエーションで、三位にランクインされるんだよね。それを、逆に女の子にやっているとは……。

僕はなにをやっているんだか。

ついでに第二位は、浴衣姿で膝枕をしてもらつての耳掃除だ。想像しただけで、鼻血が百メートル先まで吹っ飛ぶ。過剰表現だけど、そして一位は……自重しようかな。

……む。これはいかん。Sの僕を抑えきれなくなっているではないか。

えーい、リセットだリセット！！

さらに、封印封印封印封印封印封印封印封印封印封印封印封印封印封印封印。

もう、二度とこの性格は出さない。そう心に決めました！ 勝手に出てこないでくれよ。

「機嫌……直った？」

首を傾げて、楓の反応を窺う。すると彼女は真っ赤になった顔のまま、僕に近づいてきた。

楓の瞳に映っている僕がだんだん近くなってくる。

くそつ。無表情を保っているつもりだったのに、目が微かに見開かれている。

楓は、カメとウサギが駆けっこした時、ウサピヨンが亀吉にジェット機で追い抜かれた時みたいに驚愕に支配されて動きが止まってしまった。

遠まわしになったけど、僕の顔に最大限近づいてしまったので、その場で止まっただけである。

お互いの瞳に映っている自分がハッキリと窺える距離。吐いた息が、相手に簡単に届いてしまう。

なんでこんな事態に陥ってしまったのだろうか。

やっぱり、S復活のせいだ。あれがなければ、こんな事にはなっていないかったと思う。

楓との距離を取ろうと、上体を少しだけ倒す。

「どうしたの？」

そんな無邪気と意地悪が同棲していそうな声を出しながら、楓は

もはや、ソファの座る部分に、楓の両手が着地している。僕はもう、ほとんど横になっている状態だった。

なんだこれ。

なんだこれ。

「恭史、顔が赤くなってるよ？」

「……楓に言われたくない」

彼女の息は少々荒くなっており、頬は上気しているように赤くなっていた。

僕は横目で周囲を確認してみる。

「……楓」

「なに？」

「みんな、見てるけど」

「え？」

楓はゆつくりと周囲を見渡す。

「え……あ……あう」

自分の大胆な行動に今更、気付いたとでも言うかのように、楓は羞恥心からこれ以上赤くなったら地球上の物体で表現出来ないぞ、というレベルまで上り詰める。

馬の尻尾にした髪の毛を手で払いながら、僕から一瞬にして離れた。

瞬間移動の使い手だったのか。約十八年間一緒にいて初めて知ったよ。

両方の手で顔を覆い隠し、イヤイヤと首を横に振る楓。見られただけでそんなに後悔するなら、最初からやらなくちゃいいのに。

冷静を装っている僕だが、もうちょっとで泥で補強したなにかが崩壊するところだった。

だって、楓のくちびるがすぐ間近にあったんだもん。

ドッキドキでうっはうはでダッラダラですよ。

「楓、外に出ようか？」

とりあえず、これ以上楓のこんな姿を見ていたら、例の性格が出てきそうだったので、目を逸らしつつ手を差し伸べる。

「……」

しばしの逡巡の後、楓の柔らかい手が僕の手を握り返してくる。抜けないカブをみんなで一斉に引っ張る時のような声を発しながら、楓を引っ張り上げる。

それから、机の上に置かれていた明細書を取り上げ、好奇の視線

が注がれる森の中から脱出するべくレジに向かう。

楓の手をしっかりと握り、先行する。首を少し動かして後ろを見
てみると、彼女は袖で顔を覆い隠していた。

お金を支払い終え、僕は店の前で待機していた。

楓は今、御手洗いに行っている。

暖かい五月の陽射しが絶え間なく注がれ、春とは思えない程の気
温を維持し続けている。

太陽は少しだけ頑張り過ぎだ。少しは僕の父さんを見習って、ビ
ールでも飲んでぐでんぐでんになっていればいいのに……酔うと光
量が増すとかないよね？

父は酔わなくても、日に日に光を強めているけど。主に、頭部的
な意味で。

僕の将来も心配だ。

などという、蟻に雌雄があるかどうかを観察するぐらいどうでも
いい思考を繰り広げていると、楓が店内から出てきた。

「……お待たせ」

「待ってないよ」

「そう」

「うん」

……楓が僕と目を合わせようとしない。

それほどまでに、先ほどのことが尾を引いているのだろうか。

彼女は街を歩く人々に視線を送る事に熱中しているようなので、
僕は仕方がなく楓を凝視する事に熱中する事にした。

なにが仕方なくなのかは、言及しないでおく。

「あんまり見ないで」

「おう」

なんだ、横目で僕をコッソリ観察していたのか。だったら、僕のよ
うに堂々と見ていればいいものを。

全く、最近の若者はけしからん。相手を直視する事さえできないの
かね。

「……ふう」

飽きた。

少しだけお爺さんの真似をしてみたけど、なんだこれ。

空に浮かんでいた雲に隠れて、太陽が地上を照らす事をサボり始める。

「次に行きたい場所とか考えてた？」

まだ僕に顔を向けて来ない楓の横顔に、問いかけてみる。

「うーん……特にないんだよねえ……。恭史が行きたい場所とかないの？」

君と一緒にどこでも行きたいさ、なんて言えない。もし言ったら、体中の穴という穴が限界まで開き、更にはサメ肌よりもザラザラすること百パーセントだ。

「あー……」

ちよつとだけ想像してみたせいで、鳥肌がぶつぶつと浮き出てる。

うわぁ……絶対無理だこれ。恥ずか死ぬ。

「恭史もないんだね。どうしっよか」

「どうしようね？……あつ、そうだ。もう少し行った先にバッテリーセンターが新しく出来たはずだからさ、そこに行ってみない？」

出来もしないバッテリーングだけど、どこでもいいから目的地を設定したかったのだ。

「うん、そこに行ってみよっか」

「おー」

楓は、やっと僕に笑顔を向けてきた。しかしそれも一瞬で、すぐに顔は前に背けられた。

別に寂しくはない。

「楓ー、なんで僕の方を見ないんだよ？」

「あつ、いや、だって……」

顔を赤くして、僕とは正反対の方向に視線を投げかける。

別に寂しくはない。

「こつち向いて？」

自分でも気持ち悪いと思う、猫なで声を出す。

「あつ、良い天気」

明らかに僕の方を見ようとしなない。

別に寂しくはない。

楓が僕の方を見ないようにしてくるので、僕は彼女の視界に入るよう不可解な動きをしていたらバッティングセンターに到着していた。

楓の視界に入った回数と避けられた回数を比率で現すのならば、1：9だろうか。

なんであんなにも反射神経がいいのだろうか。いや、それとも僕の動きが単調すぎて読まれるのか？

これはいけない。元サッカー選手としては致命的ではないか。

こうなったらスーパーコンピューターでも予測できないような動きを完成させるしかないなとか思いながら、僕は百円硬貨を投入する。

バッテリーボックスの左側に入り、ヘルメットを被り、バットをしっかりと握った。

後ろをみてる。緑色のネットに挟んだ距離に楓がいる。体はこつちを向いていたが、やっぱり視線はどっか彷徨っている。戻ってこーい。

あつ、そうだ。

「楓、これでホームラン入れたらさ、僕と付き合ってよ」

「いいけど……どこに？」

ネットで遮られた僕と楓の間。近いように見えても、絶対に手を触れ合う事は出来ない。

これはなんだか、僕が常々感じていた楓との距離のようだ。

だからだろうか。さっきのような事を言ってしまったのだが、なんで君はそんな天然で返してくるかな。

それでも結構、言う努力をしたのに。男殺しめ。

「そういう意味の付き合うじゃないよ。恋人になるって事。YES？ NO？」

「え？ ……ふえ？ あ……ん？」

「なんでそんなに混乱してるのさ」

楓がネットの穴を指で掴んで、牢獄中の囚人みたいにガシガシや揺らし始めたのを見て、思わずそう言ってしまった。

顔を夕日よりも赤くした楓は、お医者さんが見れば速攻で集中治療室に連れて行かれるかもしれない。

間の抜けた声を未だに発しながら、楓の囚人ごっこは終わらない。仕方がないので、僕は一度、ネットで囲まれていた場所から外に出て楓に近寄る。

「大丈夫？」

「あ……ああわわわわわわわ」

「……じゃないね。僕、そんなにおかしい事、言っただかな？」

「言っただ言っただ言っただ言っただ」

「壊れたレコードみたいに、同じ事を繰り返さなくてもいいよ。聞き取りづらいし」

しかし、こんなに楓がおかしくなったのを見たのは久しぶりだ。

小学校以来かな……。

「もう一度、言おうか？」

ぶんぶんぶんぶんぶん！ 凄い速度で首を横に振られた。そんなに拒否しなくてもいいのに。なんかショックだ。

「楓、落ち着いて。そんなに取り乱さなくてもいいじゃないかよ。僕の気持ちに気付いてなかったとか、そんな事を言うつもりなのか？」

コクコクコクコク！ 残像が見えるくらいの速さで首を縦に振る。うわぁ…… 凄い、楓の顔が何個もある。

というか、まあ……僕の気持ちに気付いてなかったのか。初めて知った嘘だけど。

なんとなく、分かってたけど。僕の表情や言動からは察し難いだろうし。

いつまで経っても楓の顔色は平常に戻らない。だから仕方がなく、僕は楓の頬を引っ張ってみる。

「いふあいふあい！！なにふるのふあふあふみ！」

「止めるからさ、そろそろ返事くれない？　こう見えても、僕はすっごい汗かいてるんだから」

「あう……そうなの？　だって、恭史って基本的に無表情だから、なに考えてるか分かりづらい時があるんだよね」

「今も、無表情？」

「自分で気付かないの？　今は少しだけ呼吸が速くなってるけど、表情は無に近いかな」

「ほう。なるほど。で、返事はどうですか？」

その本題に入った途端、楓は露骨に僕から視線を外す。

「僕の事、嫌いかな？」

「そんな事ない！　むしろ……」

「むしろ？」

「うう……た、恭史がホームランできたら、付き合ってあげ……かな？」

「うむ、それを聞いて少しだけやる気出た。頑張るぞー」

またネットに入り、バッターボックスに入る。そして、機械のスタートボタンを押した。

我ながら大胆な発言をしてしまった事は分かっているが、それでも僕は満足だ。後は、ホームランの的に当てるだけ。

心臓が早鐘を打ち、上手くバットを握る事が出来ないけど、頑張るぜ。

一球目。

空振り！！

二球目。

空振り！！

三球目。

空振り！！

「ていうか。球速いよ！！」

見忘れていた球速表示を確認する。

145キロ。素人には少しきついんじゃないか？

ここのバッティングセンターは、百円で二十球出てくるらしい。

気分は扇風機だった僕は、それら全てに空気を当てる事だけを意識していた。空振りしてただけなんだけどね。

「あたたた」

二十回も慣れないスイングをしていたせいか、肩や二の腕が筋肉の張りを訴え、これ以上、労働させる気なら、賃金の代わりに栄養素をくれと伝えてくる。

しかし、本性はSである僕は、それら全てを無視し、なおかつ、鞭で打って奴隷のように扱う。ふはははははは。

「恭史、大丈夫？」

「あー……うん、なんとかいける。球の速度にもだいぶ慣れたし」

これはサッカーをやっていたおかげか。僕は結構、動体視力が良い方なのだ。

どんな速度も、三球も見れば慣れる。でも、目で見えても、体がなかなか動いてくれない。

そのせいで、かなり空振りしてしまったのだが。

「よし、いける」

体もようやく目覚めてきた。サービス時間は終わりだ。

もう百円投入し、ゲームスタート。

バットを持ち、野球のゲームの見様見真似で、フォームを整える。少し離れた位置にあるピッチングマシーンから、白球が放たれる。タイミングを合わせて、一気に振りぬく。

ガギイーン、っていう金属音が鳴って、手が凄く痺れてきた。芯に当たらないで、端っ子に当ててしまったか。

もっいっちょ。

次に出てきた球をまたもや芯を外して打ってしまい、球は僕をあげ笑つかのようにファールの白線を軽々と越えてしまった。

修学旅行の夜に、男部屋で集まってえっちな本を見ていた時から集中して球を見なきゃ。

……一応、断っておくけど、僕はそういった本に興味はない。

読んでいたのは明とかその他数名で、僕は先生の足音をいち早く察知する係りに任命されていたのだ。

どうでもいいや。さて、次の球が来た。最大まで見極めて、バッドを宙で走らせる。

そして当たった。今までのガギイーンという汚い金属音ではなくて、キイイーン、という澄んだ音が僕の鼓膜を刺激する。

球がバットに当たった時も、それまでのように反動は一切なかった。

これが、真芯で当たった時の感触か。癖になりそうだ。

さて、僕が打った球は、ピッチングマシンの遙か上空を飛んでいき、ホームランと書かれている丸い看板の方向に真っ直ぐ進んでいく。

「行け!!」

調子に乗って大声を出してしまったが、球は途中で失速し、緩やかな放物線を描いて看板の少し下の位置に激突した。

「あー……」

「惜しい。恭史、頑張って」

「うん」

楓が応援してくれているので、僕はまだまだ頑張れます。

その後、計五百円を使用し、百球の球を目で追いかけ、バットで連続的に暴行を加えた。

この表現を人間に使ったらかなり危ない感じになるが、相手は白球なので、そういった苦情は甲子園球児に言っただけ。

その結果は……。

「一回もホームランにならなかったね」

「……ごめんなさい」

あんな事を言っただけで格好つけてバッターボックスに入っただけに、いい打球は十球あるかどうかだった。

僕と楓は今、バッティングセンター内にあるロビーにてジュースを飲みながら休憩中。

青いプラスチック製の長椅子に座り、壁に背をもたれかけながら、衝動的に買った甘すぎるココアをすすった後、燃え尽きたボクサーみたいに目をつぶって俯く。

「恭史、そんなに落ち込まないで？」

右横から楓の心配をしているような声が聞こえてくる。

あーあ、ビギナーズラックとかあると思ったのに。やっぱりスポーツは甘くないですね……。

「大丈夫？」

「あー……うん。なんか腕がふるふるし始めたけど、後百球はいける。というかいつてみせる」

そうしなければ、あの言葉が嘘になってしまうのではないか。僕にだって、嘘にしたくないものぐらいはある。

「無理しないで？」

「……楓。そんなに僕が信用できないの？大丈夫だって。次こそ余裕でホームランだ」

「でも」

「さーてと、もう十回ほど、暴行加えにいくか」

五回ぐらい、ピッチングマシンが反抗期に陥って、暴行加えられそうになったけどね。

結局、ホームランなんていう夢物語は実現するわけもなく、無駄

に疲れた体を引きずりながら、僕たちは夕陽に染まった帰り道を歩く。

人気のない田舎への細い通り道。楓とは反対側の横に、小さな川が流れ、自然の音楽を奏でていた。

「もう少しだったね」

「……そうかな」

最後の方は疲れてきたせいか、スイングスピードが遅くなり、フールとか空振りしてばっかだった。……虚しい。

「そんなに落ち込まないでよ。……あつ、そうだ」

横を歩いていた楓は、手をパンと叩いてから、夕陽に着色された顔を破顔させた。

「ん？」

急に立ち止まってしまった彼女に、不審を乗せた視線を投げかける。

楓は赤い光を背景にして、僕に微笑みかけてくる。

そして、少し離れて立ち止まっている僕へと招き猫のように手を動かして、こっちこいと示してきた。

「なに？」

僕は楓の指示通りに、彼女の前に立つ。

すると。

「えいつ」

「うわ!？」

いきなり楓が飛び付いてきた。

そんな、いきなりの出来事に硬直してしまった僕の耳に、楓の唇が近づく。

「恭史」

「な、なんでしょうか」

「ふふつ。なぐにさ、その返事」

楓が喋ることに、耳に息が吹きかかり、全身、余す場所なくゾクゾクとなにかが駆け抜けていく。

楓の体が発する蜜のように甘い香りが僕の鼻孔から体内に侵入し、思考をショートさせようと暴れまわる。

「か、楓？」

彼女の大胆な行動は本日二回目。なんでいきなり……。

「ねえ、恭史？」

「は、はい」

肩に顎を載せてきた。淡い栗色の髪が、僕の首筋を掠め、体を震えせる。

「良い事を教えてあげよつか？」

「良い事？」

実は宇宙人なのー、とか？ いや、別にそれは良い話じゃないや。僕は宇宙に興味ないし。

そんな事はさておき、楓の顔は見えないけど、なんとなく笑っているような気がする。なにを言われるんだ、本当に。

「私ね……」

楓はそこまで言っ言葉溜め、息を吸い込む。一体これからなにを言われるのかと、僕は戦々恐々していた。

僕の背中に回されている手に、優しく力がこもった。

体は今まで以上に密着して、僕のハートブレイクはもう限界値にまで達そうとしていたのだが、それに止めを刺す言語が鼓膜を揺らす。

「恭史の事が、だーい好きだよ」

「……あう？」

「だ・か・ら。私こと相崎楓は、幼なじみである真田恭史が大好きっていう話。もちろん、異性としてね」

「あ……その……ええ！？ あ、あの、ホームランは……？」

「あの約束は恭史がしたものだよね。で、果たせなかった。だけど、これは、私が自分の意志で言ったもの。反則じゃないよね？」

は、反則じゃないよね？なんて耳元で言われたらあばばばおつと混乱してしまった。

「え、えつと。ぼ、僕なんかでいいのかな？」

「恭史じゃなきゃ、駄目なの」

楓は僕から一步離れる。そして夕焼けに染まっているのか、それとも本当に朱くなっているのか顔は肌色じゃない。

チンピラに囲まれて、財布だけじゃなくて命の危機に晒されている一般人のごとく動揺しまくっている僕には、それが判別できない。ただ、楓の表情だけは分かった。僕の大好きな、彼女の温かい笑み。

恥ずかしくてそれを直視する事もできないので、僕は目を逸らしながら答える。

僕にまだ、動揺なんていう感情が残っているなんて驚きだ。

「そつか。……えーと、よろしく願いします」

「ふふつ。こちらこそ」

「……えーと、いつから僕の事を好きだったの？」

「え？ うーん……秘密かな」

「えー」

「ふふつ、いつか教えてあげるから。すねないで」

こうして、僕達は恋人になりました。

これから、楽しい楽しい日常が待っているという事を、僕は全く疑っていなかった。

だけど、すでに壊れ始めていた日常は、そう簡単に戻ってはくれない。

ここから回り始める。

クルクル

狂狂と。おかしな、おかしな、齒車が。

第2・5話 とある少女の殺人目録

人気のない裏通り。街灯さえまばらな、その廃れた通りに、一人の男が横たわる。

最初から決めていた。

殺すなら、私とはあまり関係の無い人物にしよう。

それでいて、いなくなっても誰も悲しまないような社会のゴミなら、もつといい。

そう、ゴミ。

生きていても人に害しかもたらさないような、あの人が大嫌いだと言っていた、犯罪者。

私の目的とは少しずれてしまうけど、それでも、初めて人を殺すのだから、難易度は低い方がいいに決まっている。

「た、助けてください」

目の前にいるゴミが震えながら喋った。

散々、痛めつけて、動けないようにしたのに、まだまだ喋る気力があるなんて、少し驚きだ。

「や、止めてください。もう、こんな事しませんから」

今にも泣きだしそうな声。だけど、聞く耳もたず。

無言でゴミに近寄り、そいつの左手を掴む。そして手近にあった岩の上に、岩盤浴させるように置く。

右手に持っていた金属バットを両手で握り、頭上高く振り上げる。

「や、止めてください!!」

とうとう泣きだしてしまったその男の腕に、岩に載せられて衝撃を和らげる事が出来ないそこに、私は力の限り振り下ろす。

「ぎゃああああ!!」

ガン!! という音が響く。人を殴ったような感覚じゃなかった。硬い岩を本気で殴ったような感触が、バットを伝って手に戻ってく

る。一発だけじゃまだまだ喋りそうだったので、さらに二発三発と、叩く場所を変えて振り下ろした。

息が上がり、暑くもないのに汗が噴き出して来る。額に浮かんできた汗を拭う。

そうだったら、駄目だ。私の目的が果たせなくなる。だから、証拠を残すような馬鹿な真似は出来ない。

これから私が行う計画を知ったら、あの人はどんな顔をするのだろうか。

「や、や……めて」

ゴン！ という音がビルの壁に反響する。頭はひしゃげ、白眼を剥き、割れた額から赤い水を流すそれを見ても、私はなにも感じない。

心が全然痛くならない。これもそれも、あのせいだ。

さーと、ゴミにはゴミに相応しい場所に放置してあげなくちゃ。

第3話 君とバイト場で

バイトをする事にした。

なんの変哲もない日常の中から、僕の事を抜き出してみたけど、特に驚く事はない。当たり前だが。

楓とカッポオになってから一日が過ぎた月曜日の放課後。

僕はファミレスの面接に来ていた。

ここは昨日、楓と一緒に入った、ファミレスっぽいなにかという雰囲気を持つファミリーストラン。

制服姿のまま窓際のボックス席に座り、向かいにはこの店長さんが腰を下ろしていた。

学校帰りになんとなくこの辺をぶらぶらしていたら、昨日は見かけなかったバイト募集という張り紙を見つけ、ふらふらと夢遊病者のごとく店の中に足を踏み入れた。

そして張り紙を見たという事を店長さんに伝えと、早速面接やるぞゴラァ！！などと脅されてしまったのだ、Lie だけど。

「採用！！」

「え？」

清潔な白衣を身に纏い、白いコック帽を被り、顔には無精髭を生やしている穏和そうな店長さんが、いきなりの大声で合格通知の言葉を白球のように放ってきた。

それを僕は、昨日のバッシングセンターで嫌というほどやった動作を繰り返し、見事ホームランにした。

……というのはいまだに無理だったので、素直にそれをクラブに収める。いや、待て待て待て。

「あの、僕、履歴書すら見せてないんですが」

「というか、まだ作ってないし。」

「いいんだ、採用！！ そんなの後で見せてくれれば文句なし。採用！！ イケメンが欲しかったんだ！！ 採用！！ ウチの厨房に

はフツメンしかいないからな、採用！！」

ちよ、どれだけ採用採用叫ぶんだこの人。なんかもう、口癖みたいになってるじゃん。

というか、僕はイケメンですか。眼科に行った方がいいと思うけど。

「いつからバイトに来れる！？」

「え、えーと、今日からでも大丈夫です」

「分かった！！　じゃあ、明日から来てくれるか！？　学校には行ってるよなあ！？」

「はい」

「じゃあ、明日の午後六時にこの店に来てくれ！！」

「はい」

「じゃあ、よろしく！！」

「よろしくお願いします」

店長さんに挨拶をしてから、僕は店を出た。東条さんと同じくらいハイテンションな人だから、少し距離を置いて接しよう。

ローテンションな僕には、ハイな人と触れ合うのは凄く疲れる事なのだ。

次の日の放課後。一緒に帰ろうと言ってきた楓や明からの誘いを断り、適当に時間をつぶしながらやって来ました商店街。

お洒落な外装の店の中に入り、店長さんの姿を捜す。

「おお！　真田！！　よく来てくれた！！では早速、この服に着替えてくれ！！　君には主に接客を担当してもらうからな！！」

「え……厨房じゃないんですか？」

「厨房は間に合ってるんだ！！　君は顔がいいからな！！女性客にモテモテだ！！」

「……僕、彼女がいるんで、そういうのは遠慮したいんですが」

「じゃあ、モテなくてもいい！！　むしろ俺に寄こせ！！　ただし、

営業スマイルは忘れるな!!」

やっぱり駄目だこの人。話してると疲れる。歌が下手なガキ大将が唄う時ぐらい声がでかいし、いちいち取る仕草も大げさだし。ふう……。

でも、仕事なのなら、別にいいかな。楓も納得してくれるだろうし。

最初の三十分間でレジの使い方を芸を覚えさせられるイルカのように叩きこまれ、接客の仕方を餌で釣って色々させる熊みたいに仕込まれた。

この表現でいくと、僕は明らかに人間扱いされておらず、客寄せパンダのような感じだ。さつきから店長が『君がいると女性客は増える!!』などと言っているので、パンダというのは間違いではなさそうだ。

というか、僕はそこまでモテないぞ。告白されたのだって、昨日の楓が初めてだし、女の子が男に黒い物体をプレゼントするバレンタインデーとかいう行事には全く縁がなかったし。

あつ、楓からは手作りのチョコケーキを貰ってた。羨ましいか、野郎ども。

僕が色んなものを教え込まれている間には、お客さんは来なかった。夕飯時なのに、これいかに。

この店の制服である、白を基調としたエプロンの裾らへんを、なんの意味もなくにぎにぎしたりパツパツしたりして時間を潰す。

「笑え!!」

「グハッ」

店長さんに思い切り背中を叩かれた。一時的に息を上手く吸い込む事が出来なくなり、本気で店長さんを睨みつける。

「睨むな睨むな。笑って笑って!! 営業スマイル!!」

そう言っただけで二カッと白い歯を出して笑う店長さんは、僕の汚れた心では直視出来ないぐらい、純粹そうな人に見えた。灰になりそう

です。

「あつ、そうだ！！君に店の仲間を紹介しなくちゃな！！ すまんすまん、気がまわりにくい男って評判なんだよ、俺！！ ガハハハハ！！」

そこは笑うべきじゃない。

店長さんが僕から離れて、置くの方に行く。

「こっちに来てくれ！！」

店長さんに促され、暖簾がかかっていて中が見えないようになっている場所——厨房の方に歩いて行く。

フロアと厨房を僕の独断と偏見で評価するならば、砂漠と南極だろうか。

フロアの方はお客さんのために効きすぎじゃないかってぐらいの冷房を入れているので涼しいっつーか、むしろ寒い。この店の制服が半袖なのも、寒さを手まねきしているだろう。

で、厨房。

中は広く、洗い場、野菜などを切る場所、肉を焼く場所、コンロがいくつも置かれている場所などと分かれていて、壁際にはでかい業務用の冷蔵庫が二つ並べて置かれていた。

そして……暑い。

今は稼働していないが、コンロで火を使ったり肉をジュージューしたりするので、その時にかなりの熱を放出するのだとみた。

そして、まな板の前に二人の男性が立ち、暇そうにしているが、あれは置物だろう。などと有り得ない事を想像してみました。

「はい、ちゅうううううもおおおおおおくうううううううゲホッゲホッ！！」

むせる前にその大声を止めればいいのに。

「あー、仕切り直し。えー、彼が新しく入ったバイト君だ。イケメンだからって嫉妬して虐めないようにな、フツメン達よ！！ がはははは！」

「よ、よろしくお願いします」

なんか凄く挨拶しづらくする紹介内容だ。

厨房の人達への挨拶が終わった時、来店を知らせるチャイムが店内に軽快に鳴り響く。

「あつ、真田くん、客だ！初めての接客を成功させてみる！！」
初めて能力に目覚めた主人公みたいに、最初からなにもかもが上手くいくわけじゃないか、とは思いつつも僕は言わない。

頬をかいて、「はい」とか真面目くんを装ってみるだけなのだ。
厨房が外部から見えないように設置されている長すぎる暖簾を左右に開いて、僕はフロアに戻る。

僕の初めての接客相手は、若い力ポオだった。

初体験がこんなバカツプル（推定）だとは、なんかやり辛いなあ……。

女の人の方に話しかけたら、彼氏から色目使ってんじゃねえよ！

！とか言われたら嫌だ。……言われないって。

「笑って行つて来い！！」

「こうですか？」

持てる限りの営業スマイルを顔に張り付けて、僕は店長さんを見る。

「なんか陰があるように見えるけど、それでもよし！！ さあ、行つて来い！！」

「はい」

金魚すくいをやる時みたいに、少し緊張しながらバポオ（バカツプルの略ですぜ）に近づく。

「いらつしゃいませ。二名様ですね？きちゅえん席と禁煙席どちらが……すいません、死んでもいいですか？」

「ええ！？」

僕のいきなりの発言に、彼氏さんの方が大げさに驚く。

「大丈夫です、あなた達に迷惑はかけないんで」

「そつという問題じゃないでしょ！？ ちょ、店長さーん！！」

店長さん呼ばれて来る↓僕は厨房にいた男性その1に肩を掴まれて拉致される↓店長さんが必死に謝ってるのを遠目に見る↓うむ、なんとも僕らしい↓なんて思っていていいか分からなかったので、とりあえず納得してみる。

「誰でも失敗はある！！落ち込むな！！しかし、死んでいいですか、とは流石に聞いちゃ駄目だ！！」

「すみません」

「分かったらOK！！ほら、水を汲んで持ってけ！！注文が決まったら、一緒に聞いて来いよ！！」

「はい」

清潔なガラスのコップに水を注いで、お客が座った店の真ん中辺りにあるボックス席に近づいていく。

お盆からコップを取り、二人の目の前にそれを置く。

そして、僕は無料で提供できるスマイルを顔に浮かべる。どうでもいいけど、笑顔って疲れる。頬の筋肉がピクピクしてきた。

「ご注文はお決まりでしょうか」

先ほどの僕の狂言を真に受けていた彼氏さんの方が、恐々と見上げてきながら注文する品を言ってきた。

僕はその品を、小さな電卓みたいな機械に打ち込み、注文をとる。

「分かりました。少々お待ち下さいませ」

よっし！言えた！！今度は噛まなかったぞ！うっしやー、テンション上がってきたー。冗談です。

客に頭を軽く下げてから、店長がいるカウンター席の中に入る。

「やればできるじゃないか！！」

「ガハッ」

「ガハハッハハ！！」

別に僕は笑ったわけじゃない。ただたんに、店長さんがゴリラもビビるくらいの力で背中をバンバン叩いてくるから、声が出ただけなのです。

暴力はよくないっす。

料理が出来上がったので、厨房の人が作った湯気が立ち昇るそれを、お客の席に持っていく、それぞれの前に置いた。

全部、注文が来たかどうかを確認してから、フロアに戻った。

教えてもらった仕事である食器洗いを機械の如く行っていると、

横からガキ大将もびっくりな大声で話しかけられる。

「真田くんは、もう夕飯は食べたのか!?」

「いえ、まだです」

「よおおし!! それじゃあ、新商品の味見役になってくれないかね!! 厨房の二人に頼んでも断られてしまったんだ、がははは!!」

「いいですよ」

ちよっとお腹が減ってきたし。味見役って事は、料金とかも支払わなくていいのかもしれない。

「よおし! よく了承してくれた!! それでこそ男だ!!」

「……ありがとうございます」

この程度で褒められてもいいのだろうか。

僕はあまり、人から褒められるような人格じゃないから、なんだから落ち着かない気分になる。

店長さんに連れられて、僕は厨房の奥にある休憩室に来ていた。

狭い空間に、机と椅子があるだけの簡素な室内。

そして僕の目の前には、紫色のパスタっぽいなにかっつーか、私危ないですよー的なオーラを放っているものが皿に盛られて置かれていた。

ふむ。社会になんの影響も与えない僕なんて死んでしまえという、店長からの無言のアピールだろうか。

死んでたまるかー、これから楓とバカップル路線をジェット機で激走するんではない。

「どうした真田くん!! さあ、食え!! 遠慮なんてするな!!」

「はい」

遠慮をするなどと言われても遠慮したいものは世の中にはゴロゴロ口しているという事実を、正面に座っている店長さんに言おうと思っただけと止めておいた。なんて反論されるか分からないからだ。

フォークを手に取り、毒物かなにかと勘違いしてしまうほどの毒々しい色をしたパスタを巻きつける。

うわ……具のエビすら紫色。なにで着色すればこうなるんだろう？ 絵の具？

巻きつけた麺を鼻の先に持っていていき、匂いを嗅いでみる。うん、ケチャップの良い匂いはする。しかしなぜか紫色。

「さあ、食ってみてくれ!!」

「はい」

ここにきて僕はもの凄く後悔していた。厨房の二人が味見をする事を断っていたのには、こういった感じになるのが分かり切っていたからだろう。

だったら僕にも教えてくれればよかったのに。あれか、生贄ですか。平成の日本で僕の尊い命を毒味役という職業で消しさるつもりなのか。

許すまじ……!!

とかなんとか思いながら、僕はパスタ（だと思ってたけど実はナポリタンだった。恥ずかしいからパスタのまま通すぜ）を口に運んだ。

「むっ」

「美味いか、真田くん!？」

「不味いです」

こんなのも食えるかー、と僕はフォークを机に叩きつけた。なんだろう、これ。

イカのように歯ごたえがある麺だがもはや分類不能、そして茄子のような味。ここまではまだいい。まだ我慢できる。

噛んでみると、それらの味の奥からなにかが顔を出す。

これは……。

「柑橘系の味がします」

「正解！！ 隠し味にオレンジの汁を麺の生地に練り込んでみたんだ！！ 味はどうだ！！」

「だから、美味しくないです」

「どこが不味いんだ！？」

シンジラレナイという顔をしながら、机に身を乗り出し、接近してくる店長さん。

どこがと言われたら全部としか答えようがないのだが、それと言ったらなんとなく銃殺されそうだったので口をつぐむ。

ううむ…… なんて言ったらいいのやら。

ここはお得意の嘘を交えながら、遠回しに伝えるべきか。

「えーとまずですね、この麺なんです。こう、噛んだ瞬間に爽快感とは逆の感覚が襲いかかって来まして、あれ？僕、ゴム噛んでたっけ？とかなりまして、いったいなにをどうやったらこんな未知の触感を出せるのかと少しばかり感動しますが、そこはやはりあれです。うん、不味い。あれ？ヤバイ。遠回しに言うつもりだったのに、結構、率直に言っちゃってるとかいう考えにたどり着くわけですごめんなさい」

あちゃあ、やっちゃった。

駄目だしばかりじゃん。まあ、しょうがないよね、僕って嘘をつかない正直者だし、てへっ。

もう、最後まで言っても大丈夫だろう。むしろここで止めた方が店長さんのためにならない。

「あと、これです。麺の味。なんですかこれ。昼の砂漠を素足で歩いて、夜の砂漠で地面に寝転がって寝るぐらい暴拳ですよ。もつというならば、アマゾンの奥地に半袖短パンで行くぐらい無謀です。さらに言うならば、南極の調査隊に裸で同行するくらい命知らずですね」

「うる採用!!」

「……うるサイヨウ?」

「うる採用!! うっ採用!! うっ採用!!」

……ああ、もしかして、うるさいっていう意味の、『うるさいよ』か? 発音の仕方が採用にしか聞こえないのだが。

あの後、なにを言っても『うる採用!!』としか言わなくなったリピート店長を仕方がなく無視して、僕は休憩室の扉を開ける。

そしたら、扉に貼りつくヤモリみたいに、厨房にいる男性その1とその2が聞き耳を立てている体勢で固まっていた。

「なにしてるんですか?」

「まあ、ほぼ予想通りだ」

「ははっ、俺ってば予知能力でもあるんじゃないかねえ?」

その1とその2が訳の分からない事を言って、散って行く。この人たちも無視しようかと思っただけ、やっぱり、その1だけを捕まえて聞いてみる。休憩室の扉を閉めて、その人と向き合った。

「もう一度、聞きますが、なにをやっていたんですか? その1さん」

「なんだその呼び方。オレの名前は小堂^{ショウドウ} 楔^{クサレ}だって教えただろ?」

「分かりました小1さん」

「ごっちゃになってんじゃない。あんまり先輩舐めると、あつつあつのチャーハン食わせるよ?」

「それは恐い」

「…… スープをストロー使って直接喉に流し込むぞ?」

「実にユニークだ」

「敬語すら使わないとか、なんなの君」

「実に面白い」

「面白くねえよ」

なんか、突っ込みもボケもローテンションだ。この人は僕と同様に低血圧の人なのかもしれない。

この小堂さんは、黒髪のウルフヘアーでメガネをかけていて、そ

の下にある眼光は結構、鋭い。醸し出している雰囲気はクールという感じだろうか。

「それで、小堂さんはなにをしていたんですか？」

話を誤魔化す気だったのかもしれないけれど、僕はそう簡単には誤魔化されないぜ。

小堂さんは、視界の端に芸能人でも見たかのように、僕から露骨に視線を外し、頬をポリポリと掻く。

「あー、まあ、あれだ。君が休憩室に連行されていったのを見て、ちよつと心配になってな。この店長は、ゲテモノしか新商品を考えないくせに、それを批判されるとかなり怒るんだ」

「あ、あれですか？ うる採用！！ とかいう、不可解な言語を発する状態になるんですね？」

「おつ、敬語になったな。その調子で頑張れ。店長の状態はそんな感じだ。ああいうふうになったら、無視するに限る。大丈夫。十分もしたら、元通りになるから」

「わかりましたー」

小堂さんとの会話が終わり、僕はフロアに戻った。僕以外のフロアのアルバイトさんと雑談をしながら、客がくるのを待つ。

なかなか雰囲気の良い場所だから、ここなら以外と長く続くかもしれない。

まあ、店長さんの病気みたいなのに関しては目を瞑ろう。

チリチリーンという風鈴みたいに涼しさを与える音が出て、お客の来店を告げてくる。

練習した営業スマイルを、顔面の筋肉を酷使して顔面に貼り付けてから、入口の方に顔を向ける。やっぱり疲れるなあ……。自然に笑うのならば、どうってことないのに。

「おつ、真田くんじゃあないかあ！ なにしてんのっ、こんな場所でっ！」

「東条さん」

外と中を繋ぐ扉を開けて入ってきたのは、学校の制服を着ている、

ハイテンション娘・東条さんだった。

東条さんは一人のようなので、カウンター席でいいかどうか尋ねた所、「ちつつちつ。甘いな、真田くんっ。私は今日は、デートなのだっ」という、言葉を戴いた。

ほう、デート。

東条さんの周りを確認してみる。

男、いない。女の子、いない。幽霊、たぶんいない。近くにいるのは接客をしている僕だけだ。

「……あー、なるほど。空気とデートなんだね。安心して。僕なんか、一昨日まで三百六十五日、空気とデートしてたから」

「馬鹿にしないでくださいえ！！ これでも私は男の子にモテるんだぜー！！」

「それは知ってるよ。でも、空気とデートなんでしょ？」

「違うつていつてるじゃないかっ！！ もう少ししたら、お相手が来るのだあー！！」

ニコニコ笑顔のまま怒るといふ、僕からしたらギターを一日でマスターするぐらい難しい事をやる東条さんを、少しだけ尊敬した。いやあー、はっはっはっ、冗談でっせ。

お相手が来ると何度も言っているの、その言葉を信用した僕は、彼女をボックス席に通し、水を置く。

「おおっ！！」

「……どうしたの？」

あまり関わりたくないテンションの高さだけど、自然と話してしまうのは、彼女の憎めない性格のせいだろうか。

「いやあゝっ。真田くん接客されるなんて、少し照れるじゃないかあっ！ にやははは〜！」

「そっか。では、ごゆっくり」

東条さんが言っていたお相手は、約十分後に来店してきた。

「あれ？ 真田。お前、こんな場所でバイトしてたのか？」

「……明。え？ なに、明が東条さんのデート相手なの？」

学校の制服を着たままの、茶髪ツンツンヘアーで見るからにチャラそうな男、カミヤマ アキラ上山 明だった。

「うーん……デートになるのかな。お前に断られて傷心しながら学校の中を歩いていたらさ、部活帰りの東条を見つけて、ここで飯を食わないかって誘ってみたんだ」

「へー。本当に明は女好きだよな。中学の時に三度の飯、ていうか、酸素よりも女が好きだって断言してたよね」

「事実だが、今ここで言うことじゃない」

眉間に皺を寄せたチャラ男が、店内に視線を走らせる。そしてボックス席に座っている東条さんを見つけると、パツと笑顔になった。
「んじゃ、俺はもう行くから」

「待てえい」

走り去ろうとする明の腕を掴み、思い切り後ろに引く。彼はバランスを崩して地面に倒れこんだが、ダルマのように瞬時に起き上がる。妙な場所だけ俊敏な奴だ。

「なにすんだよ」

「いや、暇なんだ。相手してくれ。その間、バイトは休むから」

「バイトしてろ！ 堂々とサボり宣言してどうすんだ！」

「独立宣言なんてしてないよ」

「誰も言ってねえだろ！」

ゴリラのように胸を拳骨で殴り、ウホウホウホ！ という奇声さえも発する。うん、冗談です。明は端正な顔をしたゴリラみたいな容姿じゃないんだ。

結局、明は東条さんのいる席に行って、談笑し始めた。

明から注文を受けてからカウンター内に戻ってきた僕は、いつの間にか戻ってきていた店長さんにお咎めの言葉を戴いている。

「あのな、真田くん。いくらなんでも、サボり宣言を店内でしちゃ駄目だ」

「すいません」

さすがにふざけ過ぎた。

昨日から、なんだか僕の心なのに他人の心のように分からなくなる事がある。

あー、あれだ。

心の内に封印していたあの性格が久し振りに自己主張をしてしまったからで、しかも閉じ込めている間にもう一つの性格の方はかなりレベルアップしていたらしい。

今では、無意識の内にでしゃばるようになってきた。抑えきれなくなっているんだ。

楓が相手ならば、まだ理性がいつもの数十倍働いて、Sを丸めてゴミ箱に捨ててくれるのだが、東条さんや明相手だとなぜかサボリ始める。

だからさつきから相手をおちよくるような発言ばかりしていたのだが、気を悪くさせてしまっただろうか。

もうしそうなら後から謝らなければいけないと思い、二人が座っている席を横目で確認してみる。

「そうなのだよ、上山くん！！　まさにその通りなのだっ、にやはは！！」

「だよな！！　真田って基本的にむつつりだよな！！　いつも無表情のくせに、相崎と一緒にいると体ばっか見てるし！！　あはははは！！」

……うん。

とりあえず言いたい事は、僕は楓の体ばかり見てません。

謝らなくてもいいというか、むしろぼくの方が心理的虐待を受けたので損害賠償を請求したい気分だけど、それは呑み込んでおく。

「あ、それと真田くん！！　知り合いでも、あまり長話してはいけないぞ！！　仕事申だという事を忘れるな！！」

「次から気をつけます」

「よし！！　それじゃあ、新商品の……」

「食器洗ってきますね」

なんだこの店長さん。ついさつき駄目出しされたばかりなのに、全く反省の色を見せないどころか、暴走の色を濃くしてるよ。

「待ってくれ真田くん！！　今回は自信あるんだ！！　本当だ！！　お願いだから食ってくれ！！」

「……さて、食器洗わなきゃ」

「あー！！　無視された！！　バイトの子に無視された！！　俺が爬虫類っぽいからか！？　だから無視するのか！？」

ダンプカーが砂利道を五台続けて猛スピードで走り抜ける時くらいうるさい声を発しながら、店長さんは僕の肩を掴んできた。嫌々、振り向いてみると、なんだか泣きそうな顔していた。

「……本当に、自信作なんですね？」

「ああ！！　間違いない！！　今度こそ、君の肥えた舌も満足するに決まっている！！」

「分かりました。それでは、もう一度だけ」

別に、僕の舌は肥えているわけじゃなくて、店長さんの舌が壊滅的に損なわれているだけなんだという事実は伏せておく。

「うる採用！！」

「失礼しました」

「うる採用！！　うる採用！！」

あれで自信作だとか、本当に店長の味覚と視覚と嗅覚とセンスを疑う。

地球育ちのサイヤ人が、笑顔で人類抹殺計画を遂行するくらい有り得ない料理を出されてしまった。

とりあえず、壊れた店長を休憩室に放置して、僕は厨房に出る。なにかの料理を作りながら、小堂さんが僕の方をチラッと見てきたが、結局はなにも言わずに火の調整を始めた。

さっきの宣言通り食器を洗おうと思ったなら、すでに誰かがやっていた後だったので僕はフロアに戻り、机でも拭こうかと思い布巾を濡らした。

丁寧に絞っていると、ニュースキャスターの冷静な声で異常な事件を説明しているのが聞こえてきた。

『今日の朝八時頃、ゴミ箱に入っていた身元不明だった死体の身元が判明しました。佐々木^{ササキ} 頼一^{ヨリカズ}、二十一歳。大学生のようです。これも不同集成の犯行なんですかね、御陵さん^{ミササギ}』

顔を上げ、ニュース画面を注視する。

御陵と呼ばれた男の人は、犯罪心理学に精通しているらしく、その筋では有名な人のようだ。

その人が偉そうに今回の事件についての見解を話し始めたが、僕の視線は、佐々木頼一の顔写真に釘付けになってしまふ。

そうだ、この、丸々と太った顔に良く似合う丸メガネ。ボサボサになっている髪の毛。細く、気持ち悪い目は、忘れようにも忘れられない人物だ。

チラッと、無意識の内に東条さんの方を見てしまふ。

僕が見ている事に気付いた東条さんが、笑顔で手を大きく振ってきた。僕はそれにアインをして返す。冗談でっせ。

東条さんから視線を外し、もう一度テレビ画面に映し出されている写真を見る。

うん、やっぱりだ。

今報道されているこの事件は、今日の朝に死体が発見されたものだ。

頭は食虫植物のように口を開き、爪は赤い花を咲かせ、体は暴力のフルコースを堪能していたらしい。

そして発見された場所が、工場のゴミ箱というものだから、犯人の異常さが窺えるというもの。

加害者はゴミはゴミ箱に捨てようと思ったのだらう。僕だった間違いなくそうする。

そして犯人の思考が一緒だったとしたのなら、僕も異常者の仲間入りという事になる。

犯行時刻はおそらく、今日の深夜二時頃。どこか別の場所で殺害

されてから、ゴミ箱に入れられたというのが、ネットやテレビで集めた情報である。

そして、この佐々木頼一という男とは、直接的にはないが面識がある。

中学三年生の夏。

蝉がやかましく鳴き、コンクリートが熱を反射してくる住宅街。

うだるところか、茹であげられるような暑さの中での学校からの帰り道、僕や楓、明は東条さんからある相談を持ち掛けられていた。
『ストーカー被害にあってるって？』

『そうなのだっ』

いつもよりも元気が九割ぐらい減っている東条さん。顔は未来から来た自称猫型ロボットよりも真っ青になっているようにみえた。

『最初は勘違いだと思ってたんだけど、さすがにいつものように視線を感じていたら、そんな事はないはず。でね、最近は部屋に置いてある家具の位置が微妙にずれていたりするのだ。私、どうしたらいいんだろう……？』

家具の位置がずれているという事は、ストーカーは家の中に入っている可能性が高い、というかもう入っているのだろう。

東条さんは親が海外赴任中であるため一人暮らし。ゆえに、親などが家具をずらしたとは考えられない。

『そっか……。警察には行っただの？』

僕がそう聞くと、東条さんはゆるやかに首を横に振った。いつもの元気を銀河の果てに遠投でもしてきたのだろうか。

『だって、ドラマとかだと、なにか起こってからじゃないと、警察は動いてくれないみたいだし。いつ変な人が入ってくるのか分からない恐怖と闘いながら暮らすなんて、もう嫌だっ』

『まずはあれだな。うん、やっぱり警察に行くべき。そこで相手にされなかったら……。そうだなあ……。俺達がつきっきりで警護してやる！ なっ、真田？』

『うん、それはいいかもしれないね』

こんな会話が過去にあり、僕達は東条さんの周りを常に観察する事にしていた。

街に出かける時も僕達がついていき、周囲に怪しい人物がいなかどうかを確認する。

その結果、いつものように少し離れた位置からこつちを見てきている男を発見する事ができたのだ。

そいつが、佐々木頼一。東条さんのストーカー。高校に入ってからはその話を聞いていなかったたので、被害は治まったらしい。

まあ、その後もこの男は、色んな人の後を追跡してたらしいけど、それにしても、殺されたのか……。驚きはするものの、可哀想だとは思えない。

だって、犯罪者だもん。不同集成に比べればまだまだ可愛いものだけど、それでも罪を犯しているという点においては、この人もあいつも同じ。

それに、ストーカーだし。女性に与える精神的な被害が尋常でないっていう話だもん。死んでも、どうでもいいやつ。

今まで捕まらなかったのだって、警察が動かないからっていう以外にも、こいつが上手く隠れているという理由もあるだろうし。

犯罪者のくせに、精神的被害を負わせているくせに、根本的に逸脱しているくせに、逃げまわる。本当に、腐った男だ。

「どうした真田。なんか恐い顔してるぞ」

「別になんでもないですよ」

なぜか隣にいた小堂さんにそう言われ、僕は慌てて顔の筋肉を緩める。恐い顔をしていただなんて、佐々木に対する嫌悪が出ていたのだろうか。

「それにしても……」

さっきからこの御陵っていう人は、とんだ的外れの事を言ってる。なにが不同の仕業で間違いないだ。あなたはなにも分かっている。それで本当に、犯罪心理学に精通している人なの？

今回の犯行は、絶対に連続殺人犯・不同の仕業ではない。僕はそう断言できる。

だってさ、明らかに殺し方が違うから。例えば。

つい最近、起きた殺人事件を挙げよう。

僕が好奇心に負けて、別世界に逝ってしまうという異常に陥ったあの事件である。

被害者はまだ身元が判明せず、捜査も難航しているようだけど、あつちは不同集成のもので間違いない。

だって、殺害方法が昔、この街にいた時と同じだから。同一じゃない点を挙げるならば、家族を狙っていない所かな。

被害に遭ったのは、どこにでもいる普通で平凡な一般家庭だったし。

だけど、殺害方法は同じ。

身元不明になるまで被害者の顔をぐちゃぐちゃにして、身元が判明するようなものを全て盗んでいく。

そして、人を恐怖に陥れる。

一度、あいつに会ったら聞いてみたい。

なんで、人を殺すんですか——って。

人を殺しても、メリットよりもデメリットの方が大きい。

そいつを殺して、その代償として自分の人生を棒に振るような危険を冒してまで、殺す価値がある人なのだろうか。

捕まらないためにありとあらゆるトリックを用いたでしょう。でも、そんなものを考える時間、労力、頭脳、それら全てを消耗してまで、本当に殺す価値があるのだろうか。

さらに言ってしまうえば、上記のような事を考えて、価値があるのかどうかを思考するくらいの価値があるのかな……？

僕は、その辺が知りたい。

なんで人を殺せるのか。

突発的なものならしょうがない。そんなものは、たぶん生きてれ

ばあるだろう。

計画的に、知能犯が行うような感じの事件。だけど、殺したいから殺しましたとも言いたそうな感じの不同集成。なにがしたいんだか。

首を何度も傾げ、思考を百八十度回転させたあとに百八十度回転させる。無意味だけどね。

「うぬぬぬぬ」

「どうした」

小堂さんが話しかけてきた。横で唸っている僕を見捨ててはおけないらしい。

「いえ、低スペックなパソコンみたいな感じの僕の脳では決して解く事が出来無さそうな問題にぶち当たりました。もう、解かないでハンマー使って壊そうと思うんですけど、どうですかね？」

「好きにしたらいいんじゃないか？ …… 好奇心から聞くけど、どんな問題だ？」

「うーん、小堂さんに言っても理解してくれるかどうか分からないんですけど。一応、言ってみます。宇宙って、どうやって出来たんですかね？」

「ビックバンとかいう爆発のせいだろ？」

「いえ、それは分かってます。だけど、ビックバンが起こる前は、どうなってたんですかね？ 宇宙っていうものが存在しないんですから、そこにはなにか別のものがあつたのか、それともなにもなかったのか。なにかあつた場合は、僕たちとは別の世界があつたのかもしれませんし、なかった場合は、なんで爆発が起きたんですかね？」

「分かるか」

「そんな単語で片付けられたら困るんですよ。初期ファミコン並みの処理能力しかない僕の頭が必死に稼働して、もうオーバーヒート直前なんですから」

「落ち着け。まずは落ち着け。どうしても分からないのなら、ネッ

トで調べるよ」

「いえ、これは自分の頭で考えるから面白いんでして――」

なんか口に搭載されているエンジンが全力で動き始めようとした時、来客を知らせる音が鳴り響く。

「いらっしやいませー」

どうだこの完璧な営業スマイルは。今日、練習しまくったおかげで、こんなにも自然に出るようになったではないか。

相変わらず頬の肉がピクピクするけどね。

小堂さんとの会話を途切れさせたお客が中に入ってきて、僕は思わず苦笑する。

「楓……」

なんなんだ今日は。なんでこんなにも僕の知り合いが集まるのだ。これはなにか？僕は知り合いを集めるような蜜を毛穴から発しているのだろうか。

「あれ？ 恭史！」

薄手のパーカーにショートパンツ、いつもの黄色いリボンで結んだサイドの髪がピヨコンと一房、下ろした髪から独立宣言でもしているのように飛び出ている髪型の楓が店内に入ってきた。

「恭史ってここでバイトしてたっけ？ 一昨日、初めてきたんじゃないの？」

「今日からバイト始めたんだ。何事も経験が必要だからね」

「そっかそっか。良い事だね、うん」

納得し始めた楓をカウンター席に座らせて、前に水を置く。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「あははは。恭史にそんな言葉遣いされるの、新鮮で楽しい気分になる。ねえ、あれ言ってよあれ」

「……あれって？」

「お帰りのさいませ、ってやつ」

「ここは執事喫茶じゃないよ」

「あははは」

なにがそんなに楽しいのか、楓は表情を崩して、心からの笑みを浮かべ、人目もはばからずに快活に笑った。

「楓、なにしにきたの？」

周りに誰もいないのを確認し、新しいお客が来る様子もなかったので、僕は目の前に座っている楓に話しかけた。

「もちろん、ご飯を食べにきたんだよ」

それ以外になにかあるの？とでも言いたそうな眼差しを向けてきたが、僕はそれを右から左に受け流す。

「ふうん……。で、なにを注文する？ なんでも言っていよいよ、厨房にいる人が作るから」

「まるで自分が作るかのように、自慢げだね」

「うん、九割は僕が超能力で作ってるから」

「え！？ 凄いね」

「あ……うん。凄いでしょ」

なんか信じられた。

こんなの、ガキ大将の後ろにくっついているトンガリ頭の金持ちが、冴えないメガネの少年に財産を全部譲るぐらいありえないのに。

メニュー表を見て「うーん」とそれっぽく悩んでいた楓は、今日は自分でちゃんと決定した。

「じゃあ、ナポリタンで」

「却下」

「なんで!？」

「僕は、ついさっきナポリタンで死にかけたんだ。それを食べるなんて、腹ぺこのライオンを砂漠に置き去りにするぐらい駄目な心の持ち主なんだよ」

「普通に注文しただけなのに……」

いや、これは別に意地悪をしているわけではなく、さっきの新作店長ゲテモノ料理が出てきそうな予感がしたので、楓の身を案じての発言なんだけどね。

結局、楓はお手軽チャーハンを頼んできた。

僕はそれを厨房の人に伝えて、楓とばかり話していたらまた店長の毒見役をやらされそうだったので、仕方がなくフロアのお客の手元にあるコップに水が入っているかどうかを確認しに行く。

といっても、今、この店内にいるのは東条さんと明のなんちゃってカップルと、バカッポオと楓しかない。

なのでバカ（『ツポオ』をつけるのさえ面倒になってきた）達の所へ先に行き、その後で東条さん達の席に行く。

僕がおかわりの水を持って二人の席に行くと、まずは東条さんが笑顔で迎えてくれて、明はどことなくダルそうな感じの顔を向けてくる。

「水のお代わりいる？」

「もらうのだよっ！」

「サンキュー」

二人ともそれぞれ返答してきて、僕は東条さんのコップに水を注ぎ、明のコップには氷だけ落としてその場を去る。

「店員さん！」

「なんででしょうか？」

「うわっ、白々しい笑顔！！ 分かってんだろ、俺のコップにも水を注いでくれ」

「その氷が全て解けましたら、水になると思いますが……」

「なにを当然の如くほざくか、この野郎！！ 水、水をくれ」

うーん……駄目だ。実験してみたけど、やっぱり抑えられないや。もうこの性格で押し通すか。楓以外には。

嘆息しながら、明のコップに水を注ぐ。もちろん、表面張力で水が綱渡りをするかのような危なっかしさを演出するのは忘れない。

一応、お客さんなので、東条さんには営業スマイルを使って接する。

「あつ、そうだ。東条さん、あつちに楓がいるんだけどさ、呼んでこようか？」

僕は、この席からは真ん中に居座っている態度のでかい柱のせい

で見えない、ちょうど楓が座っている辺りのカウンター席を指差す。
「あいちゃんがここに来てるのっ？ よし、それじゃあ呼んできてもらおうかなっ。上山くんはもうどこかに行っているのだよっ！！」
「うわっ、ひっでえ……」

東条さんの無邪気な笑顔から繰り出された言葉に、『戦国我双』というゲームで、百人斬りをした時に感じさせる、達成感や爽快感を味わっているような表情をする明。明ってマゾだったんだ、うわあ……なんて思わない。だって冗談だから。

邪魔者扱いされてしまった明を、腫物を扱うかのような繊細さでカウンターに導き、適当に座らせる。

そして、僕は楓の椅子に近づき、営業スマイルは貼り付けずに話しかける。だって、あれ疲れるし。

「楓、あっちに東条さんがいるからさ、話してきなよ。ここにいても、僕はバイト中だから、あまり話してられないし。楓も、暇するのは嫌でしょ？」

「え？ う、うん、分かった」

楓は、なんだか少し考え込むような顔、というか、なんか納得いかないとも言いたげな表情で僕を見つめてから、東条さんの席に向かう。なんなのだろうか。

明がカウンター席に座り、机に奇妙な言葉を書き始めるのとはほぼ同時に、またもやニュースの話題がさっきの事件についてになる。

最新情報を伝えるつもりなのかと思い、それを見ていると、唐突に肩を後ろから叩かれる。

「なに、君って、あのニュースの話題に興味あるのか？ さっきからあの時だけ、テレビ画面を見ているみたいけど」

小堂さんだった。出会ってからまだ一時間も経っていないが、向こうから話しかけてくるのを考えると、だいぶ打ち解けてしまったようだ。

「いえ、ただ単に、不同の動向が気になるだけですよ」
この事件に不動は関係していないけれど。

「ふむ、不同……ね」

天井を仰ぐように見ながら、ポリポリと頬をかく小堂さん。

「なにか知ってるんですか？」

「いや、噂なだけどさ」

そう言つて、小堂さんは僕の方を見てくる。

「十年くらい前に……そうだな、不同と同時期にこの街にいた放火魔を覚えてるか？」

「ああ……はい、なんとか。確か、火野^{ヒノ} 美見^{ミミ}っていう女性の犯罪者ですよ」

「ああ、そうだ。よく覚えてるな、君は」

「個人的に興味があつたので、覚えていただけですよ」

「へえ。俺の知っている噂はさ、その火野っていう女が、不同と一緒に行動しているっていうものなんだ」

「なるほど。犯罪者同士で傷の舐め合いでもしてるんですかね」

僕がそう言つと、小堂さんはネタが出ない時のゲームクリエーターみたいに「うーん」と悩み始め、「そうじゃないっばいんだよな」と続けた。

「そうじゃないって……ああ、傷どころか怪我をしたせいで見えている筋肉を舐め合つていう意味ですか？ それは過激ですね」

「全然違う」

「それじゃあ……」

「それも違う」

「僕はまだなにも言つてませんよ」

「君がいう言葉が予想出来たから、先手を打たせてもらったんだ。とにかく、俺が知っている噂はそういう類のものじゃなくて、二人でこそ話合っているとか、新しい犯罪を行おうとしているとか、そんな感じ」

新しい犯罪か……。不同はまだまだ人を殺し足りないのか？ 火野はまだまだ燃やし足りないのかな？

火野という犯罪者は、さつき小堂さんが言っていた通り、不同と同

時期にこの街で活躍……というか迷惑を振り撒いた放火魔の事。
わずか一ヶ月の間に、十以上の家に、花咲じいさんみたいに、燃え盛る花を咲かせた糞野郎である。

犯行を行う時は、必ず水曜日の夜に出没していた。もちろん、警察も色々と捜査をしていたが、結局、捕まっていない。

僕の嫌いなタイプの犯罪者。死ねばいいのに。

というか、この街は犯罪者のバーゲンセールでもやっているのだろうか。激安だけど、買い取ったら殺されても文句言わないでください、とかそんな感じの。ないか。

「それでも、火野と不同って、どこに接点なんかあったんですかね？」

「知らない。逃亡者同士でたまたま会ったんじゃないのか？」
「なるほど」

随分と投げやりな答えだったが、僕は表面上だけでもそれに納得してみよう。

それで会話が途切れ、小堂さんは欠伸をしながら厨房の方に消えて行った。暇だったからここに来たのか。

僕は一度、中断していたテレビ観賞に戻る。

画面の下の方に小さな文字が現れたが、少し離れた位置にいるのでそれが見えなかった。なので、少しだけ近づいて文字を読む。

「……」

別に新しい情報じゃない。さっきのニュースを繰り返し流しているだけらしい。

溜息を吐き、僕は左に視線を投げた。さっきまでいた位置からは大きな柱のせいで楓達の席が見えなかったけど、ここからならよく見渡せた。

四、五歩しか違いがないのに、これだけの違いがあるのか。

楓と東条さんは向かい合って、笑っている。時折、東条さんが売れない芸能人みたいにオーバーリアクションをしている場面が見受けられた。

「平和だなあ……」

この街に殺人犯がいても、この街で殺人事件が起きていようとも、この街が狂い始めていようとも、僕の世界はなんにも変わらない。

だって、僕の世界の登場人物は、誰も狂っていないし、壊れていない。平和だ。

「なっ、明」

「なんだよいきなり」

カウンター席の端で俯いている傷心明に声をかけてみたが、いつものようなお調子者的な答えはもらえなかった。

藍色よりも濃い空気を鎧のように身に纏っているブルー戦士は放っておくとして、僕は他のアルバイトの人が洗った食器を拭く作業をする事に。

「あつ、これで最後ね」

「うん」

同い年の女の子が手渡してきた食器を横で受け取り、ブーメランのように投げる……のは妄想でっせ。布巾でキュッキュッと拭いていく。

「さなつち」

「さなつち？」

横にいる女子が僕の目を見つめながら、なんかポケットなモンスターの名前にありそうな、なにかを口に出した。

その、子守唄のように心地よい声が耳に届けられて、僕は寝ぼけているのではないだろうかとかなんとか疑ってしまう。

だって、会ってから二時間も経っていない女の子からあだ名つつか、取りようによっては嫌味にも聞こえる名称で僕を呼ぶんだもん。

とりあえず水気を取った皿を指定の位置に置き、女の子と視線を合わせる。名前なんだっけな。

馴れ馴れしい女の子、略して馴れ子ちゃんは僕よりも頭一つ分小

さく、黒い髪にカチューシャをつけている活発そうな子だった。

第一印象としては東条さん以上にハイテンションだとは思えないけど、それと同じくらいはいくかもしれない。僕の周りに騒がしい人がまた増えた。

「あつれー？　もしかして忘れてる？　三歩、歩けば忘れるカニ頭みたいな？」

「カニじゃなくて鳥ね」

「あつそうか。ごめんごめん。全く抽出する脂がないとはこの事だね」

「……もしかして、油断も隙もない……かな」

どっちにしても、使い方は間違えてる気がするけども。

なんなのこの子。どこをどうやってたらそうやって覚える事が出来るんだ。

「でね、さなっちさなっち」

「さなっちって、僕の事でいいのかな？」

「外れ前じゃん」

「……当たり前かな」

うん、分かりにくい。人と話すのに、なんでこんなに頭を回転させなければいけないんだ。

「で、本題に入るんだけど」そう言いつつ、馴れ子ちゃんはここからでは見えない、楓達がいる方向を指差す。「さっきのピヨコン髪の可愛い女の子は、さなっちの彼女？」

ピヨコン髪って。いや、まあ、今日の楓の髪型はそんな感じだけど。だけど、そんなウサギの跳ね方みたいな呼び方にしなくても。

とかなんとか思いながらも、馴れ子ちゃんに楓との関係をズバリ言い当てられた僕は、驚きのあまり、アクション映画のように後方に吹っ飛んだ。冗談！

顔はいつもの無表情を保ちつつ、内心ドキドキしながらも、馴れ子ちゃんに頷く。

「うん、そうだけど。あの子、楓とは幼なじみでね、それで昨日、

思い切って告白してみたら、見事成功したってわけ」

「へえ……そういうのいいね。なるほどなるほど、昔からの想いを伝えようと一念勃起したわけだね！」

「女の子がそんな事を言っちゃいけません」

いちねんほつき。いちねんぼつき。平仮名で書けば結構似てるけど、意味は出来杉ちゃんと駄目なメガネの少年くらいの差があるね。

「え？ あっ……ああ！」

自分の言った言葉の卑猥さに、ようやく気付いたのか、馴れ子ちゃんは顔を真っ赤に染め上げる。

馴れ子ちゃんはいやいやとでもいう風に首を振りながら、フロアから厨房に走って行ってしまった。

「さなつちに汚された！！」

「……」

捨て台詞と取るのか。いやでも、止めてくれ。今の言葉を楓が聞いていたらどうする気だ。

逃げ惑う虫を笑顔で踏み付けるような、純粋さと狂気を兼ね備えたバーサーカーが出来上がるかもしれないぞ。

楓にはそんな属性とも、特徴とも言えないなにかを習得して欲しくない。

試しに、少しだけ場所を移動して、楓の席が見える位置に立つ。

親の反応を窺う子供のような純粋さを瞳に宿らせるように努力しながら、僕は、楓からの睨みを頂戴しました。ごちそう様です。

『聞こえてた？』

瞳に載せた言葉を、眼球で蹴り飛ばして楓に届ける。

ゆっくりと、彼女は頷いた。

『怒ってる？』

眼球に載せた言葉を、体罰教師が生徒にケツバットをするついでに、一緒に殴ってもらい、楓に届ける。

彼女は机に置いてある紙ナプキンの中心ら辺にボールペンを貫通させ、笑顔で頷いてくる。

「……………」

楓の怒ってる姿を見るのは少し楽しいが、しかし、今日はなんだか異常な感じがする。

瞳に宿っている色が、怒りや悲しみなどではなく、そう、あれは——昔、嫌というほど体験した、殺意という名の感情のように思える。

というのは僕の勘違いだとしてもだ。なんでボールペンを貫通させたのだろうか。なんかの比喻？

お前の体もこんな感じに、風通しをよくしてやろうかゲヴァヴァ
ヴァヴァ！的な？

楓が僕の方を見つめてきていると、なぜか座席の下にいたらしい東条さんが出てきた。

そして、不穏な空気を察したのか、東条さんは声高らかに宣言する。

「私はこれで失礼するよ！！　じゃね、あいちゃん！！　ごゆっくり！！」

「あつ、うん。バイバイ」

「真田くんを虐めちゃ駄目だぞ！　付き合い始めたばかりなんでしょ！？」

「……………そうだね」

東条さん、ナイス。楓の表情を少しだけ緩ませてくれた。誉めてつかわずぞ。

東条さんが席から離れ、走ってカウンターの方に向かってくる。

馴れ子ちゃんかどっかに行ってしまったので、フロアには僕しかない。なので、習ったばかりのレジ打ちをする。

「えーと、五百円になります」

「はいはい」

「ちょうどお預かりします」

「じゃあね、真田くん！　あいちゃんと仲良くするんだよ！」

「うん、東条さんも明と一緒に帰ったら？」

「うつん……残念ながら、また探しモノをしなくちゃいけないのだよ！ 見つけるモノが一杯あるから大変なのだ！！」

「そっか。じゃあね」

「バハハハイ！！」

元気に走り去って行く東条さん。暗闇に支配され始めた街の中でも、輝くような存在感を放っていた。

うーむ、やはり東条さんだ。馴れ子ちゃんとか店長とは比べようもないほどのハイテンション。

馴れ子ちゃんの第一印象で、東条さんレベルだと感じたが、この何日かで東条さんはレヴェルMAXにまで近づいている。

それは、跳ねるしか能の無い鯉の王様と、愛くるしい顔とは裏腹に、雷を繰り出してくる電気ネズミぐらいの差がある。うむ？ これではイマイチ分かりにくいか。やり直し。

ミジンコとアメーバぐらいの差がある。……あまり変わらないので閑話休題。

「真田くん。君はもう、上がってもいいぞ」

「あつ、はい」

どうやったらあの差を上手く表現する事が出来るのかと、一人で頭が蒸発しそうなほど悩ませていたら、後ろから店長さんに声をかけられた。

時計を見ると、なんと、もう八時だ。あれ？ 二時間しか働いてない。あまり働いた記憶ないけど。暇だからしょうがないね、がはは。

「明日からは十時ぐらいまで働いてもらうけど、大丈夫か？」

「はい、大丈夫です」

「遅くなる事は、親に伝えておくように。バイトをしている事を学校に伝える義務があるのなら、一応、報告もしておくこと。分かっただか！？」

「分かりました」

というか、僕の学校は原則アルバイト禁止なんですけど。すっか

り忘れてた。うーん、ばれなければいいか。これで見つからなければ、完全犯罪成立ですな。

犯罪じゃないけど。

ファミレスの制服から学校の制服に着替えた僕は、楓と一緒に歸路に就いていた。

明は、なんかコーラで酔ってたっぽいから、放置してきた。

「いやー、それにしても恭史の接客は、なんだか愛想が悪いよね」
電灯がポツポツと頼りなく歩道を照らす帰り道。車道を走る車はあるけど、人は帰宅中のサラリーマンとかしかない。

僕たちみたいな学生は、不同を恐がつて家に絶賛引きこもり中なのだろう。そんなことをしていても解決にはならないと思うけどね
いや、むしろそっちの方が危ない。だって、あいつは住宅に侵入して犯罪を起こすんだから。

「あれ？　おーい、恭史」

「……え？　ごめん、なに？」

考え事をしていたせいで、楓が話しかけてきている事に気付かなかった。

横にいた彼女がいつの間にか僕の前に来ていて、手を左右に振っている事さえ、脳は認識しなかったのだから職務怠慢も甚だしい。

「もう、恭史は本当に考え事をすると、周りの声が聞こえなくなるよね」

「ごめん」

ぶうつと頬を膨らませた楓を見ると、両頬を手で摘まんで、ふしゅーっていうのをやりたくなる。

しかし今は怒られている身。想像の中でやるだけに留めておこう。

「もう、愛想がないのはいつもの事だもんね！」

「なにいつてんの。僕だって笑う時は笑ってるよ。いつも仏頂面つてわけじゃないでしょ？」

「それはそうだけど……」

そう言った後、楓は複雑そうな顔をする。

なにをそんなに悩んでいるのか僕には理由が分からないので、さつき彼女がしてきた質問を必死に思いだし、遅い答えを口にする。

「僕の接客が愛想ないなんて言わないでよ。あれでも結構、営業スマイル頑張ってたんだからさ。一昨日、街に行った時に見せてたやつよりはマシでしょ？」

なんだっけ。楓曰く、怒っているような、泣いているような、笑っているようなよく分からない笑み……だっけ？

それぞれの言葉をひき肉にして、ハンバーグを作って食べたなら、胃の中で四方八方に広がって死に至るぐらい反発しあう言語だけどもうむ？ 僕も自分でなにを言っているのか分からない。疲れで脳が働いてくれない。

気を抜くと欠伸が出そうなので、口元をずっと引き結びながら歩き続ける。

あんな暇なバイト場でも疲労って溜まるもんなんだ。初めて知ったよ。

「確かにそうだけどさあ……」

なんか釈然としない。とでも言うかのように、楓はぷいっとそっぽを向いた。

これは一昨日、バッテリーングセンターに行った時と同じ行動を取るべきだなと瞬時に悟った僕は早速、楓の視界に入り隊（隊員募集中）の会長らしく、逆方向を見ている楓の視界に回り込む。

どうせ今回も視界に入る事はあまり出来ないのだろうとタ力をくくっていたのだが、なんと今回は一発目から楓の目に映る事ができた。

昨日から比べたらもの凄い進歩だと、自分で自分を褒めまくった後に、ちぎってやろうかと思った。だけど。

「あつ……」

襲って来るのは、嬉しさではなく後悔。それは、水に垂らした墨

汁のように広がり、僕の心の中を満たしていく。

僕には、よく分からない怒りを楓は抱いているのだろうと思って
いた。しかし、それは違ったようだ。

立ち止まった場所の近くにある、黄色が混じった街灯の光に照ら
される歩道。すれ違う人達なんて田舎に近づいている今ではない、
そんな道で。

「……泣いて」

いる？

なんで？

楓は、僕に見られた事が恥ずかしいのか、それとも見られなくな
ったのかは分からないけど、頬を流れた水の軌跡が残っている顔
を背ける。

今度はふざけて回り込もうなどと思えない。だって、訳が分から
ないから。

楓の涙を最後に見たのは、確か小学一年生の時。それ以来、僕の
前では一度もあんな顔を見せなかった。

分からない。分からない。

彼女は震えた声で、聞いた人の涙も誘いそうな悲しい声音で、呆
然としている僕を見ないまま、一つの質問をしてきた。

「ねえ、恭史？私の事、好き？」

静かな、静かな、声。

なんでこんなにも、楓は不安そうなのだろうか。僕の知らない間
に、なにかあったのかな？

「どうしたの、楓。なにかあった？」

さっきの質問には返答せず、涙の原因を追及してみる。だって、
僕の気持は前に伝えたから、分かっているはずだから。

楓の横顔を見つめ、返答を待つ。しかし彼女は首を横に振ると、
雨の下に晒されている弱々しい口ウソクの火のような声を出す。

「答えてよ……」

僕は、一体なにをしたのだろうか。
一体、なにをして、彼女をここまで弱らせてしまったのだろうか。
いつ、なにをやらかした。

バイト場に来た時の楓は、まだ普通どおりに見えた。僕と談笑して、東条さんと一緒に話して笑って。

……いや、ちょっと待って。

そう言えば、おかしい。

楓がファミレスに来る事が。楓は家で大人しく本を読んだり、料理を作るのが趣味の女の子だ。東条さんみたいに活発な子とは違う。最近こそ、東条さんの考えに同意しているからなのか、僕を街に誘ったりして活発そうに見えるけど、本当はその逆。

夕飯だって、自分で作って食べる方が美味しいとか言って、外食はしない方だ。

たまには外食もと思うけど、そういう時は大抵、誰かと一緒にだ。例えば僕とか。

おかしい事があったのに、僕は今朝起きた殺人事件の話題で一杯一杯だった。

それに思考の半分以上を持っていかれていたせいで、楓のおかしな動向に気づくのが遅れてしまった。

そこでまた、楓の泣き顔が視界に入った。そのせいで、思考が中断させられる。

「……あははっ」

——唐突に楓は笑った。マイナスドライバーでプラスのネジを回すかのような、無理やり感があった。

「冗談だって、冗談」

僕に背を向けて、楓は歩き出す。声には湿気が混じっている。

冗談のはずがない。……けど、せっかく楓がそう言っているのに、僕もそれに乗った。

「だよ、ね。冗談だよな。僕は一昨日、自分の気持ちを言っただけ

りだもん。そう簡単に心変りはしないよ」

というか、これから先もする予定はない。ずっと、ずっと。

「うん、そうだね。……ごめんね、変な事を聞いちゃって」

「いや、僕の方こそゴメン。なにか不安にさせるような言動をしたんなら、謝るから」

僕の言葉に、楓はしつかりと首を左右に振った。

「ううん、大丈夫。私が勝手に考え込んで、暴走しただけだから」

「そう？ それでもさ、なにかあったら言つてよ。僕は絶対に楓の味方だよ。なにがあるうとも、ね」

「それってさ……もし、私が殺人犯になっても？」

「え？ それは……殺した人によると思うよ。罪もない一般人を殺したのなら、僕は楓に自首を勧めるし、最悪、僕が捕まえる。でも、殺されて当然の奴なら、僕はなにも言わないよ」

「そっか……」

楓の声から陰りのようなものが消えて、いつもの鈴のように綺麗な音が鼓膜を刺激する。

「恭史、帰ろう？」

こちらに振り返った楓の顔には、もう涙の跡は残っていなかった。まるで最初からなにもなかったかのような、そんな感じた。

彼女は僕の横に寄つてくると、恋人っぽく自分の腕で僕の腕とを絡ませるようにして掴んできた。

そして見上げるようにして僕を見つめてきたので、心臓が張り裂けそうなくらいドキドキしてしまう。

こんなに密着しなくてもいいじゃないか。

それか、密着するなら、イカやタコみたいにぐにやぐにやになつて、手足全てを絡ませるようにしなくちゃ。冗談だけど。

「あつ、凄いドキドキしてるね。あはは、緊張してるの？」

「そりゃあね、こんな近くにいて、顔を胸の近くに押し当てられたら、誰でも緊張するよ」

「む……。それでも声は普通だね。全くいつも通り」

「ポーカーフェイスが特技だからね」

「それは関係ないんじゃないかな？」

駄目だ、楓の突っ込みは甘い。僕としては、どこぞのハンターの相棒みたいに、一トンのハンマーでガツンと殴って欲しい。それほど、僕は突っ込まれた……くはない。痛いのは嫌いだしね。

「よし、帰ろうか」

「うん！」

いつものように楓は笑って、僕もそれにつられて、少しだけ笑みの形を作った。

せっかく、楓と恋人になれたのだから、こんな時間がいつまでも続くといいのに。

第4話 君と学校

バイトの初日を無事に終える事ができた日の翌日。

学校に行くために制服に着替えていると、いきなり部屋の扉が口を開けた。

「……」

「……」

「……ごめん」

「……うん」

これから南国にでも行つてフラダンスをする妄想を行う予定だったので、僕はパンツ一丁だ。そうだね、理由は嘘だね。

そんな、ほとんど生まれたままの姿をしている状態の僕は、扉の近くで硬直してしまった楓になんとなく謝ってしまった。

楓はその声で少しだけ我に戻ったのか、顔を赤くして頷いてから出ていく。

というか、なんで彼女は人類の英知の結晶であるノックをしないんだろうか。

僕だつたら楓の部屋に入るのに、三三七拍子を刻むかのようにリズムカルにノックしてから、その場でブレイクダンスをしながら出てくるのを待つぞ。あながち冗談ではない。

ちなみに、ブレイクダンスはそのままの意味で訳そうね。

プロの人がやっているあんな格好良いものじゃなくて、僕のは壊れる踊りという風に解釈しよう。

とかなんとか一人で考え事をしている内に制服を全て着終わったので、肩に教科書を詰め込んだ鞆をかけて部屋を出る。

二階にある僕の部屋の前には楓はおらず、どうやら一階に行ったようだ。なんの用があつてきたんだろうか。

階段を使つて一階に下りて行くと、居間の方から笑い声が響いてくるのが聞こえてきた。

居間に繋がる扉を開けると、母さんと父さん、それと楓がソファに座りながら談笑している。

「あらおはよう」

「今日はなかなか早いじゃないか」

母さんと父さんに挨拶を返しながら、僕は横目で楓を盗み見る。

僕の方を見ようとはせず、ニュースに釘付けになっているかのような演技をしていた。

まださっきのを恥ずかしがっているのか。パンツ姿を見ただけだろうに。まあ、そりゃあね……少しアレがあれだったかもしれないけど。

「恭史、さつさと朝ごはん食べちゃいなさい。楓ちゃんを待たせたら駄目だよ」

「分かった」

短く答え、居間を通って、その奥にあるキッチンに向かう。

そこには日本の朝ごはんと言ったらこういうのを想像するんじゃないかと思うほどの、完璧な和食が用意されていた。

……母さんは朝に動くのが嫌いだから、滅多に朝飯を作る事はない。朝からこんな料理を作るなんて、絶対にあり得ないと言ってもいい。

というと、このご飯……父さん！？ いや、嘘だよ。分かっているよ、楓しかないよね。

なるほどなるほど。さつき起こしにきたのは、こういう理由があったのか。納得。

とりあえず、椅子に座って、鮭の焼いた奴を食べる。塩味がきいていて美味い。どこぞの店長とは違いますな。

朝ごはんを食べ終わり、自分の食器を洗い終わってから、僕は居間に突如、来襲したエイリアンを見た民間人みたいな顔をしながら戻った。うん、意味分かん。

「じゃ、行こっか楓」

「そうだね」

楓は僕の両親に挨拶をしてからソファから立ち上がり、そそくさと玄関に向かってしまった。

「じゃ、行ってきます」

僕もパピーとマミーに挨拶をしてから、玄関に向かって楓の横で靴を吐く……うん、履くだね。

なんだよ靴を吐くって。楽器の名前をしたナメクジみたいな名称の星人が、子供を産むシーンを靴に変えた感じの場面を想像してしまった。

「楓、なんで今日は、僕の家に来たの？いつも待ち合わせしてるじゃん」

楓のアパートと僕の家は結構近いけど、楓が僕の家に来ると学校とは逆方向に向かっていている事になる。

つまり遠回りしてしまっているのだ。どうせなら僕が楓を迎えに行った方がいいんだけど。

「今日はね、なんか迎えに行きたい気分だったんだよね。だから、気にしないで？」

楓は靴紐を縛りながら僕の方を見ずに言った。

「ふーん、そっか。あつ、それと朝ご飯ありがとね」

「いやいや、恭史って、昔から朝は卵かけご飯か、納豆ご飯だったよね。だから、たまには私が作ってあげようと思ってね。美味しかった？」

「うん、凄く。久し振りにまともな朝食だった」

「本当！？　ありがとー！」

「うわあ！？」

なんかテンション上がったのか、楓は急に立ち上がって僕に抱きついてきた。

靴を履こうとしていた不安定な体勢だったため、僕は楓の体重を支える事が出来ずに、そのまま倒れこむ。壁に後頭部を強打した。泣きそう。

「……うう」

「あつ、ごめんね。ちょっと興奮しちゃって」

「いや、別にいいんだけどね」

僕の上からどいた楓は、微笑えみながら玄関のノブをひねった。外の日差しが僕を照らして……僕は灰になる。

眠い……。

「ほら、恭史。いつまで横たわってるのさ。早く起きて起きて。学校に行かなくちゃ、遅刻しちゃうよ!」

「そうだね」

頭を何回か振って、僕は脳に目覚めるよう命令した。しかしそれは大胆にも無視されて、しかも睡魔が頭上で遊び始める。

なんかだるくなってきた体を起こして、ふらふらと楓の後を追って玄関の外に出た。

「あー……」

「どうしたの?」

「いや、なんか。頭がボーッとする。睡眠不足なんだな、たぶん」
さっきまではなんともなかったのに、なんでいきなり。

「シャキツとして、シャキツと」

肩を何回か叩かれて、ついでに頭をなでなでされる。僕は子供か。仕返しついでに、楓の頭を撫でる。今日の髪型は……なんだろ。

いつもの黄色いリボンを蝶々結びにして、右サイドの髪を上げている感じかな。簡単に言えば、サイドポニーだ。

中年のおじさんの頭のように、桜の花という髪の毛がほとんど散ってしまった寂しい禿げ頭……じゃなくて木々が連なる道を歩く。

そして僕は段々と曇ってきた空の下、ゾンビのようにふらふらと足取り怪しく歩く。凄く眠い。

……これはあれだね。楓に一服盛られたね。あの朝食に睡眠薬が入っていたに違いない。そうだ、絶対にそうだ。

芸能人のそっくりさんとかいうテロップと一緒に出てくるのに、全然似ていない一般人が出てくる時と同じくらいの確率で楓にやられた。

くそつ、なにが目的だ。あれか、監禁か？

僕を監禁して、色んな暴行を加える気なのか？

「そんな事しないよ？ていうか、睡眠薬なんて入れてないもん」

「……心の声を聞けるのかな？」

「さつきからぶつぶつ言ってたよ。ほとんど、まる聞こえ」

「なんてこった……。それじゃあ、真田幸村のマネをしながら、スノボーで雪山を転げ落ちたっていう願望も聞こえてた？」

「……それは……聞こえてないかな。そんな願望あるの？」

楓がちよつと引いたような顔をしながら、僕から少しだけ距離を取った。

「……うん。あるある。なにか問題でも？」

「いや、それはちよつと止めたほうが」

「ついでに、楓からの暴力を全て受け入れる事も出来るよ。僕は生粋のドエムだからね！」

「生粋のポエム？」

「意味分かんないよ……」

さすが楓。僕のボケにボケで返すとは。というか天然か。そして僕はMじゃないよー。

「だからこの子の一番可愛い所はこの足なんだって！！　そう思うだろ、真田」

「知らない」

学校に到着して、教室に入った途端、他クラスの明が、今人気のアイドルのグラビア写真集を持って僕に迫ってきた。

「といあえず軽くあしらった後、一秒間に百回ほど明を殴っておく妄想だけだ。」

「あーっ、なんで知らねえんだよ。この子、めっちゃ可愛いじゃないか」

「確かにそうだね」

艶のある黒髪をポニーテールにして、深い憂いを帯びた瞳に童顔からはちよつと考えられないほどに発達した体。でも、芸能人なんて性格悪いだろうし。それに僕の中では楓の方が可愛いし。

「お前もこういう女の子好きだろ？」

「うん、好きだよ。だけど、もう少し胸は小さい方があだつ！」

急に、背中に痛みが走る。なにか細い物でつままれてひねられる。僕の背中にはアンパンのヒーローみたいに簡単にちぎれないぞ。ちぎれても食えたもんじゃない。

「いだだだだ」

「恭史。あんまり、変な事を言っちゃ駄目だよ？」

犯人は今、僕の後ろで無理やり笑顔を作っている事だろう。別に僕は楓の体が未発達だなんて言った覚えはないのに。たぶん、怒っているのはそれが原因なんですよ？

というか、後ろに楓がいるのを忘れてた。いきなり明がこんなもの持って来るからいけないんだ。僕の平穩のために、早急に消えてくれ。

明は僕の心中での訴えに気付いたのか、それとも後ろで楓が行っている事に気付いたのか、苦笑しながら自分のクラスに戻って行った。

「そろそろ離してくれない？」

いい加減、痛いという感覚には慣れてきたけど、つねられたままでは嫌に決まっている。

「ダメ。恭史が他の女の子に色目使った罰なんだから」

「……いや、芸能人じゃん。どうせ、接点なんかないんだからいいと思うけど」

「それでもダメ」

首を回して後ろを見てみると、彼女は人差し指を左右に振りながら笑っていた。なんでここで笑う事を選択したのだろうか。

もついいや。

クラスメイトから送られてくる好奇や嫉妬、呆れが混じった視線

の海を泳いで、僕は自分の席に戻った。

その途中で楓は僕から離れていった。

……嫉妬深い、のかな。

前まで……というより、三日前に付き合うまでは、僕が他の女の子と話していたり、明にあんなものを見せられていてもなんにも言わなかったのに。

鞆を机の横にあるフックにかけ、ブーツとしながら窓の外を見る。さつきまでは少しだけでも雲の隙間から日差しが漏れていたのだが、今はどんより曇っていて、今にも泣き出しそうな空模様。

二時間目に体育があるから、そこまでは雨は降らないでほしい。中でやっても跳び箱とかだし。それなら外でサッカーとかやってたほうがマシだ。

僕の願いは叶い、今は外でサッカーをしている。

体育は合同練習のため、隣には明がいる。

といっても、やっているのは他のクラスメイトで、僕は木が作ってくれる陰に隠れて、頭上にある枝に新しい髪の毛が生えているのを発見したりしていた。

なんか今日はやる気でないや。

「なあ、真田。もう少し、生气出そうぜ」

「なに言ってるの、明。僕は生气ばりばり漲っている事で有名な男の子だぞ」

「いや、お前の場合は、『魚の死んだ目ってどういう感じの事言うの？ ああ、真田恭史みたいな目の事を言うんだ分かった』って言われるくらい、死んだ目をしてるぞ」

「……失礼な。僕の目はそんなに死んでないぞ。例えていうならば、釣りあげられて絶望に染まっている魚の目だ」

「どういつ目か分かんねえよ！」

「永久凍土に閉じ込められたマンモスの目でもある」

「でかい！？」

「……突っ込むとはそこじゃない」

むう……やっぱり明の突っ込みって、時々ズレるんだよねえ。もう少し上手くツツコミは出来ないものか。

閑話休題。

やっぱり僕の目ってそんな風に例えられているんだ。驚きはしないものの、ただ単に無表情なだけだと言いつ返しなくなる。

この無を死んだと捉えるとは、僕に対する冒瀆だ。まあ、別にいいけど。

明との会話が途切れたので、僕はクラスの子と一緒にはしゃいでいる楓を観察をする事に。

今は百メートル走を何秒で走れるかを競っているのか、ストップウォッチを持った人目がけて走っていた。

だけど……。楓はあんまり運動する方じゃないから、運動神経はひいき有りで、並みよりちよつとだけ上。運動部からの勧誘チラシは、楓の事を勝手に運動も出来ると勘違いしている奴らがやっている事。

今だって、前を走っている女子に追いつけてないし。あれだったら、よくて十八秒ぐらいかな……？

「そういえばさ」

明が曇空を見上げながら、ぼんやりとした調子で言う。

「お前と相崎って、付き合ってるんだよね？」

「そうだよ。三日前ぐらいから」

「ふーん。つまんねーの」

「なんで？」

「いや、なんかおさまる場所におさまったなーって思って。ほら、相崎ってモテルじゃん？だから、いつその事、真田以外と付き合う方に賭けてたんだよな。お前より顔良い奴なら一杯いるしな」

「楓は顔じゃなくて、僕の体臭に惹かれたんだって」

「なんでだよ！ そんなに良い匂いしないぞ！？ 嘘つくな！」

「嘘じゃないよ」

いや、嘘だけだ。

「ちなみに、東条さんは自分より運動出来る人に惹かれるみたいだよ。今度、頑張ってみたらどうだ？」

僕の言葉を聞いた明は、「うーん」と唸り始めると、自分の額をペシツと漫才のツツコミみたいに叩いた。

「東条は良い奴なんだけどな。なんかあのテンションについて行けないんだ。一緒にいて楽しいんだけど、それは休み時間だけとか帰り道だけだからそう思うのであって、ずっと一緒だったらうんざりするかな」

「今の言葉、東条さんに言ってみようかな」

本当、失礼だ。

「おーい、真田！ お前もサッカーやろうぜ！！」

木陰で休んでいる僕を、サッカーに白熱していたクラスメイトが呼んでくる。

その人の仕草を見れば分かる。サッカーボールを間違って蹴ったとか言いながら、僕をリンチにする気なのだ。ある時は額に当て、ある時は股間に当て、ある時は目潰し、ある時は鈍器で撲殺。冗談だけだ。

「しょうがない、やるか」

僕はどこぞの戦闘民族がエロい亀の仙人に修行を受けている時の、きらきらした目をボールに向けながら、わくわくとは正反対の位置にどっかりと座って存在する感情を銃殺する。

それは開脚前転をしながら、僕の中から逃げ去り、そして機関銃を持って出直して来たので、バズーカでもう一度だけ殺しておく。横で明も立ち上がり、僕の頭を叩いてきた。なので右膝の裏にゴールデンシユートを決めておく。

「おうふっ！」

などと言いながら地面に倒れた明を見てから、僕はクラスメイトの輪に混ざる。サッカーをやるのは久し振りだから、感覚を取り戻すのに時間がかかりそうだ。

とりあえず、いきなり転がってきたボールを、持って「ハンド！
！なにやってんだよ、元サッカー部レギュラー！！」クラスの人たちから罵声（少し過剰表現）を浴びせられる。

知るか、とだけ言っておこう。

いや、知ってるけど。

それは置いといて。

サッカーをやっていると、なんだか昔の事を少しだけ思い出す。

昔——年齢が二桁になって、一桁の時の思い出が全て走馬灯のように蘇ってこなかったあの時、サッカーネットに入れたボールをなにかを考える事もなく、適当に蹴っていたら、横にいた楓の足が空を足蹴にしていきなり転び始めた。

「どうしたの？」

「私も運動上手になりたいなーって思ってた……」

そんな事を言いながら、今より髪が短い楓が立ち上がる。あの時は……肩までの髪だったかなー。僕らの髪型も大好きだったのを覚えてる。

閑話休題。

先ほども思ったとおり、楓はそんなに運動神経はよくない。

しかし、向上心は人一倍どころか人百倍はあった。さっき転んだのも、僕が持っているボールを横から蹴って少しでも運動しようと試みた結果らしい。

「楓ちゃんは頑張るね。頭もいいのに、それだけじゃ不満なの？」

「うん……。恭史くんだって、運動は出来るでしょ？」

「がんばってるからね」

「私はね、他の人が出来る事は自分でも出来なくちゃ、納得できないんだ。だから、人並みには運動できるようになりたい」

「へえ。頑張ってるね。応援してるよ」

「うん！ 私を応援してくれるのは、恭史くんだけだから！絶対にお願いね！」

「任せときなさい。喉が潰れても、喉仏が死んで本当の仏になって

も応援してあげるから」

あー、懐かしいな。こんな会話してたっけ。サッカー繋がりで、こんな記憶が目覚ますなんて……。まあ、嬉しいけどな。

「真田ー！ ボールいったぞー！」

「はいはい」

どこぞのスーパーヒーローよろしく格好良く吹っ飛んできたボールを胸でトラップして、足元に落とす。

空気と摩擦を起こすのが気持ち良くてたまらなかったのか、ボールは一度跳ねてその快感を再び味わってから、僕の右足によって暴行を加えられる。

ボールの顔が一瞬だけひしゃげて、しかしすぐのハンサムスマイル（勝手にハンサムだと決めてみた）に戻った球は、反対側にいた仲間の元に行く。

久し振りのサッカーなのに、感覚は衰えていない。それどころか、昔より体が動くかもしれない。

「あつー……」

だけど、体力はなくなってる。当り前か……。最後に真面目に運動したのは、一年くらい前だもん。

その後は、僕の蹴りに魅了されたボールが集まってくるので、適当に捌いていた。

しかし何度やっても戻ってくる事に腹を立てた僕は、ゴールネットを女子高生の恋愛心のように揺らしてしまった。

ネットにすら愛される僕って、罪深いぜ！ 冗談なのだ。

「恭史カツコイー！！」

「……ありがとう」

僕の心理なんて知るはずもない楓が、華麗なゴールシーンを見て賛辞の言葉を送ってくる。素直に嬉しいけど、開脚前転をしながら逃げ出したいほど恥ずかしい。

「というわけで、ここはニーソが一番という見解に落ち着くわけだな」

「知らないよ、そんなの」

暑さで溶けて、大地の肥やしになるかどうかの瀬戸際だった体育が終わり、今は小休憩時間だ。

グラウンドからの帰り道、ずっと聞かされていたニーソ談義が終わりを迎えたが、僕としてはどうでもいい話題だったので、どら焼き食べたいとかずっと考えていた。

そして、少しだけ斜め前にいる人物を窺ってみる。冷汗が流れた。「かーっ！ ニーソの素晴らしさを分らない、性格もセンスも視覚も嗅覚も全く無い馬鹿野郎がまだいたなんて！ いいか？ ミニスカートからはみ出る生足と、それをほとんど覆っているニーソ。その間にある……」

「もういいって」嗅覚は関係あるのか。

なんか定期的にノックをして訪れる痴呆をいやいや家の中に招き入れているお爺さんみたいに、明が同じ話を繰り返そうとしていたので、僕はアイアンクローをしてそれを遮った。

アイアンクローは嘘です。……なんとなく、斜め前……ていうか、反対側の席にいる楓を見してみる。頬がひきつるのを感じた。

「いや。よくない！！お前もどうせ、ニーソ好きなんだろう！？」

「あー、はいはい。好きだよ、ニーソ。大好き。うん」

あーもう。ここに店長がいたら、耳元で『うる採用！！』ってなんども叫ばれてるぞ。

……楓恐い。なんか凄く、こっち睨んでくる。嫉妬？いやいや、まさか。こんなバカ話に嫉妬するわけないじゃん、あんな完璧少女が。

『キーン』とか言いながら教室から出て行った明を横目に、僕は楓を視界の中心に収める。

うむ、目の保養になりますな。

「真田くんっ！！」

ボケーとしていたら、東条さんの声が花火の音みたいに心臓を震え上がらせるほどの大音量で、僕の寿命を縮めてきた。なにか恨みでもあるのかな？

とりあえず声が聞こえた方、教室の後ろ扉の方向をしてみる。そこにはニコニコ笑顔の東条さんが立っていて、手招きをしていた。気だるく椅子から立ち上がり、あんまり近づきたくないハイテンション娘の近くに行く。

「どうかしたの？」

「うむ！ 実はですな」

東条さんは、砂漠で遭難した人がオアシスを見つけたような顔を近づけてきた。

「明日、付き合って欲しい場所があるのだよ！！」

「うん？ 付き合って欲しい場所？……うーん」

楓の方をしてみる。友達との会話に夢中で、こっちは気付いていないみたいだ。

「場所によるかな……」

「それだったら問題無しなのだよ！！ もうすぐあるイベントを思い出してくれば、それで万事解決なのだ！！」

「もうすぐあるイベントか……寝取り対決？」

「そうそう、独り身の男が、らぶらぶカップルの彼女をどれだけ寝取れるかを競う対決だね！！ って、違うに決まってるじゃないか！！ そんなのが公認されてたら、この街は色んな意味で終わってるよ！！」

「じゃあ、あれだ。絶望対決」

「うんそうだね、自分の恥ずかしい過去を公の場で公開されて、どれだけ絶望するかを競う……って、違うって言ってるじゃないか！！ もしかして、忘れたのかい？」

「そんなわけないじゃないか。あんな一年に一回の大イベントは忘れられないよ。それに、今年は特別だしね」

楓の方をもう一度だけ見てみる。うむうむ。気付いていませんな。

「よし！！　じゃあ、用事はそれだけだからっ！！　じゃあね真田くん！！」

「さいなら」

ピューという擬音が良く似合う程、東条さんはまさに風のように走って去って行った。どこまでも元気な人だ。

あの元気があるんなら、走って空を駆ける事も簡単ではないだろうか。

そんな事を扉の場所に立ったまま考えていたら、近くの曲がり角から先生がやってきたのを発見した。

すぐさま自分の席に戻り、授業の用意をしてから、自分の瞼の上にペンで目を描く。これでいつ寝ても大丈夫だぜ。

先生が教室に入ってきて、それまで話し込んでいた生徒達が一斉に静かになった。こんな場所だけ、チームワークがいいんだから。

「さーて、寝るか」

小声で呟き、僕はそつと瞼を閉じた。頬杖について顔の位置を固定し、目がはつきり見えないように伏せた。

これで、一目見ただけでは、ばれない体勢の出来上がりだ。

「いだっ」

なんか頭叩かれた。

目を開けて周りの確認をしてみると、前の席に座っている男子…

…名前なんだっけ？まあ、いいや。

カバ男くんが、教科書を持ってもう一発叩く準備をしている所だった。

「なにをする」

とりあえず、二発目を防ぐために、教科書は没収。

ついでに、眠れそうな場所を邪魔されたので、少しだけ不機嫌。

「いや、先生がお前を起こせていうからさ」

だからって、人の頭を楽器かなにかの代わりのように、連発で叩こうとしなくてもいいじゃないか。

「そう。ありがとう」

しかしそんな心境は心の奥底にしまい込み、寝るのを諦めた僕は、黒板に書かれている文字を、前の席に座っている男子のノートに書き込んでいく。冗談だけど。

実際は、書いている振りをしながら、東条さんと出かける場所を決めていた。

あのイベントの買い出しに行くんだから、女の子の意見を聞けるのは嬉しいかもしれない。もちろん、楓にはバレないようにしなくちゃ。

どこがいいかな。

あつ、そういえば、もう買ってあるんだ。あれと今度買いに行つた時の物を比べてくればいいか。

東条さんの意見も聞けるしね。

「はい、じゃあこの問題を……真田。答えてくれ」

「はい。えーと、文中に出てくる『リアルなんてクソゲーだ』と連発している少年は、リアルに絶望している事は明らかです。そして、彼はギャルゲー界では神と呼ばれている存在で……」

「今の時間は数学だ!!」

「じゃあ、x=2で」

「じゃあつてなんだ! しかも今の時間は角度を求めるんだぞ。ちゃんと黒板見るんだ!」

「あー、なるほど。四角形の角度のうち、二つは分かっている奴です……えーと、織田信長で」

「誰が過去の偉人を答えろ!? 彼はどうでもいいから、角度を答えろ!」

「織田様を馬鹿にするな!!」

「なんか怒鳴られた!」

この後、先生にこつてり絞られた。個人的には、腕を雑巾絞りとかやられるくらい苦痛でした。

先生の説教から解放された僕は、教室に戻ってきた。

寝ぼけていたんだから、あんな発言をしても許してくれたらいいじゃないか。まあ、無理だよな。常識から考えても。

自分の席に座ると、楓が近づいてきた。

「恭史、さっきの授業は寝ぼけてたの？」

「……うん、まあね」

「寝ちゃ駄目だよ。それだから、テストの点数が良くないんだよ？」

「そうだね」

「む……なんか上の空。どうかした？」

「眠い……」

僕がそう言うと、楓は少し呆れたように溜息を吐いた。

いや、だって仕方無いじゃん。昨日の夜はちよつと火野について調べていたんだから。

約十年前の事件だから、ネットで色々調べてみたんだ。こうでもしなきゃ、当時八歳だったぶりていーな僕の記憶を呼び起こす事が出来ないと思ったから。

バイトの初日を終えて疲れてたけど、寝れなかったので、眠たくなるまでの暇つぶしというのが理由の大半を占めるのだけど。

それで、調べた結果。

彼女はまだ、二十五歳前後だという事が判明した。なんと、頭が狂っている犯罪者をバリバリやっていた頃は、まだ十五歳だったようだ。

……名前や歳まで分かっているのに、なんで警察は補導までいかなかったんだ？ という疑問はさておき、僕が感じた事は、やっぱりただの糞みたいな犯罪者だという事。

火野美見が民家に炎を咲かせた回数は、正確にいうなら十五件だった。

そのうち、九件の家が全焼し、死亡した人は二十二人。

生き残った人は何人かいるみたいだけど、気付いたら火が迫ってきていたとかなんとか証言しているようだ。

火野の顔を見た人はいない。だから、昔の卒業アルバムとかの写

真がネットに貼ってあったけど、どうせ整形してるんだろうな。

昔の火野の顔を表現するならば、端正な顔をした狸という言葉がピッタリだと思う。

森に行けばオス狸にモテモテだろう。

火野の家族はすでに亡くなっていて、その死因は火事に巻き込まれたせいらしい。これもネットからの情報だけど、彼女の最初の犯罪が家族殺したとか。

「恭史、大丈夫？ なにか考え事？」

「ん。いや、なんでもないよ。ただ、昔の事を思い出してただけ」「昔の事？」

楓は唇に指を添えながら、雲が覆い隠している空を見上げる。

まだ少し早いけど、空には丸い月が浮かんでいた。今日は満月か。ウサギがぺったんぺったん餅をついて、それを地上に隕石のように降らす日ですな。この日は、誰かが隕石に当たって死ぬ確率が高いとか。

「……ありえないけどね」

「ん？ どうかした？」

「いや、こつちの話」

「今日の恭史は独り言が多いよね」

「眠いからね」

「なんでそんなに眠いの？ 夜更かしでもした？」

楓が首を傾げながら聞いてくる。

「ちよつとネットで調べ物しててね」

「……えっちなもの？」

「楓……。僕は明とは違うんだから。そりゃまあ、百パーセント興味ないのかどうかと言われたら、質問してきた人の首根っこを掴んで往復ビンタするけどさ。それでも、夜にそんなもの探さないよ」

「うーん……なんか不健全だね」

「え？ なに？ 僕にそういうのを見るの推奨してるの？」

「あはは。それはちよつと嫌かも」

なんかハッキリしないな……。どうしたんだろうか。全く、今日の楓は一体なにを考えているのだろうか。そんな事を考えていると、楓はパンと両手を合わせた。

「そうだ。今日の放課後、時間ある？」

「あるかないかと言われれば、ないの方に傾くかな」

「分かった、暇なんだね？よしよし。じゃあ、二人で部活のスケッチに行こうよ！！」

「えー」

「でね、その助っ人する部活なんだけど」

「あつ、僕の言葉は無視なんですね」

「なんと、映画撮影部なんだよ！」

「……そんな事言われてもね」

別に興味ないし。

ていうか、撮影部って、映画を撮るんだよね？そのヒロインに楓を起用とか？

だめだめそんなの。いくらお金を積まれても、僕が許しませんぞ。放課後になりました。

みんなが鞆に勉強道具を詰め込んで下校の準備をする中、僕達は一足先に教室を出ていく。

「恭史、はやくはやく」

「そんなに焦らなくても。どうせ、部員だって、ゆっくり部室に行くんでしょ？」

「それもそうだね」

そう言って、楓の歩く速度が弱まる。

なんでこんなに楓は急いでいるのだろうか。いつもなら、こいつった部活助けも断っているのに。

なんで映画撮影部のを受けたんだろう。なにか理由があるのか、それともただの気紛れか。

楓の顔を見してみる。いつもの笑顔を浮かべていて、なにを考えているのか読み取る事は出来ない。

「うーん」

よく分からないまま、僕は楓について部室に直行する。

文科系の部室は旧校舎にある。

僕達がいつも勉強をしたり図書館とか職員室がある場所が新校舎で、新しいのが出来るまで使われていたのが旧校舎だ。

といっても、この旧校舎。それほど古いものでもなく、築二十年前後のものだ。多少、外観は汚いものの、中は結構綺麗に保たれている。

三階建の校舎で、『L』字型になっている。

「この校舎にある一階の一番奥に部室はあるんだって」

「へー」

緩やかで温かい風が吹き、僕の目の前にそびえ立つ校舎にぶつかっていく。

「じゃあ、はやく行こう?」

「そうだね」

楓は足取り軽く校舎の中に入っていく。

旧校舎に足を踏み入れた瞬間、カビみたいな臭いが鼻をツンと刺激する。

僕はそのあまりの臭さに地面をのたうちまわり、断末魔の悲鳴を上げながら外に退避する。

「恭史大丈夫!？」

割と嘘ではない。ほぼ本当の事なんです。だって、カビの他に湿気とか埃が凄かった。アレルギーの僕には地獄だ。

しかし、結構、人が出入りする場所なのに、なんでこんなに埃が溜まっているのだろうか。清掃員さんが掃除しにこないのかもしれないし、部員が埃を吐いているのかもしれない。

「落ちついた?」

楓が僕の背中をさすりながら、心配そうな声をかけてくる。僕はそれに自分では絶対調だぜとかいう感じの笑顔で対応してみた。

楓の顔が引きつった。なぜだ。

「とにかく、もう大丈夫だから。早く部室に行って用事終わらせよう?。」

「そ、そうだね」

楓が頷いたのを見て、僕は大きく息を吸い込んだ。肺一杯に酸素を溜めて、いざ出発。

「恭史、こっちこっち」

急いで先導してくれる楓の後を着いていき、息が限界になりそうだったなら近くの窓を開けて新鮮な酸素を吸って、また移動を繰り返す。

そんなこんなで、楓が助っ人をする映画研究部の前についた。

「静かだけど、本当に人がいるのかな?」

「さあ、僕には分かんないよ。楓は今日、ここに来るように言われているでしょ?」

「うん」

「だったらいるんじゃないかな。とりあえず入ってみようか」

以上、窓から首を突き出した状態の僕と、それを苦笑しながら見ている楓との会話でした。

楓が部室の扉を開けて、中に入ったので僕もそれに続く。

中は大和撫子が座っていても不思議じゃないほどの和室で、六畳ぐらいの広さだった。

部屋の真ん中には、大黒柱のお父さんみたいにどっしりとした存在感を放っている木製の机があつて、それを囲むようにして幽霊みたいな顔をした四人が座っている。

幽霊という表現はひとまず置いて、楓が中に入ってにこやかに挨拶をした。

「こんにちはー」

ぺこりとお辞儀して、顔を上げてから一同を見渡す。背後からでも分かるほど、困惑している。

「え、えーと……」

なにか言いたそうにしていた楓の肩を掴んで、僕は耳元で囁く。
「なにこの幽霊集団。夜に墓場で運動会でもする気？試験も勉強もないとか羨ましい言葉を言う気満々なの？」

「えっとー、それはね。今度撮影する映画の衣装とかじゃないかな…… あははは」

後回しにしていた、幽霊という表現についての説明でもしよう。

なんかみんな、頭に三角巾つけて白装束着て顔が真っ青で驚くほど生気がない顔をしているからだ。

と、その中の一人である、大柄の男性が僕達に近寄ってくる。

「やあやあ、よく来てくれたねサナギ君」

「……蝶々とか蛾のサナギ持ってきたの、楓？」

「持ってきてないよ？」

「じゃあ、なんでこの幽霊大将さんはサナギが来たって言ってるのさ」

「それは多分……」

そこまで楓が言いかけたところで、幽霊大将さんの武骨な手が僕の肩を掴む。

「無視するとは酷いな、サナギ君」

「サナギって僕の事ですか？」

なんとなく上級生みたいな雰囲気を出している（僕は最上級生だけど、なんとなくそう感じる）幽霊大将さんにそう言くと、彼はその衣装とはとても似つかない爽やかスマイルを浮かべる。

「当然。ふう……駄目だ、喋るのめんどい」

「そんな笑顔を浮かべているのに、一ミクロンも相応しくない言葉吐きますね」

「演技だ。あー、面倒」

なにこの人。

「とにかく、僕の名前は真田です。サナギとかじゃないですよ。もう成虫です」

「お前は虫なのか。喋らせないでくれるか？」

「そつちから話しかけてきたんじゃないんですか」

僕とダルダル幽霊衣装さんがそんな会話をしていると、さすがに見かねたのか、奥のほうに座っていた女性が立って近づいてきた。

「ごめんね、真田さん。この人、ちよつと頭いつてるから」

「さらつと暴言吐きますね」

この女性は、おそらくは映画撮影部の中で唯一の女の子だと思われる。

他の人が死に装束みたいな感じなのに対し、彼女は清楚なワンピースを着ていて、頭には麦わら帽子を被っていた。

肩の上あたりを彷徨っている茶色い髪の毛は、クルクルとパーマがかかっている。

見た感じ、大人し目の女の子なのに、暴言を吐くのが趣味らしい。まだ知らないけど。

ていうか、なんで僕はさつきから丁寧語を使っているのだろうか。最高でも同級生なのに、こんな言葉遣いにする理由が皆無だ。

しかし、ここで気づいたことがあった。

「えーと、なんで僕に話しかけてくるんですか？楓に用があるんじゃないんですか？」

僕の当然といえば当然の問いに、しかし目の前の二人は、なんでそんな事を聞いてくるのか小一時間程度、問い詰めたいと言わんばかりの顔を近づけてくる。

女性の方が首を傾げながら口を開いた。

「頭に蛆でもわいてるの？おつと失礼。真田さんは本当に蛆だよね。おつと失礼」

「……」

「あれ？もしかして怒ってる？あはっ、珍しい。真田さんのそんな顔を見れるなんて、ミジンコが直立不動する確立くらい珍しいよね。おつと、ミジンコに失礼」

僕に失礼だろう。それと、ミジンコが立つ可能性なんてゼロなんじゃないの？知らないけど。

「すみません。あたし真田さんのファンなんです。キャツイツチャツタ」

「そんな事どうでもいいですから、なんで僕に話しかけてきたんですか？」

「あたし真田さんのファンなんです。キャツイツチャツタ」

「……どうも」

「ぶっきらぼうだね。そんなだから、生きたまま解体される時の魚みたいな目だって言われるんだよね。おっと、失礼」

「楓、帰ろう。こんな場所にいたら、精神衛生上よくないよ。特に楓みたいな子には毒だよ」

僕は楓の手を引っ張って、その場を後にしようとする。しかし楓が動かない。

「どうしたの楓。早く帰ろう？」

もう一度だけ彼女を引っ張ってみるが、地に根付いた大木のように動かない。一体どうしたのだ。

僕が『？』を頭上に浮かべていると、唐突に楓の手が僕の肩を掴んで、再び失礼な女子後輩——略して、口にチャックすればいいのにむしる縫い付けるよちゃんに向かわせてくる。

「映画撮影部の皆さん、よろしく願います」

なんかもう、後光が射すんじゃないかってくらい神々しい笑顔を浮かべた楓は、僕の背中を軽く押して何歩か前に進めてくる。

訳が分からず、僕は楓の方を何度か振り返る。

しかし彼女は、幼子を見送る母親のように軽く手を振っているだけだった。なにをしたのか意味不明なんだけど。

あれか、これから僕を集団リンチにする気なのか。それに楓が一枚噛んでるわけだ。女の子と話した罰なんだぞっ、とかそんな事言われそうだ。ありえないけど。

「真田さんは、まずこれに着替えてね」

口にチャックちゃんが僕に、白装束を差し出してくる。なるほど、勢い余って殺っちゃった時の服まで用意しているなんて、ここまで

くるともつ感動ものだ。

「えーと、真田さんの役は、墓場から起き上がったゾンビだからね。ちゃんと演技してよ。猿芝居くらいはできるよね。おっと失礼」

むしろ僕の演技は大根なだけど。

……ていうか、なにこの流れ。え？なに？僕はこれから役者になるんですか？なにをどうしたらそんな罰ゲーム的なことをやらされるんだろう。

「恭史、頑張つてー！」

楓の声援を背に受けながら、僕はこの世が滅亡でもしねーかなと思いつながら嘆息する。

あれから僕は、言われた通り白装束に着替えて、そして学校の中庭に来ていた。

春も中盤に差し掛かっている陽射しが降り注ぎ、じんわりと汗がかかるほどの良い陽気になっていた。

「じゃ、真田さんはその芝生に寝転がって、出来るだけゾンビっぽく起き上がった」

口にチャックちゃんにそう言われて、従ってしまうのはなぜなのだろうか。

とりえず寝転がる。草の先端が鼻に入って少し痛かった。

「はぁー、降りてえ……あの頃に」

僕の横で同じようにしている大柄な人、さつき初対面の時、かなりダルそうにしていた男の人がそう呟く。相変わらず笑顔なのに吐く言葉はすごく湿っぽい。

「なぁ、サナギ君」

「真田です。次間違えたら、十文字槍で突き刺しますよ」

「あーはいはい。ごめんなアナゴ君」

「……」

「で、サナギ君。君は帰りたい過去というものがあるかね？」

いきなりなにを言い出すんだよ、この人。そんなのなにに決まってるじゃないか。

「無いですよ」

「そうかー。君は平和に生きてきたんだな。はあ……生きるのダリイ……」

帰りたい過去ってものはないけど。直したい過去ならある。それも大量に。

それでも、青い猫型ロボットがきて、なにか一つだけ過去をやり直させてくれるというのなら、僕は迷う事なく『あの日』をやり直す。

僕のせいで壊れてしまったあの娘を壊れさせないために。そのためなら、僕はなんだってする。

「はい、真田さん立ち上がったー」

僕が過去の思い出に埋没していると、口にチャックちゃんがそんな事を言ってきた。

だから僕は、ゾンビを虐殺するゲームで見たような動きをしながら立ち上がる。

「違う違う！そうじゃなくて、もっと……こう、ふらーっとぬめらーっと」

ぬめらってなんすか。

その後もチャックちゃんに言われた通りに演技をこなしていくが、どういうわけか彼女のお気に入りな演技が出来ない。

「全く。ゾンビの役も出来ないなんて、なんのためにそんな目をしてるだか。これならミジンコをゾンビ役にした方がマシよ。おっと失礼」

「……」

ミジンコ以下の演技力らしい。

残念だ。せめて大根以下にしてくれればいいのに。

というかですね、さっきから僕の横で「動くのダリイ」とか「死にてえ……」とか。笑顔で言っている人がいるからあんまり集中出

来ないのですよ。嘘じゃないってのが悲しいね。言い訳だもんね。

僕は、横で寝転がったまま、いつ死んでもおかしくない死にたがり屋さんに話しかけてみる。

「あの、死にたいんだったら、良い人紹介しますよ」

なに言っただ僕は。まさかの他殺斡旋ですか。もしくは自殺教唆。殺人教唆っていうのも悪くない。それから、ドラ焼き食べたい。甘いものをください。

「マジか？あー、でも、その人に会いに行くのもダリイ……」

とことん駄目人間だな。そしてこの話題に食いつくな。

本当に紹介するぞ？ 不同集成を。まあ、紹介っていうよりも、狙われやすくなるようにアドバイスするだけだけど。

「恭史、頑張れー」

近くにある木の陰に入っている楓が、にこやかにほほ笑みながらエールを送ってくる。

「……」

その姿を見ながら、僕はようやく悟った。

なんで今日に限って、楓が部活の助っ人を引き受けたのか。その理由は、おそらくは楓自身が対象じゃなくて、僕が対象だからだろう。

もしも楓が、役の助っ人として呼ばれたのなら、断っている可能性が高い。

しかし今日は、なぜか僕がその助っ人として呼ばれているのだ。

こんな事、高校三年間では初めてだ。

なんでこの映画撮影部の人たちは、直接僕に言いに来なかったのかは不思議だけど、それでも楓を通したのは正解だろう。

僕に助けてくれとか言われても、右から左に受け流した後ハンマーで叩いて粉々にしてしまうのが普通だ。

だけど、楓の頼みなら断る事ができない。なるほど、この人たちはそこまで考えていたのかもしれない。

そして楓の心情だけど。たぶん、僕を頼ってくれる人が現れた事

が嬉しかったのではないだろうか。

頼る事はあっても、頼られる事はないからね、僕は。最後に頼まれごとをされたのは、文化祭準備の時の「このシールそこに置いて」くらいだろうか。

閑話休題。

楓は、僕が万能人だとか本気で感じているところがある。そんな僕が、人に頼られないことを不服に思っている節もちょっとだけあった。

だから今回の件は、僕が認められたと思って、本人の承諾なしにOKしたのかもしれない。

「まったく……」

どこまでが本場で、どこまでが僕の虚構なんだろうか。

「はいオーケーです！真田さん、演技上手くなったじゃない」

「こんだけ演技すれば少しは上達するよ」

時刻は午後七時。

辺りはもう、暗くなっていた。

放課後に真っ直ぐあの部活に行ったのだから、最低でも三時間くらいは中庭でゾンビ役の演技をしていたことになる。

空はもう太陽が隠れているのに、中庭は明るい。なぜなら、屋上らへんからここがライトアップされているからだ。

見上げてみると、なんかでかいライトがいくつも並んでいる。あれは部費で買えるものなのだろうか。

「はい、それじゃあ次は……」

演技監督兼ヒロインの口にチャックちゃんが次に行こうとしたので、僕はここで挙手する。

「ごめん、僕は用事あるからもう帰る。楓も帰ろう？」

木の幹によりかかって眠そうにしている楓に近寄り、彼女の目線と合わせるためにかがみ込む。

「ちよつと真田さん。これからが重要な場所なんだよ？　なのに帰

るなんて、文化祭準備の時に独りで帰ろうとする人ぐらい空気読めないよね。おっとこれは去年の真田さんだった。失礼」

なんで知ってんの。

「……とにかく、僕はどうしても外せない用事があるから無理。また今度にしてくれ」

「あつ、ちよつと」

口にチャックちゃんかなにか騒いでいるが、僕は楓に手を差し伸べて立ち上がらせると、そのまま歩いていく。

楓と途中まで一緒に帰って、安全のために普段は徒歩で帰る彼女がバスに乗るのを見届けてから、僕はバイト場に向かう。

相変わらず、ファミレスっぽいファミリーストランだけど、今日は繁盛しているようだ。

馴れ子ちゃんとかその他のフロアバイトさんが忙しそうに料理を運んで行ったり、店長さんがレジを打ったりしている。

入り口のところでその様子を見て、僕は少し急いで店の中に入る。来客を知らせるチャイムが鳴って、バイトの人たちがこっちに振り向く。

僕は挨拶をしながら店の奥の方……厨房の更に奥にある休憩室に行く。

そこで自分のロッカーからバイト着を取り出して手早く着替え、手などの消毒を行ってからフロアに戻った。

その途中で小堂さんがいたけど、忙しそうだったので挨拶だけをしておいた。

僕がフロアに入ると、すぐさま店長さんがやってきて、注文を聞いてきてくれと頼まれる。

僕は言われたとおりに行動して、家族連れで来店している人たちの注文を聞く。

「なんでこんなに混んでるの？」

お客さんに料理をほぼ出し終えて徐々に余裕が出てきたので、僕は隣にいる馴れ子ちゃんに話しかける。

「それはね、店長さんが集合したからなんだよ」

「店長さんが集合？ …… ああ、集客ね」

なんでこの子はこんなに言葉を間違えるのだろうか。言語中枢になにか異常があるのではないだろうか。

それともこの子は実はスパイで、他の仲間知らせるための暗号だとか。ありえないけど。

「もつと速く来いよ真田」

「すいません。こんなに混んでは思ってたもので」

馴れ子ちゃんと雑談していると、厨房の方から小堂さんが出てきて、開口一番に文句を言ってくる。

「でも、僕がいなくても大丈夫じゃないですか。この……えーと。

え……。フロアのバイトさんは一杯いるんですし」

馴れ子ちゃんの本名が分かんなかった。なんだっけ。堀切川だっけ。佐藤だっけ。右京だっけ。

小堂さんは緩やかに首を振ってから、大きく肩を回した。

なんだらう。そんなに肩が凝ってるんだらうか。肩叩き券はあげていないので、ここは触れないでおこう。

「いや、店長から聞いたんだけどよ、どうやらお前も厨房をやるらしいぞ。フロアと厨房の仕事を全部覚えさせるってよ」

「えー……」

なんだそれ。僕は芸を仕込まれる動物じゃないんだぞ。そりゃあ、前にそんな表現したことはあるけども、僕はれっきとした宇宙人だ。間違えた、人間だ。

まだバイト始めたばかりなのに、そんな一杯教えられても、歌が下手なガキ大将並みに上達しないぞ。

僕がそんな事をみんなと考えていると、店長さんがこっちに向かってきている事に気づいた。

なんか嫌な予感がする。また味見してくれとか言われるのだろうか。そしたら今度は、「あなたの残念な味覚に乾杯」とか言いかけない。

「真田くん。これはたぶん君の知り合いの忘れ物だから、届けてあげてくれ」

そういいながら店長さんは、僕に帽子を差し出す。

それはよく紳士が被っているようなものを小さくしたような感じのものだった。

なんだろう。店に来た人は全員、僕の知り合いだとも思っているのだろうか。

もしそうだったのなら、店長さんの頭を斜め四十五度でチョップするしかない。

だって僕は友達少ないし。

「なんで僕の知り合いだと思っんです？」

店長さんに訊ねると、彼は豪快な笑みを浮かべながら言った。

『俺がルールだからだ！』

これは違うよ。僕の脳内妄想。

実際は、「君の知り合いが帰った後に座席に落ちているのを発見したからな」などという面白味のない答えだった。

この店長さんの答えについて考えるなら、どうやらその知り合いは楓のことらしい。

「ちなみに私が散見したんだよ！」

面倒だから訂正はしない。

僕は店長さんから帽子を受け取り、しげしげとそれを眺める。

しげしげとヒゲヒゲってなんだか似てるなとか思いながら、楓がこんなの持ってたっけとか思考の海に潜り込む。

僕が知っている範囲内では所持していないという事が判明したけど、やっぱり女の子だから僕の知らないものも一杯あるんだろうなあ、という結論に着地した。

バイトが終わると家に帰った。もう夜も遅い。

僕は店長さんから預かった、たぶん楓の帽子を自分の机の上に置き、ついでに引き出しを開ける。

そこに入っているものを確認して、ああ、もうすぐだな、とかボケツと考えた。

家でゴロゴロしていると、いきなりどら焼きが食べたくなったのでキッチンに行って探してみる。

「……ない」

どうしようかな。買いに行こうかな。いやでも、不同集成がどこにいるか分かんないし……。僕だってまだ死にたくない。

「……」

あつても、あいつは家にいる家族を皆殺しにするのが好きな異常者なんだった。だったら、外にいる方がまだ安全かもしれない。

「買いに行こうつと」

財布をポケットに突っ込んで、母さんにスーパーに行ってくると伝える。

「不同によろしくねー」

そんな冗談を背に受けながら、僕は家から出た。

外はヒンヤリとした空気が漂っていて、シャツだけでは少し寒いくらいだった。

空を見てみると、満月だ。だけど……。

「……赤い」

どこまでも禍々しく、不幸を呼び寄せるかのように紅く光り、不吉を連想させるかのように朱く漂い、しかしどこか美しさを感じさせる満月。

「さむ」

早く買って帰ろう。

僕の家からコンビニまでは、普通に歩いて行けば十五分ぐらいかかる位置にある。

自転車だったらもう少し早いのだが、ここには近道というものが存在し、しかもそこはマイバイクは通ることができない。

その近道を使えば、八分くらいで到着できる。

つまり僕の家とスーパーは、グルッと迂回しなければ行けない場所にあるのだが、近道はそこを直線距離で繋いでくれる。どこでもドアがあればもっと楽なんだけど。

僕は携帯を弄りながらその近道を目指す。

歩いて数分。そこへの入口が顔を見せた。

古い日本家屋。そう表現するのが相応しいと思うが、今は誰も住んでいない一軒家のさびついた門がそれだ。

ここは鍵がかかっていないので、誰でも通る事ができる、

冷たい門を横にスライドさせて口を強引に開けさせた僕は、その中に入っていく。

何年も手入れされていない庭なので、雑草が伸び放題で、僕の腰の辺りまできているものが多い。

昔はキレイだったんだろうなと感じさせる溜池の跡地を横目で見ながら進んで行き、縁側が見える位置まで来た——そこで僕はほぼ反射的に身を屈めて雑草の林に身を隠す。

家の中に誰がいる。

この家は何年か前に住んでいた、お祖父さんお祖母さん夫妻が亡くなってからは、無人のはずだった。

灯りだって点いてないし、暗さに慣れてきた目で見ても手入れがされていないとはつきり分かる外装。

誰かが住んでいる可能性なんてほぼゼロ。なのに、誰がいる。

一人じゃなくて二人。

縁側から見える位置にいるそいつらは、一人が馬乗りになってもう一人がその下で必死に腕を振り回していた。

叫び声が聞こえる。

怒鳴り声が聞こえる。

これで、ああなんだ、痴話喧嘩か。なんて感想を抱くほど、僕は

世間ずれしていない。

だけど、シルエットしか見えないのでなにをしているのかその詳細は分からない。

夜空を見上げると、さっきまで出ていた月が雲に隠れていた。

止めに行くべきだろうか。その考えが浮かんだが、炭酸の泡のようになにすぐに消え去った。

出てはいけない。本能がそう告げている。これは僕の頼りない勘だから当てにならないけど……でも出ちゃ駄目だ。

体がブルツと震える。

それは、今しがた吹いた冷たい夜風のせいではなく、目の前で行われている行為が過去の記憶と一本の線に繋がりはじめたからだ。馬乗りになっっている人が両手に持ったなにかを下にいる人物の胸に振り下ろし、そしてまた持ち上げる。その際に、なにか水のような――だけどそれよりも粘度が高そうな液体もストーカーのように一緒に上がっていく。

その人物が持っているのはおそらく刃物で、噴水のようにまき散らされているのは血だろう。

殺人現場。

この言葉が脳裏に浮かび上がる。

昔の記憶が目の前にちらつき始めたが、僕は現実から離れなかった。

なぜか。

魅入られていたからだ。

殺人という行為にはない。

それを行なっている人物の華麗な動作に。

それはまるでなにかの儀式のように意識的に執り行われ、しかし感情を感じさせないその動作はまるで機械のように無慈悲に刃物を獲物に突き立て、噴出される血が黒一色の周囲を鮮やかに染め上げる。

身体に染み付いている動作をただ単に無意識的に繰り返す。

それは洗練された動きで、行為自体はおぞましいはずなのに、見るものを引き込み、魅了し、虜にする。

僕はいつのまにか、息をする事さえ忘れていた。目の前で繰り返される余りにも恐ろしい芸術に、それほどまで夢中になっていたらしい。

下にいる人の動きが止まった。何回も刺されていたのだから、当たり前なのだろう。

……こんな場面を見ても、僕は冷静だ。やっぱりそれは、過去に起因するものだろう。

それでも、このままではマズイと思う。だから逃げようとした。ゆっくりと足音を立てずに後退する。

しかし、ここで予想だにしない事が起こる。パキッと。

微かな。本当に微かな、けどこの静寂が支配している夜においてはとても響く音が足元から鳴る。

シルエットの人物がこちらを振り向いた。

その目を見た瞬間、ゾツとした。

赤い目。

それはまるで、今日の満月のように赤かった。

だけど、背筋が冷えた理由はそれだけじゃない。

満月が、雲の間から顔を出す。

そのせいで、人物の顔が月明かりによってボンヤリとだが見えた。見えてしまった。

リボンで右サイドの髪を縛って上げているその髪型は。

そう、それはまるで今日の――。

「かえ……で……？」

第4・5話 殺人少女は笑わない

——見られた。

縁側の位置から見える雑草の群れの中にいた誰かに、見られてしまった。

——殺さなきゃ。

証人なんて生かしておいてもメリットなんか生み出さない。生産するのは私に対してのデメリットだけ。

——殺さなきゃ。

自分に言い聞かせるように心の中でもう一度だけ呟き、私は動かなくなったタンパク質の塊から離れる。

風が吹き、頬に当たる。

その寒さに身震いしながら、頬に片手を持っていき撫でるようにした。ぬるっ、と。なにかが指の腹に粘着する。

雑草の方に気を配りながら手を見みると、赤い、液体が付着している。

それを視覚で認識しても、気分が高まらない。冷めていくだけだった。

雑草の近くに到着した。

握り締めていた包丁をさらに力強く握って、上からさつき人影を見た場所を見下ろす。

だけどそこにいたのは小さな野良犬だった。

いまここでなにが起こったかなんて、なにも理解していないだろう純粹でつばらな瞳を私に向けてくる。

「……………」

私が見たと思っていたのは、人影なんかではなくこの犬の影だったのだ。

さすがに、掃除の後は興奮していたらしい。こんな小さな影を人と見間違えるなんて……。

でも、安心した。

私だって、社会のゴミ以外は掃除したくない。

いくら口封じのためだからといっても、一般人は殺したくない。

あの人が、そう言ってたから。

第5話 登校

朝が来た。

そう感じたのは、潜っていた布団から微かに見える範囲に陽光が射しこんできたからだ。

僕は布団から這い出し、カーテンを閉めていなかった窓から外を見る。

いつも見ていて、どこにでもあるような青空が広がっている。

だけど、その下に居る僕は、おかしくなってしまうそうだ。

元々おかしかっただけだけど、今では一秒進むごとに、僕の中のなにかが欠けていくのを感じていた。

昨日の夜。

つまりは楓みたいな人影を見たあの時、僕はすぐに逃げ出した。

といっても走って逃げたわけではなく、あの近くの塀には人が通れるほどの穴が、草陰に隠れているのだ。

そこから、人影が近づいてくる前に逃げただけの話。

目を閉じれば、ビデオのように鮮明に思い出すことが出来る昨夜の出来事。

あれを行っていた人物は本当に――。

「いや、そんなわけない」

楓があんなことをするはずがない。きつと、よく似た誰かと見間違えたただけだ。

こんなのは、なんの問題でもない。

暗闇で二匹一緒に並んでいる猿の種類を当てるといわれて、実は片方はフクロウでしたっていうくらいに解く気にもならない些細な問題だ。

そう、あの時は暗かった。薄ボンヤリとしか顔が見えていなかったのだ。ありえるありえる。

とりあえず、シャキツとしない頭を目覚めさせるのに、僕は自室

からで出て洗面所に顔を洗いに行った。

洗顔したおかげで頭が冴えてきたので、僕が居間に入ると今日は珍しく母さんが作っていてくれたので、それを食べた。

制服に着替え、そして時刻を確認。まだ時間は早いけどいいかな。靴を履いて僕はいつもよりも十分近く早く、家を出た。

楓とずっと一緒に歩いてきていた登校の道を、僕は一人で歩く。高校になってから一人で学校に行くのは、楓が風邪をひいたほんの数回だけだった。

だから、こんなにもなにかが足りないと思う。心の中が空洞になったように、なにかを考えることさえも苦痛になる。

目の前に楓が住んでいるアパートがあることを確認した時、一度、彼女の家に寄ろうと思った。

だけど、僕は結局そこには行かず、まるでマスコミに待ち伏せされている芸能人のようにその場から立ち去ることしか出来なかった。「なんなんだろう」

僕は一体、なにを恐れているんだろうか。

溜息を吐きながら、僕は横で流れている小川を見つめる。陽光を反射してキラキラと光る水面は、とても美しく、まるで宝石のようだった。

地面を見ると、草が茂っていて、良い感じに伸びている。

そして、目を上げると、桜の木が禿げていた。

一週間くらい前にここを通った時は、ゴールデンウィークが終わった直後だったから、ちょうど散り時で地面にまんべんなく花弁が敷き詰められていたっけ。

僕は後ろを振り返る。

そこには楓のアパートがあって、今まで飽きるほど見てきた風景も確かにそこにあった。

「……」

頭を振って、僕は登校ルートを歩く。

校門を潜ると、明が走って近寄ってくる。通り過ぎる時にリアットをされるのではないかと思ひ身構えたが、彼は普通に僕の横で止まる。

明はそのまま、ニカツと白い歯を見せて笑う。

「おはようさん」

「……おはよう」

「なんかいつにも増して不機嫌じゃないか？」

「そんな事ないよ。僕はポーカーフェイスなら世界選手権に出れるとも噂されるんだぞ」

「いや、それは隠しているだけであって、こう、なんつーか、全体的に怒っている雰囲気みたいなのが出てるんだよ」

「あははは。なに言ってるんだよ明。このっ」

明の額にデコピンを軽くする。

すると彼の顔から血の気が一斉に逃げ出した。ガクガクと産まれたての小鹿みたいに震えて、僕の額に手を当ててくる。

「熱なんてないよ」

「いや、お前は本格的におかしいぞ」

「またまたー。なに言ってるんだっつーの」

もう一度デコピン。

「あ……ああ……」

この世の終わりででも見ているかのような絶望的な表情をする。

「お前……気持ち悪いぞ」

「普段から気持ち悪いよ」

「頭、大丈夫か？」

「うん大丈夫。若禿げにはまだ早すぎるから」

「そういう意味じゃねえよ……」

明からの「お前、おかしい」という言葉爆弾による攻撃は、僕の

クラスの前まで続いていた。

「明のクラスは向こうでしょ。ほら、早く行けっ」

「休み時間になったらまた来るからな！ そのおかしさ直しておけよ！」

そう言っ僕に背を向ける明。僕は彼が教室内に入るのを見届け
てから、ぼそりと呟く。

「僕が狂ってるのは、昔からだよ」

壊滅的に、治しようなんてないほどに、最初から最後まで。僕は
おかしい。

表面上だけでは、それを捉えることはできないかもしれないけど。
それでも、内面は、狂っている。

僕も、彼女も。

溜息を吐き出し、僕は自分のクラスに入った。

窓際最後尾の席でボーッとしながら座っていると、クラスメイト
の女子が横に立つ。

「真田くん」

最初は、武士の真田幸村の事を想像の中で呼んでいるのだろうと
考えていたが、それはどうやら僕に 向けてのものだったらしい。
顔をその子に向ける。

「なにか用？」

「いや……えっと……その」

なにか言いにくい事でもあるのだろうか。彼女は、俯いたまま言
葉を続けた。

「その、相崎さんは？」

「知らない。一足早い昆虫採集にでも出かけてるんじゃない？」

「今日は、まだ会ってないの？」

僕の言葉を無視して、そう言ってくる。なにがしたいんだ、この
子。

「そりゃあね。会わない日があっても不思議じゃないでしょ」

「そっか……」

彼女の声に、陰りが芽生えたような気がした。それはまるで、嫌な予感が当たった、とても思っているかのように。

「なに、楓になにか用事？ 直接言いにくい事だったら、伝言するけど」

「ううん！ なんでもないの。気にしないで」

気にするなと言われても、気にしないのは無理だ。

だけど僕は、面倒ごとを抱えなくなかったため、適当に頷いておく。

彼女は、友達の前へと駆け寄っていく。そして、何事が話し始めた。

「やっぱり………みたいだよ」

「えー………なの？」

「うん………だつてさ」

秘密の話をするように、彼女たちはこそそと小さな声で話し始めた。時折、僕の方を見てきては、視線をすぐにそらす。

最近の若い子はわけがわからんな、などと思いつつ、僕は雲がかつてきた昼の空を見続けた。

楓は昼休みになっても学校に来なかった。寝坊でもして、途中から登校してくるのがそんなに照れくさいのか。

「真田、どうやら普通に戻ったみたいだな。よかったよかった」

「朝も言ったけど、僕はいつも通りだったよ」

昼休み。僕は中庭で明に絡まれていた。

「あはは。そうか、悪かったよ。ほら、これでも食って朝の事を水に流してくれ」

そう言って差し出してきたのは、ドラ焼きだった。

「お前、これ好きだったろ？ 購買に残ってたのを買ってきたんだ。遠慮しないで食ってくれ」

「……どうも」

ドラ焼きを見た瞬間に頭痛がして、吐き気まで襲ってきやがった。そんなに早く腹に入りたいのか、待て待て。そんなにはやるな。冷静にいこうぜ。

「どうしたんだよ、そんな敵でも見るような目をして」

「いや、なんでもないよ」

明からもらったドラ焼きを小さくちぎって、ほとんど嚙まずに飲み込んでいく。

「ははっ。真田は本当それ好きだな」

「まあね」

そんな僕の姿を見ても、明はなんとも思わないようだ。当たり前だ。他人の深層心理を見破る人間なんていないに決まっている。

飲み込む事だけに神経を注いでいた僕に、明が今思い出したとも言っかのように、何気なく呟く。

「今日は相崎は休みか？」

その名前を聞いた瞬間、小さなクズとなっているはずのドラ焼きが喉につっかかったような感じがした。

なんで、どいつもこいつも、僕が楓と一緒にいないだけでそういう事を聞いてくるんだ。

頼むから、その名前を出さないでくれ。今は他人の口から飛び出たその単語が耳に飛び込んでくるだけで、僕は眩暈がする。

「たぶん、海水浴でもいつてるよ」

「まだ夏でもないのか？ 海だつて解禁されてねえだろ」

「そうだね。だったら宇宙にでも旅立ってるんじゃないかな」

「お前、なに言ってるんだ？」

「別に」

僕は明とは逆方向を向く。そんな僕に対して、彼はため息を吐いた後、話題を変えてきた。

「そう言えばさ、お前の家の近くに廃屋あるじゃん？あそこで今朝方、死体が見つかったんだってよ」

「……」

「でさ、顔とかぐちゃぐちゃでさ、身元が判明するようなものも持ってなかったでさ。この前もこんな事件起きてたし、最近この街はどうなってるんだろうな」

「……ごちそうさま」

ドラ焼きが入っていた袋を明に押し付けて、僕はその場を後にしようとする。しかしこいつは、僕の腕をしっかりと掴んできた。

「待てよ」

そう言った明はあまり見ない真剣な表情をしていて、僕に向けてくるその視線には、憐れみが含まれているように思えた。

「この手口ってさ、不同集成に似てねえか」

「明、ズボンのチャック開いてる」

「えっ、嘘!？」

慌てて僕から手を離れた明は、ズボンを確認する。この隙に僕は、走って逃げ出した。

「あっ、おい！ 真田!!」

彼の言葉が聞こえても、無視して走り続けた。

そうだ、不同の仕業だ。昨日のあれは不同の仕業に決まっている。そうだ、そうに違いない。

「これにて証明終了」

僕は立ち止まって、そして雲が全てを覆い隠してしまった空を見上げる。

そして、呟く。自分にも聞こえない程度に、小さく、あの言葉を。

「――」

これでいいじゃないか。

全部、不同のせいだ。あいつさえこの街に来なかったら、あいつさえ生まれていなかったら、あいつさえ――死んでいれば。

こんな事にはならなかった。

昼休みが終わる前に僕は教室に戻り、あいつがいないことを確認した後、カバンを持ってクラスから出て行く。

今日はもう早退だ。やる気出ない。どうでもいい。

校門から学校の敷地外に足を踏み出し、ゆっくりと進んでいく。桜の花びらが散って緑色の初々しい葉っぱが芽生えている木をなんとなく見上げ、時折、思い出したかのように吹く風に追い抜かれる。

そんな事をしていたせいで、僕は気付けなかった。

ドンツと軽くなにかにぶつかる。

ぶつけた鼻を押さえながら前方を確認すると、スーツをだらしく着ている青年を見つけた。

「あつ、ごめんなさい」

謝って、右にどけて進路を確保する。そして一步踏み出そうとしたところで、男が僕の方に動いてくる。

たまにこういう事があるなと思いつながら左に進んでも、結果は同じ。右に行くと思いつけて左に行っても同じだった。

「あの、なんですか？」

僕はその青年を見る。

安物のスーツを着て、ネクタイは緩め、シャツの第二ボタンまで外している。長袖なので、肘の少し上まで袖をまくっていた。

表情は、なにか違和感を感じる笑顔。整った顔立ちをしているけど、その笑い顔のせいでなにか、言葉では表せないような変な感じがする。

その人は男にしては高い——作り物めいた声を発する。

「君が真田恭史くん？」

「……そうですけど、誰ですかあなた。なんで僕の名前を知ってるんですか？」

「あつ、これは申し訳ない。ワタクシこういうものです」

差し出された名刺に目を通す。

そこには、こんな肩書きがあった。

「……私立探偵」

「ええ、そうなんですよ。いやー、お恥ずかしい。ワタクシ、私立探偵の裏上ウラガミ 真マコトと言います。以後、お見知りおきを」

「僕になんの用ですか？」

「別にあなたに用は無いんですけどね」

裏上さんは人差し指を振りながらそう言っつて、僕の周囲をぐるぐると回りだす。

「嘘ですよね」

「おや、これは珍しい。なぜ分かりましたか？」

「別に、ただの勘です」

この人からは、僕と同じ匂いがする。だから分かった。こいつは、嘘つきだ。

「まあ、あれです。直接的には用はないんですけども、間接的には用があるんです」

「それはつまり、僕を通してなにか知りたい事実があるというふうに解釈してもいいんですか？」

「おやおや。ワタクシは回りくどさに関しては自信があつたんですけどね。こつも簡単に要約されるとは。あなた、面白い人です」

「そんな事はいいですから。さあ、なにを知りたいんですか？僕の知ってる範囲ならなんでも答えますよ」

「おや、これはなんとも心強い味方だ」

「くつくつく」と裏上さんは笑つて、

「まあ、味方も見方を変えれば、ただの敵ですけれどね」

「それは味方を全く信用してないってことですか？ 駄目ですね

ーそんなの。チームプレイが社会の軸なんですから」

「君も結構、嘘つきですね」

なにがおかしいのか、裏上さんはなおも笑う。

「まあ、いいです。それでは本題に入りましょうか」

「あれ、あなた回りくどいのが好きなんじゃないんですか？ 質問自体も回りくどくしなきゃ、そんなイメージは定着しませんよ？」

「おやおや。嘘つきのあなたに回りくどく質問したところで、軽かわされるだけです。なので、ここはど真ん中ストレートでいきたいと思います。……お望みなら、変化球質問してさしあげますが」
「いえ、結構です」

ストレートできても、回転してかわすけども。

僕の答えを聞いて満足したように笑った裏上さんは、シャツの胸ポケットから黒革の手帳を取り出した。

そこに挟まっていた万年筆を抜き取り、付箋を挟んでいたページを開く。

「では、いきます。第一問。じゃじゃん」

効果音を自分で言ってから、質問を飛ばしてきた。

「相崎楓を知っていますね？」

「禿げててデブで脂汗だらっただらでメガネをかけた中年男性の事を指しているのなら、知っています」

「そうそうその方です。それでは第二問。じゃじゃん。彼女との関係は？」

「彼とは昔、裏山でリアルファイトをした事があつたんです。そしてたら引き分けに終わりました、二人の間に友情が芽生えたわけですね」

「くつくつく。青春ですねー、いいですねそういうの。それでは第三問。じゃじゃん。彼女が昨日どこでなにをしていたのかは知っていますか？」

「えーっと確か……そうそう。女子高生のパンチラ見に行くとか言つて、深夜まで急な下り坂の下で待機してましたね」

「おやおや。それで、成果はありましたかな？」

「警察に捕まりかけたみたいです」

「お馬鹿さんですね。くつくつく」

「全くだ。あははは」

「その内容を知っているって事は、あなたもその場にいたって事で

すよね？」

「実はその警察官が僕でして」

「なるほど。警察ごっこをしていたと」

「いえ、違います。僕実は、特殊捜査官なもので」

「なるほどなるほど。あなたみたいなのを、厨二っていうんですね」

「なにをバカな事を。僕はもう高三ですよ？ そんな病気にはなりません」

「え？ 降参してくれるんですか？」

「なににですか？」

「いえ、いい加減このくだりにも飽きてきたもので」

「当たり前です。僕はなにも情報もってませんからね」

「おやおや。仕方がありませんね。それでは、ワタクシはこの辺で失礼します」

「二度と来ないください」

「類は友を呼ぶといえますので、それはちょっと無理な相談ですね」
では、と、裏上さんは軽く手をあげてから僕に背中を向けて去っていく。

と、数歩歩いただけで止まってしまった。こちらに振り向く。例の、違和感しか感じさせない嫌な笑みを振りまきながら。

「そうそう、忘れてました。あなたに言いたいことがあったんです」

「……なんですか？」

「昨日、殺人事件がありました。もちろん、知ってますよね？」

「初耳です」

「そうですね。それはたいした問題じゃないんで置いときましょう。問題は、その事件があったとされる時間帯に、『あなたと相崎さんがその現場付近を歩いていた、という情報があるんですよ』

「それはきつとなにかの見間違いですね。僕は昨夜、ずっと家にいたんで」

「おやおや。誰が昨夜だなんて言いました？ 昨日とは言いましたが、夜だなんていつてませんよね？」

「なんとなくそうだと思っただけです」

「おやおや、そうですね。それでは、今度こそ、アデュオス」
今度こそ、裏上さんは歩き去った。

僕は、彼の背中に呟く。

「今回は白星を譲ってあげますよ」

裏上さんと別れた僕は、家への帰り道を歩いていた。

あの人は、色んな意味で嫌な人だ。あの変な笑顔だったり、あの喋り方だったり、嘘つきだったり。

でも、なんでだろう。昔、どこかで会ったような気がする。

昔々。僕がまだまだ小さかった頃にどこかで……。

「あー」

頭の中からその記憶だけを抜き取られたかのように、その場面を思い出す事が出来ない。

なんでだろう。僕は昔ショッカーにでも改造されていたのか。それだったら僕はバッタ型のヒーローじゃなくちゃいけないじゃないか。

なにかがショックで出てこないかと期待しながら頭を小突いてみると、道路を挟んだ向こう側の歩道——正確に言うならば、ビルとビルの間に出来た嫌な思い出がある峡谷が見えてきた。

「そっいえば」

あそこで殺されていた男か女か分からない人は、不同集成と似たような壊され方をしていたっけ。

『でさ、顔とかぐちゃぐちゃでさ、身元が判明するようなものも持ってたかったてさ。この前もこんな事件起きてたし、最近この街はどうなってるんだろうな』

明との会話。

それを思い出す。

思い出したくもないのに、勝手に脳内再生される。

『この手口ってさ、不同集成に似てねえか』

「そんなわけない」

第6話 街へ

『真田くんっ！ 一緒に街に行くのだよ！！』

平日の夕方。

学校を二日連続で早退し、惰眠を貪っていた僕からそれを奪い去ったのは、体力があり余っているというふうな東条さんからの電話だった。

ボヤけている目をこすりながら、間近で彼女の声を聴いたせいで耳鳴りしている耳とは反対側にあててから応答する。

「それって、前言ってたやつだよな？ なに買うか決まったんだ」

『ふっふっふ。当たり前なのだよ！！』

「……うん、そっか。えーと、少しだけ声のボリューム下げてもらってもいいかな？」

『おおよっ。そういえば今日も早退してたね。大丈夫かいっ？ 調子悪いなら明日でもいいけど』

「いや、行くよ。うん、行く行く。大丈夫」

『だったら、十八時に校門前に集合しようかつ。じゃあね、ばははい！』

ブチッと、勢いよく切れる電話。なんであの人はあるそこまでハイテンションでいられるんだろうか。

「なんかなあ……」

なにもする気が起きないんだよね。

やる気を溜めておいたはずのダムが、いつのまにかスカラカンになって僕に送られてきてないような、そんな感じがする。

「はあ……」

一度だけ溜息を吐き、私服に着替え始める。

一階に下りて、洗面所で顔を洗った後、鏡で自分の顔を見ている。
「……」

なんでこんな顔してるんだろう。なんでこんなに、悲しそうな顔

をしてるんだろう。これは本当に、僕なのか？鏡の世界にいる違う僕なんじゃないのか？

だって、現実の僕は全然全くこれっぽっちも悲しくなんかない。おかしいでしょ、これじゃ。

家でジツとしてたら二度と外出する気にはなれそうになかったの
で、少し早いけど僕は家を出る。

自転車の鍵をあけてまたがる。

携帯で時間を確認してから、僕はゆっくりとマイバイクを漕ぎ始めた。

今日は少し湿気がある。少ししか動いてないのに、その蒸し暑さ
で汗がダラダラと流れ始めた。

自転車の速度を上げて風に当たっても、生ぬるいのしかこない。
こんな中じゃ、クツキーなんかすぐにふにゃふにゃになってしま
うぞ。

背中にかいた汗がシャツを密着させる役目を担うのを止められな
いまま、僕は東条さんとの待ち合わせ場所である校門前に到着して
いた。

周囲を見渡しても彼女の姿がなかったので、適当に携帯をいじり
ながら時間を潰す。

やる気を少しでも回復させるために、好きなミュージシャンのサ
イトに行って新曲の情報などを得てみたけども……やっぱりダメだ。
僕の中に溜まっていたやる気という名の葉っぱを全部、虫に食わ
れてしまったかのように、回復の見込みはなかった。

嫌に生温かい風を肌で感じながら、東条さんを待ち続ける。
少しして、足音がした。

待ち合わせの人物が来たのかと携帯の液晶画面から顔を上げる。
小さな体のくせにパワフルな走りを披露している東条さんが僕に
迫ってきていた。

さすが陸上部。

グラウンドで走ったら、砂埃が舞い上がりそうなほど強く地面を蹴って走っている。

楓と同じくらいの身長なのに、なんであんなに速く走る事ができるんだろうか。

なにかコツがあるのなら、是非ともききたい。それが活用される日はこないと思うけど。

その場で黙って東条さんが来るのを待つ。

キキイとか、靴底を酷使しながら僕の前で止まった東条さんは、裏表がない純粹な笑みを浮かべる。

「真田くん！ お待たせ！」

「全然待ってないよ。それよりも凄く足速いね。百メートル何秒くらい？」

「んー、そうだねえ……十三秒くらいかなっ！ 一年生の時のタイムだけだね！」

「なんで新しいタイムとらないの？」

「私は中距離タイプなのだよっ！ ゲームで言うならば、日本刀とかじゃなくて、槍って感じだね！」

「槍って、なんかすぐく東条さんのイメージに合っただけど」

「どこまでもまっすぐな感じとか。」

「そうかい？ どもどもー。じゃあ、早速行こうかつ？」

「うん」

僕は自転車を押して歩く。横を歩いている東条さんを見たけど、特に汗とかはかいてないみたいだ。

超人か、それとも汗を出す器官がおかしいのか。

東条さん目的の場所に行くまで、僕は彼女の話はずっときいていた。

向こうから一方的に喋ってくれるので、僕としては大変楽だ。：

…たまに、少し黙ってって言いたくなるけど。

歩きたくないと駄々をこねる足を動かしながら進む事、約二十分。僕は、前に楓と一緒に来た事がある商店街に来ていた。ここにバイトの日以外で来るのは、あの日以外では初めてだったりする。

僕は何度も出てくる欠伸を東条さんに悟られないように噛み殺しながら、なにも面白みがない店の外装を見ていく。

ブスツとした表情をしていたらからだろうか、僕に遠慮するような声音の東条さんが話しかけてくる。

「大丈夫かい？ 具合悪いなら、本当に今度でも……」

「大丈夫。今日を逃したら、もう買えないだろうし」

東条さんの意見を聞きたいしね。

「うーん、真田くんがそう言うなら、良いんだけど。無理っばかったら、すぐに私に言っておくれよ！」

「ははっ、頼もしいね」

「なんだい、そのやる気なさそうな返事はっ！ 私を信用してくれ！」

「うん、分かった分かったから」

鼻と鼻がぶつかるくらいの距離に近づけた顔を少し離して、声のボリュームを下げてくれ。

こんな事を思っても僕は声には出さずに、自分から一歩だけ距離をとった。

やっぱり、失敗だったかな……。こんな時に東条さんと二人でお出かけなんて。

一人でいる場合の疲れ具合と今の疲れ具合は、小学生の直球の速さとプロの最高急速並みに違う。

僕と東条さんは、近くにあった服屋に入った。ちなみに女性用のものばかりがある店だ。

入り口の所で入るのを渋っている僕の腕を掴んで、東条さんに無理やり入れられたわけだけど、やっぱり少しだけ恥ずかしいな。

周りを見ても、派手な服ばかりで、少し奥を覗けば下着があるわけだ。そして店内にいる女性達が僕の方をジロジロと見てくる。

スゴクづらい。

とりあえず僕はその人たちを見ないようにしながら、東条さんの後についていく。

「あつ、これなんてどうだい、真田くんっ！」

そういつて彼女が差し出してきたのは、すけすけのキャミソールだった。

「……それはちよつと」

「そうかい？ 私的には良いと思うんだけどね」

「いやいや、ないない。ないですよ」

「あつ、なるほど！」

東条さんはニヤリと笑った後、口元を持っていた服で覆い隠したけど、向こう側が透けて見えるのがその特徴である。

そして、たつぷりの間を空けた後、東条さんは僕を挑発……というか、誘惑するかのような声で、

「ふっふっふ。こんなのを着てる場所を想像して、少し興奮してるのかい？ いやー、若いね、若いねっ！ 夜中になにをしてるか分かったもんじゃないねっ！」

「あいにくと、僕はそういうのに興味はあまりないんだ」

「あまりって事は少しはあるんだよねっ？」

「……まあ、そうだね」

「そうかいそうかい。だったら私がこれを着て、夜中に真田くんの部屋に侵入したら、なにをされるか分かったもんじゃないねっ！ いや、分かりきってるねっ！」

「……僕は楓以外には興味ないんで」

その後、僕は周りの女性の視線に耐えきれずに外で東条さんを待つことにした。

ボンヤリと、やる気が出ない瞳で店の外で座って彼女を待つ。

道行く人を見てみると、その中に知っている顔を見かけた。その子は僕を発見すると、笑みを浮かべながら近寄ってくる。

「さなっち、どうしたの？」

「馴れ子ちゃん……」

「誰それ!？」

「ああ、いや、なんでもないっす」

頭で思った事がそのまま口に出てしまった。

東条さんと一緒になっただけなら台風どころか、ハリケーンにでも発展しそうなほどの元氣っ娘である彼女は、平日の夕方にこんな場所にいる僕を興味津々といった感じの目で見てくる。

「この前お店にきた彼女とデート?」

「いや、違うよ」

「二股?」

「違うよ」

「結婚するの?」

「なんでそうなったの」

その飛躍しすぎな発想に脱帽した。脱ぐ帽子なんてないけども。

馴れ子ちゃんが不満そうに頬を膨らませてきたので、僕は手を使って彼女の頬を挟んだ。

ぶんぶん頭を振って僕の手を振り払う。

「なにをするの! パワハラだよパワハラ!」

「セクハラね」

「自覚してちゃダメじゃないか!」

うむうむ、今日も言葉の間違いは絶好調のようで。尊敬はしないけども、なんでそこまで間違える事ができるのか不思議ではある。

馴れ子ちゃんが、なにがなんだか分からないけど、僕に絡んでくる。

彼女の私服を見て、僕は楓とセンスがほとんど逆だと感じた。

馴れ子ちゃんの服装は、ワンピースのようなヒラヒラした服にネクタイをつけ、黒いコートのような、だけどノースリーブのようなものを羽織っている感じだ。

なんだろう、なにかのアニメのキャラが制服で着ていたような感じの服だけど、あまり詳しくない僕には分からない。

そのパワフルな性格と、落ち着いている清楚な服装が相対しているけども、なぜかしっくりきています。

東条さんが出てくるのを待っているのだが、まだまだ出てくる気配はない。

このまま馴れ子ちゃんと話していても、僕としては疲れるし、そもそも、やる気でない日に相手してられるような子じゃない。

なんて言ったら傷つけずに去ってくれるのだろうと考えながら、馴れ子ちゃんの話聞き飛ばす。

「それでね、私ビックリして、思わず内臓持って来い！ って叫んじゃった」

「……」
なにがどうなってそういう展開になったのだろうか。すごく気になる。くそ。

「そしたらその子が、さなっちに『死んだ目をしてカッコイイと思ってるの？』て言えば、持ってきてやるって、言い返してきたんだ」

「……」
口にチャックちゃんだろ。なんてことを交換条件に出してんだ、あの子。

「で、どう？ 私、さなっちに言っちゃってもいい？」
「勝手にすれば……」

「そう？ じゃあ、言っね。死んだ目をしてカッコイイんですけど」

「……」
「……」

「な、なにか言ってよあ！ 言い間違えたのに訂正してくれないって、すごく悲しいよ！」

「あ、ごめん、聞いてなかった」
僕は慣れ子ちゃんを見る。

赤い顔をしているが、また間違えて卑猥な表現を言ってしまったのだろうか。

「さ、さなっちなんてもう知らない！」

怒って、僕から走って去っていく。その後ろ姿を見て、なんか頭から蒸気が噴出していることを発見。なぜだろう。

僕、なにかしたか？

走る姿を見ながら原因を探ろうと思っても、なかなか思い当たることはない。

しかし、走る姿が助けを求める子猫のように見えてしまった。

「今の誰だい？ 真田くん」

「うわっ」

視線を遠くに投げていたせいで、東条さんの接近に気付かなかった。

少しだけ早くなった心臓の動悸をおさめる。

「バイト場の人だよ」

「あー、そう言えばいたね、この前。うんうん」

なぜか妙に納得したような表情を見せる東条さん。

「なに買ったの？」

彼女が持っている紙袋を、犯人を追いつめる探偵みたいな心境で指差す。濡れ衣だけど。

「ふっふっふ」と笑うと、袋の中に手をつ込んで僕に見せてくる。

「エロチックな下着なのだよ！」

「公衆の面前でそんなもの見せないように」

「む、なにを言ってるのかね真田くん！ 黒のすけすけ下着は、男の子はみんな好きなんじゃないのかい！？ 君も嬉しいくせに！」

うりうり、といった感じで肘で僕の脇腹辺りをつついてくる。

「……好き嫌いとはにかく、そんなものこの辺で見せびらかしてたら、下着ドロに後つけられるよ」

某国民的アニメの曲に合わせてフルーツを割って腰を振っているあれみたいな動きをしている東条さんに、僕は言う。

「あー、そう言えばこの街にもいたね、そんな変態さん。うーんと、一ヶ月くらい前だっけ？ でも、もう逮捕されたはずだよねっ？」

「そうなの？ そんな話聞いたことないけど」

「むむ！ ビビツときましたよ！ あの犯人は真田くんですな！？」

「行こうか、東条さん」

「うん、買い物続きだね！」

「違う違う。もちろん、精神病院にだよ」

色んな店を回ること約二時間。

もうすでに辺りは真っ暗で、街灯の明かりが申し訳でいどに道を照らしている。

僕は東条さんに一緒に入ってもらったジュエリーショップで安価な宝石を買い、ちよつとしたほくほく気分を味わっていた。喜ぶだろうか。

気分はほくほくでも財布はすでに寒い。絶対零度なんて目じゃないね。

「他に行きたいお店とかあるかい？」

「うーん……あつ、最後に一ヶ所だけいい？」

「いいのだよいいのだよ。今日は私が連れまわしちゃったからね！
どんだん要求してくれたまえ」

ビシッと敬礼してくる。

そしてそのまま止まって、頬を赤らめ、もじもじしてくる。

「あつ、でもでも、その……エッチな場所はダメなんだからねっ！

……ああ、真田くん！ どこに行くんだい！？ なんて無視するの！！ おーい！！ 私を置いてかないでくれー！」

僕が最後に来たかったのはバッテリーセンターだった。

なんか横で、バッテリー淫具選たーなんていう当て字を考えて僕をバシバシ叩いてきている人がいるけど、面倒になったのでここはあえて無視で。

いつからこの人はこんな感じになったのだろう。昔からだっけ？
それはそうと、財布からお金を取り出して機械に投入する。

僕の横にあるバッターボックスには東条さんが入っており、わくわくした顔をしながら白球が襲いかかってくるのを待っていた。

そして第一球目。放たれた野球のボールを目でしっかりと追い、
そしていとも簡単にそれを捉える。

打球はピッチングマシンの遙か上を飛んでいき、ホームランの
的のさらに上にぶつかった。

「すご……」

東条さんすげえ……。本当に女の子だよね？

やっぱなにをやっても上手い人っているもんなんだね。普段のキ
ャラからはこんなの想像できなかったけど。

「おっと」

啞然としている途中なのに、反抗期の子供を殴りつける父親のよ
うな厳しさで僕のピッチングマシンが動き出した。

空振り……。

おかしいな。球速百二十キロにしてあるのに。

体勢を整えて、第二球目。

球の下をかすって、ファール。三球目は右側に切れてファール。

よし、だいぶ慣れてきた。

「えいやっ！」

東条さんはスゴク順調で、さつきから良い音が途切れない。今も
右中間を真つ二つのツーベースぐらいの良い打球だった。適当だ
けど。

バッティングをしながら、ここに楓ときた日の事を思い出す。

あの時は、楓が僕の後ろにいて、緑の柵を間に置いたその距離が
僕が思い描いていたそれによく似ていた。

だから僕は、思い切って告白した。

ホームラン打てたら、付き合ってたって。結局打てなかったけどさ。
あの時は、よかった。幸せだった。僕の横にいる楓との距離がさ

らに縮まって、僕は最高に嬉しかった。

だけど、今は……。

「くそっ」

力任せにバットを振って、ふつふつと湧いてきた様々な感情を吹き飛ばす。

バットに当たらなくてもいい。今日は暴行を加えに来たわけではない。

ただ、僕は今、なにかに熱中したかった。一人になって、暇になれば、すぐに嫌な事を想像する。

さっきまでは東条さんについてきた事を後悔していたけど、今では感謝しかない。

少なくとも彼女という間は、バカな事を考えずに済んだのだからでも、また一人になる。それは、怖かった。なにも考えなくなかった。ずっとずっと、今のままで止まってくれればと思った。

来た球に合わせて、無意識の内にスイングする。

真芯に当たった感触。

球は、飛んでいく。

ぐんぐん伸びていく。

そして、ホームランの的に当たった。

前は当たらなかったくせに。

「なんで、上手くないんだろっ」

東条さんと一緒に白球暴行大会会場から外に出る。

車が時折、通るだけで通行人の姿はない。さすがに夜間になったら、街の人たちは外出を控えているらしい。

東条さんをバス停まで送るために歩きだす。

道中、僕の隣にいる彼女がマシンガントークで僕を蜂の巣にしようとしてきていたが、聞き流すようなことはせずに、僕は結構、真剣に聞いていた。

そうでもしなければ、怖くなる。変な事を考えそうで怖くなる。バス停には会社帰りと思われるサラリーマン風の男が一人だけいた。

「今日はありがとね、真田くんっ」

「いやいや、こちらこそ」

東条さんのショッピングに付き合いながら、僕も軽く買い物したし。

当初の考えどおり、ちゃんと女の子の意見も聞けたので、良い物を買えたと思う。

「なにかお礼したいのだよっ」

「え？ いや、別にいいよ、そんなの。僕も楽しかったし」

「ダメダメ！ 私に付き合ってくれた君にプレゼントしなきゃ、気がすまないのだ」

「そう？ うーんと、じゃあね」

適当に考えて無難なものを注文しようとした時、東条さんは僕の後ろ——街灯しか存在しない、住宅街の細い路地辺りを凝視していることに気付いた。

そして、唐突にふっと笑うと、顔を近づけてくる。
そして。

「……」

「お釣りはいらねーぜ！」

バイサインをしながら、タイミング良く来たバスに乗り込んでいく。

サラリーマン風の男性が見てきていることを感じながらも、僕は頼に、東条さんの唇が触れたそこを、自分の手で触る。

「こんなのいらないよ」

この眩きは、多分、彼女には届いてなかった。

自分の家がある田舎まで歩いて帰る。

角を曲がった所で、奇妙な人と出会った。

「おやおや、真田くん。これは偶然ですね」
「そうですね」

裏上さんだった。

相変わらず例の笑みを携えながらの登場。
ワイシャツの第二ボタンまで開けていて、今日もラフな格好だった。

「僕になにか用ですか？」

「いえいえ、だからただの偶然なんですよ」

「じゃあ、用はないんですね？ では、僕はこれで」

裏上さんの横を通って、再び帰路につく。

「あー、そうだ、真田くん」

予想通りに呼びとめられた。

だけど僕は無視して歩く。

「真田くん」

また無視。

「真田くん」

無視。

「くつくつく。中学校時代を思い出しますねー」

……無視。

「あの時は話しかけてもみんなに無視されて、相手されても、一方的なリンチでしたからねー。くつくつく」

真っ暗な青春時代を送っていたらしい。

「おやおや、まだ無視ですか。ワタクシ、喜びますよ？」

「ドエムですか」

「ワタクシの性癖を披露したら反応してくれるなんて、もしかしたら真田くんも同類ですか？」

「あなたとは逆の位置に立っていると思います」

裏上さんは、右手を体の左から右にスライドさせた。

「この話はいずれ、じっくりとしましょう。今は、別に聞きたい事があるんです」

「やっぱり、偶然じゃないんですね？」

「いえいえ、だから偶然なんですよ」

本当にこの人は、相手しにくい。なんか苦手だ。

「……手短にお願いしますね、嘘つきさん」

「くつくつく。わかりました、同類さん」

裏上さんは、この前と同じ手帳を取り出して、適当なページを開いた。

「さて、聞きましょう。あなたは、死刑制度をどう思いますか？」

あれ、事件の事についてじゃないのか。

「……制度自体はいいと思いますよ。極悪人にはお似合いなものだと思います。死には死を、って感じですかね」

「嘘ですね？」

「本当です」

「おやおや、ワタクシに嘘は通じないですよ、真田くん。あなたが隠したいなら、ワタクシが当ててみましょうか？」

「どうぞ、ご自由に」

「あなたは、死なんていう一瞬の苦しみを味わわせて満足するような性格ではないと思われます。では、どうするのか。簡単ですよ？一生、死ぬまで刑務所に収監してもらい、そこから出られる希望など、むしりとってしまえばいい。希望がない人生なんて、それはもう、死ぬよりも辛いことかもしれません」

例えばの話。

連続殺人犯に拉致された少女がいたとする。

その少女は、毎日毎日、体を傷つけられ、凌辱され、辱められ、いつ殺されるか分からない恐怖と闘い続ける。

そんな日が続き、助けなんてこない、そう絶望してしまえば、その少女はどうなるか。

おそらく、精神的に、死んでしまう。

精神が死んでしまえば、そこに残るのはただの抜け殻だ。生きているようで、死んでいる。

死んでいるようで、生きている。

その状態になってしまえば、一瞬の死なんてものはなんと安っぽく、そしてなんて羨ましいものに思えるだろうか。

「それに、もしその犯人が出てきても、その人はすでに社会的に死んでいるようなものです。就職にありつくことはできず、やがて罪を重ねるでしょう。そんな、負のスパイラルを味わわせる。ずっと、そんな螺旋の中で苦しんでもらう。一瞬の苦しみなんてものでは、あなたの気がおさまらない。だから、ずっと苦しんでもらう」

「……そこまで僕の心理を捏造するなんて、あなた、なかなかの詐欺師ですね」

大体、不同集成には死んで欲しいって思ってるんだ。そんな心理があるはずがないじゃないか。

「……おやおや。外れてしまいましたか。まあ、でもあれです。当たらずとも遠からずっていう感じですよね？」

「そうですね、バットとの距離は三十センチ以上開いています」

「くつくつく。あなた、皮肉が好きなんですか？」

「いえいえ、あなたが嫌いなだけです」

「おやおや、あなた、同族嫌悪っていう言葉を知ってますか？」
「ええ、知ってますよ。けれど、僕と裏上さんは似ているだけです。似て否なるものは否でしかないんですよ」

「くつくつく。あなたと話していると本当に飽きませんね。おや、それでももうこんな時間ですし、そろそろワタクシはお暇しましよ」

腕時計を確認した裏上さんは、心底楽しそうに、だけど、本当はなにを考えているか分からない笑みを浮かべた後、僕に背を向ける。
「あつ、そうそう。言い忘れてました」

僕に背を向けたまま、彼は言う。

「いくらリア充だとはいえ、二股はあまりほめられたものではないですね」

僕は答えない。

「おやおや、否定はなしですか。それとも、ワタクシ無視してまた喜ばせてくれる気なんですかね？」

僕は答えない。

「くつくつく。ああ、気持ちいいものです」

僕は答えない。

そして彼は去って行った。

「ああ、もう一つ」

……かと思つたが、ムーンウォークをしながらすぐに戻ってきた。
「これはあなたには凄く不都合な情報かもしれませんが、それでも伝えておきます。一昨日の夜に起こった殺人事件についてですが、聞き込みをしたところ有力なものがでてきたんです。その人が言うには、相崎楓によく似た人物が殺害現場から出てくるのを見た、というものなんです。それも、なにか赤いものが付着している服を着ていたようです。これ、どう思います？」

僕はまだ無視する。

「ああ、ぞくぞくします」

そして、今度こそ、彼はいなくなつた。

僕は街灯の下に移動して、光に集まっている虫を見つめる。

なんだあの人、僕を完全に尾行してたんじゃないか。

なにが偶然だ。

ふざけるな。

僕は、なにも知らないというのに。無駄足御苦労さま。

ああ、それでも気になる事が一つだけあるんだ。

「……なんで僕は、今回の事件について、なにも知らないんだろう」

ねえ、楓？なんでなの？

なんで、僕に相談してくれないの？

なんで電話してくれないの？

本当に、君がやったの？

だとしたら、いつから君は殺人を行っていたの？

もし、本当に君がそんな最低な行為をしていたというのなら、僕は、君を……。

その後に浮かんできた言葉を脳の奥にしまいこみ、僕は歩きだす。なるべく面白かった事を思い出しながら。今の裏上さんとの会話を全て忘れるように努めながら。

第7話 バイト場で

今日は学校を休んだ。

最近、僕の様子がおかしい事に気づいた両親は訝しげな視線を送ってきているが、僕としてはそれを海の底に沈めるしだいである。

昼ご飯を食べて自室で寝転がる。

なにもやる気が起きない。なんで僕はこうなってしまったのだろうか。

少し前からおかしい。

おかしいと言えば、裏上さんはおかしいを通り越して、もはやおかしくない部類に入と思う。

どんなにおかしくてもある一定のラインをぶつちぎってしまえば、それはもう常識の範囲に収まるものではなくなり、結果として誰からも理解されなくなり、誰にも理解されることがなくなれば、それをおかしいと思う人もいなくなるわけだからだ。

そういう考えで言うのなら、不同集成も同じなのだろう。

あいつはどうしもないくらいの殺人犯で、どうしもないくらい腐っていて、どうしようにもないくらいの糞野郎で、だけどどうしようにもないくらいの常識人だ。

「……………」

じゃあ、相崎楓は？

あいつは今、なにをしている？

僕が見たあの場面は、なにをしている所だった？

芸術？ そう表現したかもしれない。だけどそれは、どうしようにもないくらいに腐った芸術だ。

動くモナリザの都市伝説くらい馬鹿げている、そんな行為だ。

『僕と楓は現場付近で目撃されている』

『証言者によれば、相崎楓は血が付着しているように思える服を着ていた』

裏上さんの言葉を適当に思い出してみる。あの人の事だから信用なんてできないけど……でも。

僕は見た。

目撃した。

確かにあの惨劇を。

僕の日常を破壊するきっかけになった、あの忌まわしい事件を。

「くそっ」

寝転んだまま天井を見上げ、目を強くつぶり、唇をかみ締めた。

なんで僕はあの時、どら焼きを買いに行ったのだろう。

あんなもの、次の日に学校行くとときとかに買えばよかったじゃないか。

嫌いだ。

どら焼きなんて大嫌いだ。

きつくかみ締めた唇から血がにじんで、口の中に侵入してくる。

僕はその鉄のような味がする液体を、飲み込んだ。

あいつは、こんな不快な味しかない水を全身に浴びて、なにを考えていたのだろうか。

あいつなら、絶対にあんなことはしないって信じてたのに。

「……なんで」

裏切ったんだよ。

信じてたのに。なんで。

誰のせいだ。

そう考えて、僕の脳裏に一人の顔が浮かぶ。

不同集成。

あいつが、この街にきてから、全てが動^{クル}い始めた。

来るなよ。狂うなよ。なんで僕の人生を狂わすんだよ。

「なんで」

胸が痛まないんだ……。こんな事になってるのに、なんで僕は、
なにも感じる事ができないんだ……。

だらだらと自分の部屋で過ごす。

本を読むでもなく、ゲームをするでもなく、ただただボンヤリと色んな事を考えていた。

「バイト行かなきゃ」

行きたくないけど、直前で休むと連絡するのはお店に失礼だ。

なので、僕はなかなか動かない体を引きずりながら準備を始める。ファミレスまで自転車で行き、ユニフォームに着替えてバイト開始。

といつてもこの店は雑誌で紹介されているくせに暇なので、机の上を拭いたり店の掃除などをする。

なんか店の隅のほうで、馴れ子ちゃんが「うー」とか言いながら威嚇してきているが、それは無視しておこう。

ここで関わっちゃいけない。面倒なことになりそうだ。

店の掃除も終わり、暇な時間がやってきた。

「よお、真田」

「小堂さん、こんにちは」

僕が暇になるのを待っていたかのような絶妙なタイミングで、小堂さんが話しかけてくる。

「お前、もう少しなんかの仕事してるふりしとけ。じゃなきゃ、店長の餌食になるぞ」

「……それはそれは、わざわざありがとうございます。あんな料理、罰ゲームにでも出てきそうな感じですよもんね」

小さな子供が食べたら、ショック死するか匂いを嗅いただけで爆発するだろう。刺激物ではなく、爆薬みたいなものだ。

「小堂さんは大丈夫なんですか？ 僕とここで話してたら、ターゲットにされますよ？」

小堂さんは気まずそうに頬をぱりぱりと掻いて、一瞬だけ休憩室の方に視線をやる。

「今の所は大丈夫だ。厨房の同僚が被害に遭っているからな」

——ぎゃああああ！

そんな叫び声が休憩室の方から聞こえてきたけど、僕たちはそれを完全にスルーした。

「良い天気ですよー」

「ああ、真田みたいな顔した天気だな」

「……どういう意味でしょう？」

「ポーカーフェイスが崩れて、いつ雨が降ってくるのか分からない晴天だって意味だよ」

「晴天なんですから、雨なんてそうそう降りませんよ」

「分かんねえぞ？　いつその予兆である雲が広がりだすかなんて、予想できないからな」

「……そうですね」

小堂さんは首を鳴らしながら、厨房に戻って行った。

それから約五十分後。

今まで雲一つなかった空が、どこからか大量に出てきた雨雲に覆い隠され、スコールもびつくりなくらいの雨が降り始める。

「……」

小堂さんの言みたいなのが当たってしまった。

なんだあの人。マヤ文明の生き残りの子孫なのか？

「あーあ、やっぱり降ってきやがった」

またホールにやってきた小堂さんは、僕と同じように窓から空を見上げる。

この雨を見続けていた僕はどんな顔をしていたのだろうか。

僕のあまり変わらない表情を、それでも小堂さんは敏感に見分ける。

「なんか悩み事か？」

窓に手をつきながら、軽い感じに言ってくる。

僕はその言葉に少しの間だけ無言を貫いてから、それでもやっぱり

り心中を吐露する。

「作り話を聞いてください」

僕はこの天気——全てが狂い始めたあの日にそっくりな土砂降りの雨をみたせいで、あまり思い出したいくない過去を想起する。

「幼なじみの女の子が大好きな一人の少年がいました。その少年達は七歳。ある日少年が家に帰ると、テレビでニュースが流れていました。平和な街に突如として出現した連続殺人犯の、これからたくさん命を奪う最低最悪な殺人犯の、一番最初の殺人事件でした」

思い出す。

あの日の事を。

雨の滴が地面に叩きつけられる小気味いい音を聞きながら、僕は続ける。

「少年はそれを見て、怖いな、とだけ感じて、だけど自分には関係ない事なのですぐにニュースを見るのを止めてゲームをしました。その日の夜、少年は嫌な胸騒ぎがして跳び起きました。そして、なぜか幼なじみの少女の事が気になり、深夜にも関わらず、家を飛び出して様子を見に行きました」

小堂さんの様子を窺う。真剣に聞き入ってくれていた。

「少年は女の子の家に着きました。そこで見たのは、凄惨な犯行現場でした。その日の昼に見たニュースは、この女の子の身に降りかかった事実でした。少年は、震える足で少女を捜しました。一階にはいません。二階にいました。警察が保護してくれていたのに、そこから逃げ出して、クローゼットの中で震えていました。少女は僕を見て、それまでたくさんの笑顔を作っていた顔を醜悪に歪めて、こう呟きました」

『お前が死ねばよかったのに』

「少年はその場から動けませんでした。ただただ、少女の暴言を、幼い頭を総動員して理解しようと試みているだけでした。——その日から、少女は本当の意味で笑わなくなりました」

雨が降り続ける。

「どうでした、僕の作り話」

小堂さんを見てみると、彼は不快そうに眉をひそめた。

「どこからどこまでが本当だ？」

「僕が七歳の所と、幼なじみの女の子が大好きな場所だけが本当です」

「ほとんど作り話じゃねえか！」

「だから最初にそう言ったじゃないですか」

「ああいう感じの入り方だったら、自分に降りかかった事実を喋っていると思うだろうが！」

「ああ、なるほど。失礼しました。でも、さすがに僕にあんな過去はないですよ」

「心配して損した気分だ！」

肩を上下させて、小堂さんは厨房の方に歩いていった。

ちゃんと作り話って言ったのに怒られるなんて。

ため息をつこうとした所で、来店を知らせるチャイムが鳴った。

僕は、以前ここで練習したように、作り笑顔を貼り付けて入り口を見る。

「おや、真田くん。こんにちは」

「……なんで」

「ん？ なんですか？ ワタクシがここに来ちゃいけない理由がありますかね？ 一応、ここはお店ですよ？ お客なんですから、そりゃあ来ますよね？」

「僕はあなたに会いたくない」

「くつくつく。中学時代でもここまで嫌われたことはなかったですね」

裏上さんは、気味の悪い笑顔で細めている目を、さらに細めた。

「ああ、そうそう。ちょうどいいです、真田くん。ちょっとワタクシの世間話に付き合ってくださいませんか？」

「あなたとそんな話をするくらいなら、僕はミジンコと一方的に話してたほうがマシです」

「くつくつく」

「あはは」

「店長さんはどこにいますか？」

「奥の休憩室で実験中です」

「呼んできてくれませんか？」

「嫌です」

「ああ、そうですか。別にいいですよ、彼の携帯に電話しますから」
「そう言うと裏上さんは、携帯を取り出してどこかに繋げる。すぐに相手は出たらしく、何回か言葉を交わしたあと、通話を切った。」

「出てきてくれるそうです」

「知り合いなんですか？」

「ええ、昔、彼が抱えていた問題を解決してあげて、その時の縁がまだ繋がっていましたね」

裏上さんは「くつくつく」と笑う。

その笑顔を見ながら、僕はまた既視感に襲われる。

この、能面みたいに貼りついた笑顔は、以前にもどこかで見た事がある。

それがどこだったか分からない。

「ああ、そうだ、真田くん」

カウンター席に座った裏上さんは、手を組んでその上に顎を乗せた。

「なんですか？」

「いえいえ、先ほどのお話はとても興味深かったです。もし良かったら、真相を聞かせてくださいませんか？」

「さっきの話ってなんですか？」

「昔話ですよ。さっき、クールな男性と話してたじゃないですか」
「どこで聞いてたんだこの人。」

「……小堂さんと話してたのは、ちょっとした手違いでクラスメイトの男子に殺されかけたっていう冗談話ですけど」

「おやおや。そちらの方にも興味ありますね？」

「あれです。クラスメイトが作ってきた爆弾の解除方法を忘れてて命がけで解除したっていう、ミステリー小説の終盤にあるような異様な盛り上がりをしてみせたんですよ、僕が」

「くつくつく。それはそれは、御苦労さまですね」

「ええ、本当に」

「ちなみに種類はなんですか？」

「プラスチック爆弾とか友達言っていましたね。校舎くらいなら木端微塵にできるくらいの大きさって 言っていましたけど、本当かどうかは分らないです」

会話がひと段落した所で、店長さんが実験場もとい休憩室から出てきた。

カウンター席に座っている自称私立探偵を見つけると、いつもの豪快な笑みを浮かべる。

「真！ 久し振りだな！」

「あなたはいつも通り元気そうで安心しましたよ」
裏上さんも微笑む。

その後、二人でなにか話してから、裏上さんは本題に入った。

「真田くんを少しの間、借りてもいいですかね？」

「おお、いいぞ！ 好きなだけ借りてくれ！ どうせ暇だしな！」
本当に適当な人だ。ここは断ってくれればいいのに。

「という事ですので、真田くん。あっちの窓際の席に行きましょう」
嫌だ、断りたい、帰りたい、今すぐにでも。

でも裏上さんに腕をガツシリと掴まれてしまった。その細腕からは想像できないような力でカウンター内から引っ張り出され、席にまで引きずられていった。

僕が逃げられないようにするために、裏上さんは窓に一番近い席に僕を押し込め、その隣に自分が座る。

なんか、今日の裏上さんは強引だ。

「さて、質問に入りましょう」

早速、ポケットから手帳を取り出し、そして小さな透明の袋を机

の上に出した。

「さて、これがなにか分かりますか？」

僕の目の前に掲げて、裏上さんは首を傾げる。

「袋です」

「そうです。だけどワタクシは今、中に入っているものがなにかを訊いてるんです」

「酸素とかが入ってるんじゃないでしょうか」

「くつくつく。ついにて窒素とか二酸化炭素てきなものですね？」

「ええ、そうです」

「真田くん。二つだけ良い事を教えてあげます」

裏上さんは僕に更に近づき、一端、袋を置いて、手帳を持っていない左手を握り込んで――。

「ウツ!？」

「ワタクシ、結構、短気なんですよ」

僕の鳩尾に拳をめり込ませてきた。

鈍い痛みが体を駆け巡り、一時的に呼吸困難に陥る。

「そして二つ目は、人が、殺されてるんですよ？」

痛みに喘ぐ脳みそで、僕は、この人がどれだけ恐ろしい奴なのかを、ようやく理解した。

「ん？ どうしました、真田くん。なんでそんなに苦しそうな顔をしてるんでしょうか。ワタクシ、なにかしましたか？」

「……いえ、別に」

呼吸を落ち着かせる。

そして僕は、気味の悪い笑顔を浮かべているその顔を見つめる。

「そうですか、それは良かったです。さて、質問に戻りましょう。この袋の中に入っているのはなんですか？」

「髪の毛ですね」

「そうですね。何色かは分かりますか？」

「……黒」

「残念、茶色です。栗色とでも表現しますか」

袋の中には、長い髪の毛が入っている。

「さてさて」

裏上さんは、今まで見た事がない、心底楽しそうな笑みを浮かべる。

「この髪をどこで見つけてきたか、分かりますか？」

「あなたの彼女の自宅から拝借してきたんじゃないんですか？ 髪フェチっぽいですが、あなた。その一本をどれだけ舐めたのか分かりませんが、僕にその趣味を押しつけるのはあまりにも——」

また鳩尾を殴られた。痛い。

「——なんで、すか、あなた。前はドエムとか、言ってたくせに、ドエスにも目覚めたんですか？」

苦しいのを我慢して、なんとか言葉を発する。

「おやおや、あなたにワタクシの趣味を押しつけてあげようかと思つて、殴りたいのを我慢して殴つてさしあげてるのに、その言い草はあまりにもあんまりですよ」

裏上さんはもう一度、僕の前に袋を掲げる。

「この髪を、どこで拾ってきたか、想像できますか？」

「分かるはずないじゃないですか」

「くつくつく。嘘はよくないですよ、真田くん」

「黙れ嘘つき」

「口の利き方には気をつけろ、同類。——おっとすいません。まあ、面倒なので答えを言ってしまうでしょう」

裏上さんは少しだけ間を空けたあと、とんでもない発見をした学者みたいに喜びを全身で表現する。

「これは、この前の殺害現場で拾ってきたものです。もちろん、警察から拝借したんですがね。ワタクシ、警察のお偉いさん方にも顔がきくものでして」

自慢のつもりだろうか。

「……それがどうかしましたか？」

「くつくつく。あなたなら、分かるでしょう？ いえ、誰にでも分

かりますよね、こんな事」

僕は窓から外を見る。

いつの間にか、雨は止んでいた。

「簡単な事ですよ、この髪の毛は犯人のものである可能性が高い。つい最近起こった事件の被害者は、女性でしたが、それでもショートカットでした。長い髪の毛が、長い間、放置されていた廃屋に落ちてるだなんて、そんなの犯人以外、考えられません」

「そうですかね。ホームレスのおじさんが一時的に住み着いていたっていう可能性があるじゃないですか。髪を切るお金がないから、伸びきっていたっていうこともあり得ますよね？」

「おや、言われてみれば確かに。それでもですね、あの廃屋には埃が溜まっていました。誰かが一時的にでも住んでいた可能性は低いですよ。ああ、もちろん、殺人が行われたであろう場所には、埃などとはなくなっていましたか？」

「その髪の毛はどこにあったんですか？」

「確か、殺人場所の近くでしたね。ええ」

「埃に埋まっていたとかは？」

「ないです。動きがあつたせいで埃がなくなった場所に落ちていました」

「それでしたら、考えられる可能性は一つですよ、裏上さん」

「ええ、犯人のもので——」

「あなたの髪の毛です」

また殴られる。

いい加減、呼吸困難に馴れてきた。

「くつくつく。笑える冗談は好きですが、今の冗談は嫌いです」

やれやれと言った感じで裏上さんは首を振る。

「あなたと話していても進みませんね。もういいです。要件だけを伝えていきますので」

手帳になにかを書いて、それを僕に押しつけてこようとしたので、手近にあったマッチで燃やしてあげた。

「……なにをするんですか、真田くん」

こめかみの辺りがピクピクと動いている。

「いえ、僕に預けようとしたって事は、ゴミですよ？わざわざ捨てに行くのは面倒なので、ここで燃やしてしまいました」

「そうですか」

もう一度、なにかを紙に書く。また燃やす。殴られた。火が消えたマッチの棒を口に突っ込まれた。火薬臭かった。

「さて、これが最後のチャンスですよ？」

もう一度、渡してくる。僕の口をまたゴミ箱にしたくないので、素直に受け取った。

「そこに書いてあるのを読んでいただければ分かりますが、それでも言うておきましょう。まず、相崎楓の毛根付き髪の毛を手に入れてください。——なんですかその目は。大丈夫ですよ、舐めまわすような真似はしません」

「いえ、そういうことじゃなくて、なんであいつの髪が必要なんですか？ どうしても欲しいのなら、家に入って探してみればいいじゃないですか」

「嫌ですね真田くん。捜査令状を持つ事が出来ないワタクシがそんな事したら、住居不法侵入で捕まるだけです」

「むしろそれを望んでいるんですが」

「そうですか。別にどうでもいいことです。で、髪を手に入れたら、ワタクシにください。この袋の中に入っている髪でDNA鑑定をします」

「……」

「なんですか？ くつくつく。あなたは彼女が犯人ではないと信じてるんですよ？ だったら、このくらい協力してくれてもいいじゃないですか、彼女の無実を証明する手段にもなりますよ？」

「……」

「嫌ですか？ 断るつもりなら、ワタクシにも考えがありますよ？」
「どうするつもりですか？」

「毎日あなたの携帯にイタ電し続けます」
「なんて悪質な嫌がらせを」

バイトが終わると、僕はあいつが住んでいるアパートに直行した。
築二十年くらいのボロアパートの前に着く。

あいつが住んでいるのは二階の一番左側なので、僕はサビついている鉄製の階段を上ってそこまで行く。

一度だけ深呼吸してから、ドアノブをひねる。

がちがちと鍵が閉まっている事を音で主張してきた。

扉を叩いて「開ける！ 警察だ！！」的な事を言おうとして止めた。無意味だから。

さて、家の中に入る事は出来なかった。これで、一応、裏上さんに協力しようとして家まで行ったけど、拒絶されたという大義名分の出来上がりだ。

どうせあの人の事だから、僕をどこから見ているのだろう。

さて、帰ろう帰ろう。まだ夜は肌寒いから風邪をひくかもしれない。

家に帰った僕は、母さんが作り置きしておいてくれた夕飯も食べずにベッドに倒れこむ。

ベッドが僕の体重以上に沈みこんだ錯覚に陥って、その理由をぼんやりと考えてみる。

きつと、疲れているのだ。

必要以上のものを背負ったり、変な感情を抱いているせいで体が重く感じているわけではない。

そうだ、そうに違いない。

寝返りをうつてからもう眠ろうと思い、そっと目を閉じようとした。

だけど、ここで目に入るものがあつた。

それは、僕の机の上にあつた。

マジシャンが被るようなシルクハットの黒い帽子。

以前、あいつの忘れ物だろうということ、僕が持ち帰ってきて、それ以降あそこに置きっぱなしにしていたもの。

「……」

僕はゆっくりと立ち上がって、机の前に行き、帽子を手取る。

内側を確認してみると。

「……」

あつた。

茶色く長い髪の毛。それに毛根つき。

それを摘み上げてとった僕は、近くにあつたナイロン袋にそっとしまい込んだ。

次の日も学校を休んで、バイトだけ行つた。

明からメールが来たけど、僕はそれを無視し続ける。

今は、他の事などどうでもいい。

ただただ、結果が欲しい。

バイト場に行く途中に僕を待ち伏せしていた裏上さんに、持っていたナイロン袋を押し付ける。

「おやおや、やっと協力してくれる気になりましたか」

などと言っていたけども、僕はあなたに協力するつもりはないんだ。

ただ、自分でなにかしただけだ。

あいつの無実が証明されるのならそれで構わない。むしろ万々歳だ。

だけど。もし、無実の反対である事実がでてきたとしたら、僕は一体、どうする気なのだろう。

僕は本当にあいつのことを信じているのだろうか。

分からない分からない。

嘘ばかりつく自分の心境なんて、自分でもよく分からない。

他人を騙して、自分を騙して。

そうやって今まで僕は生きてきた。

そうでもしなければ、嘘でもついて情報の面だけでも優位に立つことができれば、僕はきっと、とつくの昔に自殺でもなんでもしていたのだろうから。

こんな自分が大嫌いで、だけど、一生懸命、他人も自分も騙し続ける自分が好きだった。

そうでもしなければ守れなかったものがあるのだから。

でも、今は……？

嘘をつき続けて、守れるものが今はあるのか？

あるのだとしたら、どうなる？

「……」

ああ、僕は一体、一番最初に、なにを守りたくて嘘をつき、なにを信じたたくて嘘をつき、なにを隠すために嘘をつき始めたんだっけ。バイトが終わり、家に帰っている時、僕の携帯が震え始める。

重く感じる腕を動かしてポケットからそれを取り出し、サブディスプレイに表示される名前を確認した。

そこで。

携帯のバイブにも負けなくらい僕の手が小刻みに震え始める。

生まれたての小鹿みたいにぶるぶると震えすぎているせいで、名前を確認できなくなっただけど、そんなのはもう関係ない。

携帯を開き、通話ボタンを押す。

『恭史！』

聞こえてくるのは、たった数日しか聞いていないはずの、だけど、何年も聞いていなかったように思える、夏の風鈴のように綺麗な声。街中を走っているのか、車の走行音や客引きの声がうるさい。

だけど、それでもはつきりと、分かる。

相崎楓は焦っていた。

なにかに追われているのだろうか。
なにかに迫られているのだろうか。
なにかから隠れているのだろうか。
なにかに脅えているのだろうか。

僕はその声を聞いて、懐かしさと一緒に、黒い感情もふつふつと沸き起こるのを感じていた。

『恭史！ 私、最近変なことになって！ どうしようどうしよう！』

電話先の相崎楓は明らかに動揺している。

「昨日の夜はどこにいたの？」

自分でも驚くほど、冷たい声だった。彼女にはこんな声で接したことはない。

だから、彼女もその異変に気づき、だけど僕の唐突な質問に答えくる。

『昨日の夜は用事があって、外に出てたよ。でも、そんなことより

……』

「外に出てなにしてたの？」

『え？ いや、だから用事があって……』

「なんの用事？」

『……なんで、そんなときくの？』

「外に出て、また人を殺してたの？」

彼女が息が一瞬詰まったかのように、言葉が途切れる。

『そんなことしてない！ 恭史なら信じてくれるよね！？』

「信じたいよ。だから、昨日の夜はどこでなにをしていたの？ —

昨日の夜のことも教えて？」

『……恭史も、私の事を疑ってるんだね』

歯を食いしばっているのか、とても苦しそうに彼女は呟く。

そこから一呼吸置いて、相崎楓は続ける。

『一昨日から私は熱が出てて、ずっと寝込んでた。昨日は少し熱が下がったから、買い物に行ってたよ。夕方に出かけて、寄り道とか

一杯したから、帰ってきたのは夜の十一時くらい』

「証拠は？」

『……商店街の八百屋さんのおばさんと話したから、聞いてくれればわかると思う』

「……ねえ」

『なに？ 信じてくれる気になった？』

最初から期待なんてしていないような、そんな声だった。

「なんで嘘つくの？」

『嘘じゃないよ！』

「僕は、君の嘘なら、高確率で見破れることができるんだよ？ 今までだって、そうだったでしょ？ だから、君のそれは嘘だよ」

『嘘……じゃないもん』

「いや、嘘だよ。だって僕は、君が一昨日の夜に外にいるのを目撃しているし、僕以外の証言者だっている」

『そっちこそ嘘ついてる！ 本当に私は……』

まだなにか言い続けようとする彼女に、僕は少しだけ声を荒げた。
「僕は君が、一昨日の夜に人を殺している場面をみてるんだよ！

包丁みたいなもので、人に馬乗りになって、何度何度も凶器を体内に侵入させるそんな場面を見てるんだ！ 昔よくいった古い洋館の伝説みたいに、ドッペルゲンガーがこの世にいない限り、君は……人を殺してたんだ！」

『……』

久しぶりに大声を出したせいで、喉がひりひり痛む。僕は唾を飲み込んで、言葉を待った。

『う……き』

ぼそりと声がする。

それは段々大きくなって、最後には泣き出しそうなくらい大きな声になった。

『嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき嘘つきうそつきうそつきうそつきうそつきウソツキウソツキウソツキ嘘月鷺尽き嘘付き——嘘つき！

！」

呪詛のように何度もその単語が繰り返された後、電話は切れた。ツーツーという、もう相手と繋がっていない音を聞きながら、僕は地面に膝をつく。

街灯に照らされたその道には、僕しかない。

握り締めた携帯を地面に叩きつける。派手な音がして、壊れる。

それでも、何回も叩きつけた。

原型を留めなくなって、部品だけになったら、今度は拳で地面を殴りつける。

皮が剥け、血が地面に吸い込まれる。

「……泣きたい」

だけど泣けない。

泣きたい時に泣けないことは、想像以上に辛い。

目元に手を当てる。

水が流れる気配などない。乾ききっている。まるで砂漠みたいだ。泣けば、涙に乗って、今のこの気持ちは流れるだろう。

そうすれば、楽になれる。だけ。

「……なんで泣けないんだ」

心は今まで通り、痛まない。

麻痺している。

どうしようもないくらい、僕の心は狂っている。

昔からの幼なじみがあんなことをしていると知っているのに、涙一つ流せないなんて、人間失格だ。

足音がしたので顔を上げる。

いつの間にか裏上さんがいた。

「おや、どうしました？」

「いえ、別に」

「そうですか。今日は報告にきました。警察に大至急DNA鑑定をお願いしたところ、なんとあなたからいただいた毛髪と現場に落ち

ていた毛髪が一致しました。警察は相崎楓が殺人犯としての考えを強め、逮捕に乗り出しましたよ。ご協力、感謝いたします」

「……帰ってください」

「ええ、それでは」

第8話 学校

翌日。

今日も学校を休もうとしたら、さすがに般若と化した母さんに家を追い出された。

制服など、学校に必要な物一式と一緒に屋外に放り出される。

僕は庭の木の陰で着替え、重い足取りで学校に行く。

今日は曇っていて、背景が白黒でしかない。

通り過ぎていく人々も、全員、モノクロの服を着ているのはなぜだろうか。

ふらふらと、蛇行しながら道を歩いて行くと、校門の近くで肩に手を置かれた。

振り向くと、それまで笑顔だった明の顔が一瞬にしてひきつる。

「大丈夫か、真田？」

「……なにが？」

「なにがってお前……」

そこまで言っただけ明は言い淀む。

僕の顔をちらちらとストーカー中の変人みたいに窺ってくると、背中をバンバンと叩いてきた。顔には無理やり作ったような笑顔が浮かんでいる。

なんだどうしたんだ、明。

そんなに叩いても打楽器みたいな良い音は出ないぞ？

「あはは。お前の死んだ目は今に始まったことじゃないもんな」

「そうだね」

「いつもより数倍、目が濁っているけど、それは気にすることじゃないもんな！ 心なしか、目の下に隈があるけど、ゲームのやり過ぎには注意しろよ？」

「……今日は凄く曇ってるね明」

なにを言っているのか分からないぞ。

だから適当に話題を変えた。

しかし明はそんな僕の言葉に驚愕を露わにして、空を仰ぎ見る。それからもう一度僕の顔を見てきて、心配そうに眉をよせた。

「お前、本当に大丈夫か？ 今日晴天だぞ？」

「え？ 明こそなに言ってるの？ だって、背景だって白黒になるくらい曇ってるじゃないか。明の顔もなんか白いよ」

「……変な冗談止めるよ。じゃあさ、これ何色に見える？」

明はポケットから携帯を取り出して僕に見せてくる。

なんて質問出してるだよ、明。こんなの考えるまでもないだろう？

「黒」

「……赤だよ」

「黒だよ」

「赤だって！」

あれ？ おかしいな。どっからどう見ても黒じゃないか。明の方こそ、おかしいんじゃないの？

「お前、病院に行った方がいいんじゃないか？」

「なに言ってるの。悪くもないのに病院行ったら、ただの営業妨害じゃないか」

「いや、妨害にはならないと思うけど……。って、そんな事じゃないって！ お前、今日はなんかおかしいぞ！ どうしたんだよ！」

「あはは。大丈夫大丈夫。どこかの誰かさんと比べたら、僕は正常だよ」

「おい！ あいつはなにやってんだよ！ なんでこんな状態のお前を放っているんだよ！」

僕の肩を掴んできた明に、首を傾げる。

「……あいつって？」

「あいつだよ！ あいざ……」

「やめろ！」

僕が出した大声に、明はビクツと震える。

「あいつの名前を出すな！ ……もういいから、僕なんか放つとい

てくれ。迷惑なんだよ！　いつもいつもなれなれしく僕に話しかけてきて！　お前なんて僕は嫌いだ！　もう話しかけてこないでくれ！」

驚きに身を固くしている明を放って、僕たちのやり取りをみていた登校中の生徒から逃げるように僕は走りだした。

教室内の自分の席に倒れ込むようにして座り、顔面を机の表面にくっつけてうなだれる。

なにやってるんだ僕は……。明は心配してくれていたのに、なんであんな事を言ってしまったんだ。

あいつの名前が出そうになった瞬間に、頭に血が上って、そこから訳の分からない言葉を並べて。

完全に八つ当たりじゃないか。

こんな僕にも親しく接してくれる数少ない友人なのに。

「あー、もう」

呟き、嫌な事を忘れてしまおうと目を閉じる。

そこで、壊れた前の携帯からカードだけ取って、古い方に入れて使えるようにしておいた携帯がぶるぶると凍死寸前の動物みたいに震え始める。

動くのも億劫だったけど、それを取り出して名前を確認しようとしたけど登録してない番号だった。

「……」

すぐに電源ボタンを押して通話を拒否した。

それでも何度もかかってくる電話。わずらわしくなったので、電源をオフにする。

それから、もう一度、ゆっくりと目を閉じた。

これで安らかに眠ることができると思いながら、ゆっくりと意識が浮遊するような心地よい感覚を味わっていると、校内放送を知らせる音が、スピーカーから流れる。

『真田恭史くん、三年生の真田恭史くん、至急、職員室まで来てください』

寝たふりをしてそれを聞き流した。

その放送は、短い休み時間のたびに流れてきたけど、僕は無視し続け、そして昼休み。

購買にパンを買いに行こうと思い、教室を出る。

だけど購買は人が群れていたもので、外にあるコンビニに買いに行く事に。

生徒玄関で靴を履き替え、校門から外に出る。

「おや、真田くん」

そこで呼び止められた。

僕は彼の方をチラリと見てから、また歩き出す。

「おやおや、無視ですか。さっきの電話もそうでしたし、校内放送もそうでしたね……。ああもう、どこまでワタクシを興奮させれば気が済むんですかあなたは」

このまま無視しても付きまとわれるだけだと悟ったので、僕は無言で彼に振り返る。

「くつくつく。さて、ワタクシになにか聞きたいことはありますか？」

「スリーサイズは？」

「計ったことありませんね。ええ、ワタクシ男なので。ちなみに真田くんは？」

「胸は小さい方が好みですね」

「ああ、どんな女性の体型が好みなのか聞いてきてたんですね？ワタクシはですね……」

「別に知りたくないです」

「……………そうですか。まあ、それはそうと、あなたに用件があったんですよ真田くん」

「なんですか？」

「あなた、前に死んで当然の犯罪者は殺されても文句は言えない、的な事を言っていましたね？」

「あなたにそんなことを言った覚えはありませんが」

「そんな些細なことはどうでもいいので。じゃあ、仮にですよ？」

「一般人が殺された場合は、あなたはその犯罪者にどういう感情を抱きますか？」

「不慮の事故で死なせてしまった場合はしょうがないですけども、故意にやった場合はその遺族に殺されてもしょうがないと思いますし、どうせなら死んで欲しいと思います」

裏上さんは、「くつくつく」と例の嫌な笑みを浮かべる。

「本当にあなたはワタクシに似ている」

「止めてください。自殺しますよ？」

「おや、それは中学時代にも言われましたね。触ったら自殺するのかなんとか。なんかそういった都市伝説とか学校の怪談的なもの一つとして数えられてましたからね、ワタクシ」

存在からして嫌な人だからねこの人は。恐怖の対象になるのは当たり前だろう。

「それはそうと真田くん。あなたに良い情報を教えましょう」

「……なんですか？ まさか、なんで教えていないはずなのに、あなたが僕の携帯番号を知っていたというストーリーカー疑惑を解消してくれるんですかね？」

「それは企業秘密です」

裏上さんは片目をつぶってそう言った。

僕としては海に沈めながらゆっくりと問い質しておきたい事実なのだが、そんな気持ち悪い反応をされてしまったはどうでもよくなくなる。

「あなたにとっては本当に有益かもしれないですね。それとも、無益かもしれないです。まあ、どちらになるかはあなた次第という事で」

「コンビニに行きたいんで早くしてください。あなたのほざく言葉に興味なんてありませんので」

「おやおや。前より嫌われてしまいましたね。なんででしょう？ 軽いスキンシップでみぞおちの辺りを何度も殴ったことが悪かったんですかね？ いやいや、まさかですよ。そんなことで怒るなんて幼稚すぎます」

「どうでもいいですから。早く用件を」

「それもそうですね。ワタクシもまだ用事あるんで、こんな生意気な子供を相手している時間はありません。それでは言っちゃいますジャジャン！ と裏上さんは声を張り上げる。

「ワタクシと似ているあなたに朗報です。ワタクシに似ているという事は、あなたの大嫌いな不同集成にもよく似ているという事になります」

その言葉に一瞬だけ思考が跳んでなにも考えられなくなる。

だけど数瞬後にはゆっくりと息を吐いた後に冷静さを取り戻す。

「……どういう意味でしょうか」

「なに、簡単な事ですよ」

僕の反応を見て、面白がるように笑う。

「ワタクシ、以前この街に不同がいたときに会っているんですよ。それで捕まえようと追いかけてたら、彼が逃げる場所がなぜかすぐに頭に浮かんできて、実際、そこに行くといえるんですよ。波長てきなものが同じなんでしょうね。思考とかそいつた回路てきな意味で」

「……それで、なんで僕があんたら犯罪者集団と似ている感じになるんですかね？」

「くつくつく。だから言ってるじゃないですか。あなたとワタクシは考え方が非常によく似ています」

いや、言っていないよ。聞いたことないよそんなの。

「先ほどの質問と、以前の死刑制度の考え方。実はワタクシもほぼ同じなんです」

「あれはあなたが勝手に僕の心情を捏造してたんじゃないですか。僕の考え方は全然違いますよ」

「いえ、あれで合ってるはずですよ、嘘つきさん」

「合ってるんです。全般的外れですね。ダーツやろうとしてのめがけて投げたら、なぜか背後の壁に矢が突き刺さるくらいの外れです」僕はこちらとばかりに嘆息する。

でも、それでも僕はなんとなく分かった。

この人の嫌な笑みをみるたびに感じていた既視感の正体が。

あれは、昔に一度だけ見たことがある、不同集成の笑みにそっくりなんだ。

だから、僕はこの人のことがこんなにも嫌いなんだ。大嫌いなあいつに似ているから。

「おや、どうかしましたか？」

「いえ、別に」

僕は裏上さんから目を離して、さっさと歩き始める。これ以上、こんな人と話す必要はない。

背を向けた僕に、裏上さんは最後に一つだけ、と言って来た。

振り向いて答える。

「なんですか？」

「実はこれが一番言いたかったんですよ、真田くん」

隠し切れない興奮を裏上さんは身をくねらすことによって表現する。気持ち悪い。

「くつくつく。被害者の身元が分かりましたよ？」

「……どの被害者でしょうか」

「この前の廃屋で殺された被害者です。名前は羽賀 ハガケイコ 恵子。ＯＬです
すね」

「……それがどうかしましたか？」

「いえいえ、ただ、被害者は一般人だと伝えたかっただけです」

「そんなの知ってましたけど」

「えー」

裏上さんはがつくりとうなだれた。さっきの言葉を聞いた僕の反応を想像して勝手に楽しんでたのだろう。

だけど動じない僕に、彼は落胆したのだ。

「そうですかー。つまらないですね。……それじゃ、ワタクシはこれで」

「はい」

本当は知っていたというよりも、なんとなくそう思っていただけだ。

だから、僕は、彼女を拒絶した。

電話であんなことを言った。

だから、あんな真相を言われたところで、僕は全く動じない。

「……それでも」

間違っついていてほしかった。

いつもは全く役に立たない直感が、なんでこういうときに限って正解するんだ。

コンビニでパンを買って教室に戻ると、みんなが僕の方を一斉に見てきた。

ひそひそとなにか話している。

気にはなっただけども、無理やり気にしないことにして自分の席に座る。

暇なので携帯にイヤホンを差し込んで、ワンセグにする。

適当にチャンネルを変えていくと、急に見覚えがある土地が目に入った。

そこは僕がいつも通る位置にあるボロアパートだった。

モザイクがかけられて全体像は分かりにくくしてるけど、それでもすぐにそれくらいは分かる。

マイクを持った女レポーターが興奮したように早口でまくしたてている。

『警察が最近多発している殺人事件の重要参考人として、市内に住む少女を捜索しています！この事件は五月に入ってから三件起きているもので……』

「……」

無言で顔を上げると、クラスみんなは携帯を持っているか、隣にいる人のを覗き込み、そして僕の方をチラチラと見てきていた。

「……気分悪い」

思っている事があるのなら直接言ってくればいいのに。

わざわざ腫れ物を扱うように遠くから眺めてきて、こそこそひそひそと。

「バツカみたい」

鞆を持つて立ち上がると、またクラスから視線が集まった。

横に座っている女子が軽く悲鳴を上げて逃げ出す。

僕は犯人じゃないよ。

それとも共犯者だと思われてるのかな？

乱暴に扉を開けて、そして勢いよく扉を閉める。自分の鼓膜が少しだけ痛んだ。

「……あー」

ダメだ。感情が抑えきれなくなってきた。

昔にもう表に出さないってきめてたアレが、いつもの性格を押しつけて表面に出てこようとする。

あんな感情が表に出てきても良い事なんてなに一つないのに。

玄関で靴を履き替えて外に出る。また裏上さんがいるかと思ったけども、今度はいなかった。

歩いて校門のところに行くと、声をかけられる。

「あつ、真田さん」

「……どうも」

口にチャックちゃんだった。

制服に身を包んだ彼女は、風になびく髪を手で押さえながら僕の方に寄ってくる。

下級生のはずなのに、なんだか大人の色気を発する少女だ。

周りを見ても、誰もいない。

どうやら彼女一人のようだ。

「相変わらずの魚の死んだような目ですけど、今日は生氣まで死んだような感じですね。事件の事が影響してるんですか？」

「……君は、僕が怖くないの？」

僕の問いかけに、彼女は首を傾げる。

「怖い……と言うと？」

「ニユースとか観たでしょ？ その関係で」

「ああ、これですか」

携帯を開いて、テレビを起動させた口にチャックちゃんは僕に画面を見せてきた。

そこには先ほどの番組とは違うものの、同じような内容を放送しているニユースが映されていて。あいつのアパートを背景にしていた。

僕は彼女の携帯の電源ボタンを連打してその画面を消すと、ゆっくりと目をつぶった。

「うん、まあ、その事件で。僕が共犯者っていうこともありえるでしょ？」

「いいえ、ありません」

彼女ははつきりと、なんのよどみもなく、心底そう思っているように断言した。してくれた。

だけど、なんで？ なんでそう信じることができる。僕と彼女は前に一度だけ会ったことがある関係で、ほぼ初対面といってもいいぐらいなのに。

そんな得体の知れない男を信じる理由は？ 一体、どこからそんな根拠がくるの？

「あつ、もしかしてほぼ初対面だとか思ってます？ その二ワトリ

並みの記憶能力を直したほうがいいかもしれませんね」

「……初対面じゃないの？」

「違いますよ」

彼女は、ゆつくりと微笑む。大人びた笑顔だった。

「初対面だったら、私が去年の真田さんの行動を知ってるはずないじゃないですか」

「……あの、文化祭準備の時に一人で帰ろうとしたっていうやつ？」

「ええ。まあ、まだ他にも色々ありますが。それが一番分かりやすいですかね。あなたの頭のレベルに合わせるのも大変ですね」

「……なんで僕のこと知ってるの？」

「覚えてないんですか？ ああ、覚えてないから初対面だと思ってたんですもんね。……まあ、そんなのはどうでもいいことです」

とにかく、と彼女は頷く。

「私は、真田さんが事件を起こしたり、その片棒をかつぐことがないって分かっているんです。信じてます。むしろあなたは、そういった行為を異常に嫌う傾向があります。その理由は分かりませんが、それでも言えるんです」

一息吸って。

「あなたは絶対に犯罪者にはなりません」

「……そう」

「ええ、だから私はあなたが怖くありません。共犯者でも実行者でも犯罪者でもないって信じてますから」

「……そう」

なんで彼女がここまで僕のことを信頼してくれているのか分からないけど、それでもこの言葉は素直に嬉しかった。

その言葉を飲み込むと、さっきまで腹の底で暴れまわろうとしていた黒い感情を、全てとはいわないまでも洗い流してくれた。

僕は彼女を見つめる。彼女も微笑んだまま、僕を見てきていた。

「君、名前は？」

サカシタ チサト
「坂下 知里です」

「そう。ありがとね、坂下さん。おかげで気分が楽になった」

「全く、先輩のくせに手間がかかる人ですね、あなたは。どうですか？ 留年して、私と一緒にのクラスになるっていうのは。面倒ならいくらでも見てあげますよ？」

「……魅力的なお誘いだね。だけど、遠慮しておく。僕は、僕の居場所を守りたいから。壊すところだったけど、それでも今から守りに行くよ」

「そうですか。よく分かりませんが、がんばってください」

「うん」

僕は坂下さんを追い越して、走り出した。

雲が多くなってきた、湿気も充満してきた曇天の下、気分だけは晴れやかだ。

僕は、これから居場所を確保しに行く。

一度は拒絶してしまった、彼女の横こそが、僕の居場所だから。何年も何年も苦勞してきた、やっと作り上げた、そんな居場所を、なんで僕は自分から手放そうとしていたのだろうか。

僕が……真田恭史が、相崎楓だけは、なにがあっても、どんな事が起こっても、絶対に犯罪者にはならないってそう信じてたのに。

学校から走って家まで行く途中、また裏上さんに出会った。

彼はニコニコと気持ち悪い笑みを浮かべながら、僕に近寄ってくる。

「おや、真田くん。どうかしましたか？ そんなに急いで、どこに行くんですか？」

「決まっていますよ。ちよつくら僕なりのハッピーエンドまで向かうだけです」

「……ふむ。相崎楓の居場所ですかね？」

「楓の場所ではないです」

「『楓』……ねえ。気づいてましたか、真田くん。あなた、犯罪者

はフルネームで呼ぶ癖があっただけですよ。それで、今日の昼までは相崎楓のことをフルネームで呼んでいたように感じます」

「僕の心の中を読めるんですかね？」

この人の前でそんな呼び方をした記憶がないのだが。

「それでなくても、君は、彼女の事をあいつだとか彼女とか使って、名前を呼ぼうとしてませんでした。拒絶していたからだと思うんですけど、なんで今になって下の名前で呼んでるんですかね？」

「ちょっと心境の変化がありました」

「……そうですか。まあ、いいです。ワタクシも色々忙しいんですけど、その辺で失礼します」

そう言っても動こうとしない彼に背を向けて、僕はまた走り出す。こいつなんかと話している時間なんてない。無駄だ。不同集成と同類のくせに、僕の時間を奪うな。

あんたは僕からどれだけのものを奪おうとすれば気が済むんだ。背後の、気持ち悪い気配が静かに動いた。僕から離れていく。安心して、僕はスピードを上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1559t/>

君が壊れた世界で

2011年10月31日14時29分発行